



実物のない複製の複製、
起源のない引用の引用



PART I

星野廉



目次

本物「感」と本物「っぽさ」こそがリアリティ ＊	3
心が壊れないために何かにか何かを見てしまう ＊	13
薄いけど厚いというギャグは猫に通じるのか ＊	25
身をかかわして相手を制する ＊	35
連想でつなぐ、まつ ＊	49
音を見る、模様を聞く ＊	63
よむ、読む、訓む ＊	79
目くばせしあう音（連想でつなぐ） ＊	89
影の文法 ＊	103
「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする身振り ＊	113
解くのではなく溶ける ＊	129
言葉の向こうに見える、言葉、現実、まぼろし ＊	137
素描、描写、写生	

*	145
小説をまばらにまだらに読む	
*	159
文字や文章や書物を眺める	
*	175
言葉が世界を見えなくするとき	
*	187
影の精度を向上させる	
*	201
「ない」を「ある」に変える魔法	
*	207
影に影を見る	
*	215
何かに似ている世界、「何か」のない「似ている」だけの世界	
*	223
起源のない反復、手本のない模倣	
*	229
世界は「ある」というよりも「似ている」	
*	235
イメージのイメージ、イメージをイメージする	
*	239
仮象、化象	
*	267
美しいって、何が？	
*	283
現象、現像	
*	293
つながる、かさなる、ふるえる	
*	305

本物「感」と本物「っぽさ」こそがリアリティ

＊

本物「感」と本物「っぽさ」こそがリアリティ

星野廉

2023年5月26日 08:13

移ると言えば、どこからどこかに移るのであろうが、そのどこかを特定することは大切ではない。大切なのはあくまでも「移る」という動きなのだ。ある事態や状況を名詞的にとらえて、「何か」や「どこか」を特定するのではなく、動きに注目するという思考があってもいいと私は思う。

というか、思考においては、むしろ動きのほうが名詞的な固定化よりも主導的な役割を演じている気がしてならない。

(拙文「うつすためには、うつらなければならない」より)

熱、波、声、音、思い、心、気持ち、魂は、伝わり、移り、届き、通じます。

でも、おそらく、伝わらないし、移らないし、届かないし、通じないものがあります。

表情、身振り、文字です。これらは、むしろ、写したり、映すものです。

(拙文「伝わるもの、伝わらないもの」より)

目次

うつる、つたわる

「何か」「何が？」

うつるは、かわる

つたわる

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる

本物感と本物っぽさこそ（だけ）がリアリティ

「似ている」「そっくり」の世界から、「同じ」「同一」を見る

うつる、つたわる

影がうつる、像がうつる、姿がうつる、形がうつる。

声が伝わる、音が伝わる、波が伝わる、熱が伝わる。

「うつる」の例として挙げた言い方に出てくる、影、像、姿、形は、動きを止めて見るものです。連続すれば動きになります。写真と動画が、そうです。

一方の「伝わる」で挙げた、声、音、波、熱は動きとして感知されるものだという気がします。見えないのです。熱が動きであるのというのは苦しい言い方になりますが、熱が伝わってくるからには、感知する側も熱くならなければなりません。これを動きとして見るかどうかですが、無理に辻褄を合わせないで話を進めます。

ここでは研究や探求をしているわけではなく、わくわくを楽しむために言葉をいじっているのです、大ざっぱにいきます。

「何か」「何が？」

姿形がうつる、姿形が伝わる。映像、録画、映写、電線、電波、電信、通信、撮影、複写、複製、保存、移動、拡散、信号化、情報化。

音声がうつる、音声が伝わる。録音、拡大、増幅、電線、電波、電信、通信、複製、保存、移動、拡散、信号化、情報化。

熱がうつる、熱が伝わる。伝導、摩擦、発熱、冷却、温度差、保存。

「何か」を「何？」と追及するのではなく、「何か」として保留したまま、動きに注目してみます。

うつるは、かわる

「うつる」では、「かわる」が起こり、位置関係が維持される気がします。「何か」から、別の「何か」に「うつる」ことにより、「かわる」が起きていますが、対応関係が維持されるのです。

地面に映る木の影。水面に映る空の雲。鏡に映る顔。
写真に写る、写す。写生する（絵）。描写する（絵・言葉）。

「映っている」「写っている」と感じるためには、位置の対応が粗くても細かくてもいちおう保たれていなければならないのです。きょくたんな話がゆがんでいても、下手であっても、大ざっぱであっても、あるいは不正確であっても、映っているし写っているのです。

ゆがみや誤差は、加工や加筆によって、ある程度まで修正できるかもしれません。あくまでも「近似値」なのです。誤差やノイズやエラーがあるのは「うつる」では当然なのかもしれません。

レントゲンやMRIといった、人工的な「影」の中でも最も進化し洗練されたものになると、位置関係という意味での対応は精緻をきわめますが、影であることに変わりはありません。影は現物ではないわけです。言葉が事物ではないのと似ています。別物なのです。

ハイビジョンがフィルムに追いつけないとかいう話を聞いた覚えがありますが、写真や画像についても、たとえどんなに画質が優れてリアルであっても、やはり影は現物ではないわけです。別物なのです。

「うつる」を目的にしているかぎりは「かわる」が起きて別物になっていてもかまわないのです。大切な点だと思います。人は別物であることを忘れるし、忘れた結果気づかないからです。一時的に（あるいは長期にわたり）現物だと思っていることもおおいにある気がします。

つたわる

「伝わる」では、動きや振動や波が上下運動、あるいは線からなる何らかの模様に戻元される気がします。還元という言葉を使ったのは、抽象を意識しています。伝わるものは抽象なのではないでしょうか。

具体的な動きでありながら抽象であるというのは、言葉の上で矛盾して辻褄が合いませんが、言葉と現象がべつべつの論理と文法（比喻です）を持っていると考えれば、不思議ではありません。

別個のもの同士の間で辻褄が合うほうが、むしろうさんくさいのです。

たとえば、人は言葉で現実の辻褄合わせや帳尻合わせをすることに血道を上げています。両者が別物なのにです。それを人は知っているはずなのに、つねには意識しません。言葉で思いの辻褄合わせをすることにも熱心です。冗談ぼく言えば、捏造疑惑です。捏造常習者が言うのですから確かでしょう。

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる

名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる。そんな気がします。

名詞的なものがうつるときには、うつる前のものとうつった後もの間の対応が重視されます。理想は一对一の対応であり、そのありえない理想を指向するのです。絵をイメージしてください。絵はつたわると言うよりもうつる、とりわけ写る、映るのです。図柄や模倣が壊れてはいけないわけです。

一方の動詞的なものがつたわるときには、重視されるのは動きであり、つたわる前後の位置的な対応関係は無視されます。そもそも、つたわる前のものとつたわった後のものの区別さえ大きな意味を持ちません。両者が別物であっても重視されないのです。振動や熱をイメージしてください。

外の音や声（振動）が、室内のここまで伝わってくる。糸電話で声が伝わる。テーブルの向こうに置いた鍋の熱がここまで伝わってきている。

糸電話は「伝える」（振動が）ですが、伝言ゲームは、「伝える」と言うよりも「うつる」（メッセージが）ではないでしょうか。メッセージはつたわるのではなく、むしろうつると、ここではイメージしています。それぞれの動詞の慣用とは異なるイメージですね。自分語的な用法と言えるかもしれません。

本物感と本物っぽさこそ（だけ）がリアリティ

「伝わる」も「うつる」も、置き換えが前提になっています。置き換わらないと伝わらないし、置き換わらないとうつらないわけです。

要するに、本物や起源でなくていいのです。というか、本物や起源が伝わったり、うつるのは不可能ですから、何か別のものに置き換わっていく、つまり代替りのものが本物や起源を演じる、あるいは振りをすると言えます。

「移る・移す」（移動）ができないために、「映る・映す」と「写る・写す」で済ますとか代用するという意味です。

代用は錯覚をまねきます。人は別物であることを忘れるし、忘れた結果気づかないからです。一時的に（あるいは長期間にわたり）現物だと思っていることもおおいにある気がします。

＊

世界や森羅万象と無媒介的に触れあっているのではないため、本物には届きません。時間をさかのぼることはできないので、起源を知ることはできません。自分を納得させるためには、本物も起源も、言葉で「こしらえる」しかないわけです。

本物感、本物っぽさ、本物のようなもの、起源感、起源っぽさ、起源のようなもので我慢するのは、それしか方法がないからです。このことを人は意識しないで知っています（たぶん学習した知識ではないでしょう）。意識するとがっくりきてやる気をなくすでしょう。生きる気力を失うかもしれません。

大切なのは、本物「感」、本物「っぽさ」、本物「のようなもの」、起源「感」、起源「っぽさ」、起源「のようなもの」です。「感」、「っぽさ」、「のようなもの」という意味です。これこそが（つまりこれだけが）、人にとってのリアリティです。

「感」、「っぽさ」、「のようなもの」は空転しそうな語感の言い回しですが、人にとっ

てのリアリティも空回りしているように思えます。だから、人は「リアリティ」に振りまわされつづけているのでしょう。切りがないのです。

「感」、「っぼさ」、「のようなもの」は空転は錯覚そのものです。人は別物であることを忘れるし、忘れた結果気づかないからです。「感」、「っぼさ」、「のようなもの」どころか、一時的に（あるいは長期間にわたり）本物や現物だと思っていることもおおいにある気がします。自分を観察しているとそう思います。

とはいえ、絵に描いた餅は食べることができます。レトリックはさておき、精確に言うと、絵に描いた餅から絵に描いてない餅くらいならたどり着くことができます。「感」、「っぼさ」、「のようなもの」は精度の問題であり、絵に描いた餅を食べることができるほどには精確なのです。さもなければ、人類はとうの昔に飢え死にしています。

「似ている」「そっくり」の世界から、「同じ」「同一」を見る

基本には「似ている」や「そっくり」がある気がします。確認するためには器具や器械や機械に頼るしかない「同じ」や「同一」ではなく。人は印象の世界に住んでいるようです。

そのため、たとえ「同じ」や「同一」というデータやそれによるイメージを得たとしても、それを「似ている」や「そっくり」でとらえる（置き換える）にちがいありません。この置き換えという操作をおこなうことが、人である証左なのかもしれません。

大切なことなので繰り返します。

「〇〇感」「〇〇ぼさ」「〇〇らしさ」「〇〇性」「〇〇的」「〇〇のようなもの」、これこそが人にとってのリアリティなのです。「そのもの」にたどり着けない人類の歴史は、「感」「ぼさ」「らしさ」「性」「的」「ようなもの」——別物であることの隠蔽と粉飾であり糊塗やお化粧です——の洗練の追求だと言えそうです。

本物や起源にたどり着けないことを人は意識していないで知っているわけですが、ときには、あるいは人によっては、それを忘れて「〇〇とは何か?」とか「〇〇の意味はあるのか?」とかという問いを発する場合があるのは、みなさんご承知のとおりです。答

えが出ないことも、ご承知のとおりです。

私たちは、複製の複製、本物や実物のない複製、引用の引用、起源のない引用の世界に生きているようです。

【※今回の記事は以下の「名詞的なものはうつり、動詞的なものはつたわる」に少しだけ加筆したものです。】

(投稿：2023年5月26日 08:13)

うつる # 伝わる # 複製の複製 # 引用の引用 # 本物や実物のない複製 # 起源のない引用 # 言葉 # 日本語 # 音声 # 文字 # 動詞 # 名詞 # 本物 # リアリティ

心が壊れないために何かに何かを見てしまう

＊

心が壊れないために何かに何かを見てしまう

星野廉

2023年4月21日 07:51

瞳と鏡で私が連想するのは、膜と面です。

網膜、鏡面。瞳や鏡を覗きこんだとき、見える姿は、膜や面に映った像・影なのでしょう。

薄い膜と薄い面に映っているのですから、姿や像や影も薄いはずですが。それなのに、奥行きや深さや遠さや隔たりを感じるのは、こしらえているからではないでしょうか。

(拙文「鏡「面」画「面」顔「面」より)

目次

目がドラマや物語の芽を生む

大きいと小さいがドラマや物語を語り始める

平面上で、奥深さ、深さ、背後、背景というドラマと物語が浮かぶ

思わず「深い」とか「奥行きが感じられる」と言ってしまう

何かに何かを見て、気持ちを静める

目がドラマや物語の芽を生む

何かに何かを見る——。前者の「何か」と後者の「何か」は違います。こうなるのには何か理由があるのではないのでしょうか。

壁の模様でも、天井の染みでも、空の雲でもかまいません。人は何かに何かを見ます。見えるというほうが適切かもしれません。見えてしまうのです。いや、むしろ「現れる」というべきでしょうか。

● ●

上の二点を見て顔を見てしまう人もいるでしょう。そうでない人もいるでしょう。「二、2、II」という数（すう・かず）を思いうかべる人もいるでしょう。人それぞれです。

もし、二点が目に見えて、そこから目が見えることから顔を見てしまうとすれば、誰かに似ているとか、あるキャラクターに似ているとか、ある人形に似ているという具合に、イメージが進んだり増えたりしそうです。

連想した顔が記憶を呼びさましたり、その顔がなんらかの光景へと発展することもありそうです。

連想が連想を呼ぶ。連なる。移り変わる。動きが生まれる。関係性が生じる。

ドラマや物語の芽が生まれる。目が芽を生む。そんな気がします。

大きいと小さいがドラマや物語を語り始める

● ●

今度は黒い点が並んでいます。大きさの違いを見て、大小をイメージする人がいるかもしれません。大きい、小さい、ですね。

重い、軽い。親と子。私とあなた。私とお母さん。私とあの人。男と女。おとなと子ども。人と犬。人とペット。この国とあの国。

遠近。左右。太陽と地球。地球と月。陰陽。

「仲がいい」。「にらみ合っている」。「一方が叱られて縮み上がっている」。「ウィンクした目だ」。「トンネルの出口と入口かな？」

いろいろなイメージを呼びさましそうです。人それぞれです。

「大きい」と「小さい」という差が、ドラマや物語を始動させる。そんな気がします。

平面上で、奥深さ、深さ、背後、背景というドラマと物語が浮かぶ



上の●と・をご覧ください。●が手前に、・が後ろに見えるかもしれません。人それぞれですけど、そう見えるという前提で話を進めます。

*

平面にある大きさの異なる二点を、奥行きとか遠近に置き換えているわけです。奥行きとは、奥深さ、深さ、背後、背景、隠れているもの、隠されたもの、というふうに連想を呼びさます気がします。

向こうから迫りかけて来る、トンネル、望遠鏡、顕微鏡、衍、エコー、

太陽と惑星、進化、だんだん大きくなっていく、だんだん小さくなっていく、遠くなっていく、近くなっていく

向こうにあるのは何だろう、誰だろう、逃げていく、追いかけて

「おーい!」「何だーい?」「待ってくれ」、「さようなら」ー。子を見送る親、「元気でね」、いつまでも遠くで見ている。

*

ストーリーを感じませんか? 声が聞こえてきませんか?

イメージが膨らむとも言えるでしょう。話がだんだんズレていくとか、話が大きくなるとか、そんな言い方も可能でしょう。

要するに、思いやイメージが連続して置き換わっていくわけです。

たぶん、コマ送りやバトンを手渡すように、つぎつぎ＝継ぎ継ぎ＝接ぎ接ぎ＝注ぎ注ぎ＝告ぎ告ぎ、と連なっていくのでしょう。すると、筋書き、つまり物語とドラマが生まれます。

映画や漫画やアニメのコマ送りという原理が、これでしょう。

(私は詳しくないのですが、音楽も、余韻や予感や必然性や筋をはらんだ音が、つぎつぎ＝継ぎ継ぎ＝接ぎ接ぎ＝注ぎ注ぎ＝告ぎ告ぎと連なっていく気がします。)

平面上で、奥深さ、深さ、背後、背景というドラマと物語が浮かんでくるようです。平面が立体化されるとも言えるでしょう。

思わず「深い」とか「奥行きが感じられる」と言ってしまう

“水が来た。”

三島由紀夫『文章読本』「第三章小説の文章」より

「これはね、森鷗外作『寒山拾得』から引用したもので、三島由紀夫の『文章読本』で激賞されている文なんだ」

「そうかそうか、さすがに名文だね。短いけど、すごい。なんというか、こう、気品が漂ってくるのよね」、「やっぱりね。違いますよ。短いけど、そんじょそこの文章とはぜんぜん違う。なんというか、こう、文体が違います」、「分かります。そんな気がしたんだよな。言葉に独特のたたずまいがあるでしょ？　なんというか、こう、匂い立つ教養を感じるんだ」

「なるほど、深いねえ。短いけど奥行きが感じられるんだ」

*

「ねえねえ、お父さん、お隣の〇〇くんが作文でこんな文を書いたのよ」

「なにに。『水が来た。』？ ふーん。やっぱり、小学生の作文だね。薄っぺらいし浅いんだよ」

＊

「ねえねえ、お義父さん、うちの〇〇ちゃんが作文でこんな文を書いたのよ」

「どれどれ。『水が来た。』？ おおお！ あの子は天才だ！ なんか、こう深いものが感じられる」

＊

『水が来た。』は文字からなる文字列でありセンテンスであり、日本語の表記を学んだ者であれば誰もが書き写せるし、そこそそ学んだ人がなんとか書き写すことも可能でしょう。もちろん機械に書かせることもできるし、AIが書いた文であってもぜんぜんおかしくありません。

文字には複製しても「同じ」どころかほぼ「同一」であるという驚くべき性質があります。ところが、同じ文字列の文章であっても、それを純粋にそのものとして読むことは難しく、人は必ずその文字列に何らかの印象とイメージをいだいてしまいます。

これは複製として鑑賞されるのが一般的である、絵や写真や動画や楽曲であってもそうでしょう。

誰が書いたのか、誰が撮ったのか、誰がつくったのか、誰が歌った、あるいは演奏したのかという知識で、印象が異なるのです。

純粋な鑑賞という体験（そんなものがあればの話ですけど）ではなく、教わった知識（作品の背景についての勉強を重視する人もいるでしょう）によって印象や感想が左右される点が大切だと思います。

「〇〇っぽい」や「いかにも〇〇らしい」や「〇〇のような」や「いかにも〇〇みた

い」のように。

＊

作品を鑑賞して評価を下したというよりも、たいていは知識として得た情報が作品の印象をつくる。それだけでなく、得た情報が間違いだったと言われると、手のひらを返したように印象が変わるというわけです。

「そうかあ、やっぱり〇〇だね」や「なるほど、さすがに〇〇らしい」のように。この場合、〇〇には機械や AI も、もちろん入ります。

人が AI の作品を評価するのはきわめて難しいでしょう。人類初の体験で慣れていないからです。冷静な判断ができないとも言えます。

人は何かに何かを見てしまう。そのものを見ることはできない。自分が知っているもの（知っていると思っているもの）、自分の見たいもの、自分にとって都合のいいもの、自分にとって快であるものを見てしまう。

＊

「深い」は「美しい」と並ぶ最高の褒め言葉です。私みたいなへそ曲がりでも、自分の書いたものが「深い」とか「美しい」と言われれば、小躍りして喜びます。

人は、薄い紙や画面の上のさらに薄いもの——たとえば言葉や映像——に、深さや奥行きを見てしまうのです。これは自分を観察して得た実感です。

また、たとえ見てしまわなくても、その時の乗りで「深い」とか「奥行きが感じられる」と思わず言うってしまうのです。それが人です。

何かに何かを見て、気持ちを静める

さきほどの二点をもう一度見てみましょう。

.



私なんか、遠くで見守っている存在と見守られている存在の関係を勝手に想像して涙ぐみそうになりますが、遠くからじっと監視されているイメージを呼び覚まされて身震いする人がいても不思議ではありません。

*

いや、そんなふうにはぜんぜん見えないけど。純粹に黒い丸と黒い点にしか見えない。

いや、黒い丸と黒い点には見えないけど。画素の集まりにしか見えない。

以上のような意見や感想があっても私は驚きません。人は印象の世界に住んでいるからです。印象やイメージは、人それぞれです。

*

何かに何かを見る。見てしまう。

見慣れない何かに自分の知っている（馴染みの）何かを見る。見たいもの（自分に都合のいいもの）を見る。見てしまう。

どうして、見てしまうのでしょうか。

心が壊れないためにそうしているように私には思えてなりません。自分を観察した結果、そのように思います。

見知らぬ「何か」、初めて見る「何か」ほど不気味であったり、恐ろしいものはありません。名前がないからです。そこにドラマや物語がないからです。

たとえば、その名が「怪物」や「モンスター」であっても、名前がない「何か」よりは
ずっと不気味ではないし、怖くもないです。

*

面（具象・そのもの・そこにあるもの）に立体（抽象・その向こうにあるもの・そこに
ないもの）を見てしまうとも言えます。

人がのっぺらぼうな面——意味が不在である面（無意味な面ではなく）——に、顔や
模様や奥行きや深さや遠近や背後を見てしまうのは、心が壊れないためなのです。

意味は「そこにある」のではなく、「人がそこにつくる」というのが適切な言い方だと
私は思います。「意味がある」という言い方は無意味＝ナンセンスだという意味です。

上で挙げた例で言うと、単なる点、単なる画素の集まりほど、人の心を壊すほど不気
味なものはないと言えるかもしれません。

「単なる○○」「○○だけ」の、○○には名前もなく、意味が不在でドラマも物語もな
いからです。

逆に言うと、名前と意味とドラマと物語が、人をいい意味でも悪い意味でも「深淵」
——日常空間にぽっかり空いたブラックホールのような穴——から守るのです。

*

深い

深く

深さ

深み

深い淵

深淵

ブラックホールような穴

ニーチェの言ったあの深淵

私には下に行くほど、深く感じられます。

語呂のよさや字面に左右されて、より「深い」と感じたり（つまり、上で述べた「水が来た。」のように印象とその時の乗りで「深い」と感じているだけ）、自分にとってお馴染みの安心できるイメージに置き換えて満足しているのでしょう。

それが人です。

きっと深い穴を直視して壊れたくないのです。

*

話は飛びますが、上で挙げた文字列を、ニュートラルな情報のデータとしてフラットに処理するのが、機械であり AI なのでしょう。機械や AI にとっては、深さも深みも奥行きもありません。

機械や AI は深い穴を直視して壊れることはありません。物理的に壊さないかぎり壊れないのです。

深さや深みや奥行きとは無縁の機械や AI が書いたものに、深さや深みや奥行きを見てしまうのが人です。文字だけでなく、映像や音楽でも同じでしょう。

それが人です。

ドラマ # 物語 # 意味 # 無意味 # 連想 # イメージ # 印象 # 森鷗外 # 三島由紀夫 # 文章 # 平面 # 立体

薄いけど厚いというギャグは猫に通じるのか

＊

薄いけど厚いというギャグは猫に通じるのか

星野廉

2023年4月20日 07:40

瞳と鏡で私が連想するのは、膜と面です。

網膜、鏡面。瞳や鏡を覗きこんだとき、見える姿は、膜や面に映った像・影なのでしょう。

薄い膜と薄い面に映っているのですから、姿や像や影も薄いはずですが、それなのに、奥行きや深さや遠さや隔たりを感じるのは、こしらえているからではないでしょうか。

(拙文「鏡「面」画「面」顔「面」」より)

目次

言の葉

ぺらぺらだらけ

ぺらぺらはうつる

言の葉を聞く

言の葉を書く、写す、映す

言の葉を見る・読む

言の葉を写す、言の葉を移す

ぺらぺらしたもの同士が重なる

薄いぺらぺらした網（ネット）にうつる、ぺらぺらしたものたち

ぺらぺらというイメージの韻

人は印象の世界の住人

言の葉

「言の葉」という言い方の「葉」ですが、これも私には薄い面であり膜、つまりぺらぺらに感じられます。

葉には端や刃や羽とのイメージの韻——「は」という音だけでなく——も感じます。端っこ、鋼を薄くのばした刃、薄く軽い羽という感じ。形も似ている気がします。

学問的な関連については知りません。あくまでも個人的なイメージの連想です。

さらに「言の葉」は、ヨーロッパの「言語」における「舌」のぺらぺらとイメージの韻を踏んでいる感じがします。英語でいえば、language と tongue です。これは語源でつながっています。

やっぱり、「言葉・言の葉・言語」はぺらぺら。そんな気がしてきました。

ぺらぺらだらけ

いま私は薄い液晶のスクリーン上に表示されている自分の入力した文字を見つめています。視覚的に厚みも深みも感じられない、つまり立体感に欠ける文字です。

ということは、ひょっとすると文字ってぺらぺらなのではないでしょうか。これまで考えたことがありませんでした。

ぺらぺら（紙や画面）にのっかかったり、うつったり、染みついたり、こびりついたり、貼りついたりしているのですから、文字はぺらぺらなはずです。

私は言葉を広く取っています。話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、視覚言語と呼ばれることもある表情と身振りも言葉と考えて生活しています。

＊

で、思ったのですが、言葉つながりの事物や現象はぺらぺらだらけではないでしょうか。

舌もぺらぺら。発したとたんに消える声の存在感も薄くてぺらぺら。空気の振動である声をとらえる鼓膜もぺらぺら。話し言葉のことです。

手のひらもぺらぺら。手を使って書いたり入力する文字もぺらぺら。紙もぺらぺら。液晶画面もぺらぺら。

顔の皮膚を舞台とした表情もぺらぺら。

ぺらぺらとした網膜に映ってたちまち消える身振りもぺらぺら。

めちゃくちゃこじつけて、ごめんなさい。こんなことを書いている私もぺらぺら。さらに言うなら、へらへらでへろへろ。べろんべろんでないだけ、まし。

ぺらぺらはうつる

言葉は「うつる、写る、映る、移る」と親和性があるようですが、ぺらぺらは「うつる」と親和性がある、とほぼ同義ではないでしょうか。

ぺらぺらな言葉から意味とイメージが立ちあらわれる。というか、人はぺらぺらに意味やイメージを取る。

意味自体、そしてイメージ自体は実体を欠いている。実体を欠いているのだから、その存在感はきわめて薄い。つまり、意味とイメージもぺらぺら。

ぺらぺら（言葉）がぺらぺら（意味）を生んでいる。そうとしか思えません。

*

人はぺらぺらに取り憑かれているようです。

ぺらぺらをせっせとつくり、ぺらぺらを写して増やし拡散し保存し継承し、ぺらぺらに見入り、さらにぺらぺらをつくる……。これはスマホやパソコンをつかって、私たちがネット上でやっていることです。

ぺらぺら（画面）にはぺらぺらな文字や絵がうつっていて、人はそこに厚かったり深かったりする「何か」を見ているようです。

さもなければ、飽きもせずにこれだけぺらぺらに執着するわけがありません。なにしろ、人は忙しいしせっかちな生き物です。

言の葉を聞く

震える、届く、震える、聞く。

ぺらぺらした舌が放した（話した）、ぺらぺらした声が、ひらひらと空気を震わせながら、ぺらぺらした耳たぶに届き、その奥にあるぺらぺらした鼓膜を震わせる。

言の葉を書く、写す、映す

話す、放す、映す、写す、書く。

ぺらぺらした舌が放した（話した）、ぺらぺらした声が、今度はぺらぺらした文字という影に落とされ、その影がぺらぺらした紙に映る、写る。つまり書かれる。

言の葉を見る・読む

映る、見る、眺める、読む。

ぺらぺらした紙に映った（書かれた）文字が、ぺらぺらしたまぶたの奥にある、ぺらぺらした網膜に映る。つまり、見る、眺める、読む。

ひょっとすると、見られた、あるいは読まれたときには、ぺらぺらした網膜に映る影が、ぺらぺらした心のスクリーンに映るのかもしれない。

心のスクリーンに映るのかもしれない意味やイメージや物語は、残念ながら目には見

えない。

言の葉を写す、言の葉を移す

写す、移す、掻く、書く、染みる、刻まれる、印刷する。

ぺらぺらした紙に写った、移った、掻かれた、書かれた文字（インクの染み）が、別のぺらぺらした紙に写される。筆写や印刷。

＊

移す、広げる、配布する。

ぺらぺらした紙に写った（書かれた）文字（インクの染み）が、紙にのったまま、あちこちに移される。配布。

＊

写す、書く、染みる、移る、つながる、かさなる、翻訳する。

ぺらぺらした紙に写った（書かれた）文字（インクの染み）が、別のぺらぺらした言の葉の文字に移されることもある。翻訳。

ぺらぺらしたもの同士が重なる

英語と日本語に話をしぼりますが、単語、フレーズ、センテンス、文章、あるいは作品のレベルで、対訳でくらべた場合に、両者は別物（同一ではないという感じ）であり、「似ている」でも「同じ」でも「違う（異なる）」でもなく、強いて言えば「つながっている」と感じます。

翻訳は「つながっている」とか「かさなっている」というのが私の印象です。

ぺらぺらした言葉同士が重なるのが翻訳ではないでしょうか。一方を見ると、もう一方が透けて見えるのです。

＊

ほんやく（translation）は翻訳とも反訳（速記なんかでは「ほんやく」という作業もあるようです）とも書くみたいですが、「ひるがえす・翻す」が見えて、そのイメージにわくわくします。

ひらりとひっくり返すとか裏返すという感じです。

ぺらぺらをひらりとひっくり返しても、やっぱりぺらぺら。

薄いぺらぺらした網（ネット）にうつる、ぺらぺらしたものたち

投稿する＝複製する＝拡散する＝保存する、映す、写す、移す。

デジタル化された情報（信号）が、ぺらぺらしたスクリーンに視覚化されて映る文字（画素の集まり）は、同時に、別のおびただしい数の端末のぺらぺらしたスクリーンに視覚化されて映る。

ネット上では投稿、複製、拡散、保存がほぼ同時に起きます。

薄いぺらぺらした網（ネット）で、うつる、映る、写る、移る、ぺらぺらしたものたち。それら（文字・映像・音声）は広い意味での言葉だと言えそうです。

ぺらぺらというイメージの韻

以上、ぺらぺらという個人的なイメージを感じる、言の葉、舌、まぶた、耳たぶ、目の網膜、耳の鼓膜、紙、スクリーン、ネット・網、声、文字といったものたちを、ぺらぺらという言葉に掛ける形で、遊んでみました。

いや、むしろ遊んでもらったという気がします。あくまでも戯れです。ぶっちゃけた話がこじつけです。

ぺらぺらという動き（これが動きであればですが）やイメージのシンクロという言い方もできるかもしれません。

この「似ている」のシンクロを、私はイメージの韻と呼んでいます。「似ている」だから印象であって、関係あるか（似ている以外につながりがあるか）ないかは関係ありません。

人は印象の世界の住人

ところで、言の葉、舌、まぶた、耳たぶ、目の網膜、耳の鼓膜、紙、スクリーン、ネット・網、声、文字は似ていますか？

いま挙げたものには、見えないものがありますが、見たときに似ていると感じますか？

でも、イメージの韻でつなげると似ているような気がしてきます。少なくとも、私にはそうです。

＊

猫という言葉と猫という生き物は似ていませんが、言葉を使っている分には、似ていないという感覚はないと思います。

たぶん、猫という言葉と猫という生き物は似ているのです。いや、きっと同じなのです。人にとっては。

だから、「言葉と事物とは違うんだよ」なんて当り前のことを書いて、わざわざ念を押したフランス人がいたのでしょうか。

ミシェル・フーコー、渡辺一民／訳、佐々木明／訳『言葉と物〈新装版〉—人文科学の考古学—』| 新潮社

ベラスケスの名画「侍女たち」は、古典主義時代における人間の不在を表現している。実は「人間」という存在は近代に登場したもので

www.shinchosha.co.jp

河出文庫意味の論理学〈上〉

ルイス・キャロルからストア派へ、パラドックスの考察にはじまり、意味と無意味、表面と深層、アイオンとクロノス、そして「出来

www.kinokuniya.co.jp

*

似ているって不思議です。不思議なのは、たぶん人にとって当たり前すぎるからでしょう。人にとって謎（分からないとか知りえないという予感）とは不思議という感覚なのかもしれません。

人は似ているを基本とする印象の世界に生きている。そんな気がしてなりません。

猫を見ていると、この「似ている」世界とはまったく無縁の世界に住んでいるように見えます。

世界がべらべらに満ち満ちている。薄いは厚いでもある。そんなギャグは、ねこちゃんには通じそうもありません。

薄いものに熱中する人に対して、猫はひたすら邪魔をするだけです。私はそんな猫がうらやましくてたまりません。

猫はべらべらの言葉と立体で奥行きのある事物を混同していないもようです。

#猫 # 言葉 # 言の葉 # 言語 # 文字 # 音声# 表情 # 身振り # 画面 # 膜 # 印刷 # インターネット # 複製 # 鼓膜 # 網膜# 紙

身をかわして相手を制する

＊

身をかわして相手を制する

星野廉

2023年4月12日 08:04

目次

大きくて力の強い相手と向かいあったとき

素読

漢文の読み書きはエリートに必須の条件だった

自分が動くことで動かない相手を動かす

遠くにあるものを想像の中で遠隔操作する

現物や実物や本物ではなく、複製を鑑賞する

身をかわし反らせて相手を制する

大きくて力の強い相手と向かいあったとき

自分とは比較にならないほど大きくて力の強い相手と向かいあったとき、どうすればいいのでしょうか。まともに向きあえば、こちらがやられるのは目に見えています。

死んだ振りをする、逃げる、無視する、睨む、にやにや笑う、おべっかをつかう、へそ天になって戦う意志がないのを身をもって示す。

相手とじゃれる、あま囁み程度の囁み合いにとどめる、目を合わせたまま後ずさりする、いざとなったら「窮鼠猫を囓む」でいく。

相手の動きに合わせて、こちらが体を動かし、相手の力を分散する——。そんな武道があると聞きます。

素読

いま頭にあるのは漢文なのです。

私には縁遠い話なのですが、かつてこの国には幼い頃から漢文の素読をやらされて育った人たちがたくさんいたらしいという話を見聞きした覚えがあります。

異国から来た文字で、異国の文法に沿って書かれた異国の文章を、この国の言葉の語順で、ひたすら声に出して読む。形と模様である文字を音に置き換えて（当てて）読む。意味はさておきとにかく音読する。それを何度も繰り返す。これが素読だそうです。

たとえば、夏目漱石や森鷗外はそうした体験というか訓練を受けたそうです。

漢文の素読や漢文の教育の詳細については知りません。私の漠然としたイメージでは、かつてこの国には古代中国語の文語が土着の言葉と並行して使われていたらしい。

具体的に言うと、古代中国語がこの国の為政者たちの作成する公文書に用いられていた。さらに言うなら、いわゆる古代中国語の文字、つまり漢字からひらがなやカタカナが作られた。

簡単ですが、そんなことを学校で習った覚えがあります。

漢文の読み書きはエリートに必須の条件だった

古代中国語が主に書き言葉としてこの国で使われてきたというのですから、それを教えるという習慣があり手法が生みだされたに違いありません。

それが綿々と続いてきて、たとえば慶応3年（1867年）に生まれた夏目金之助（漱石）が漢学私塾二松學舎で漢文を習い、後には漢詩をたしなむまでの素養を身につけたらしいのです。

さらに興味深い話として、漢文を習った後に、漱石が英語を、鴎外がドイツ語を身につけるさいに、漢文の素養が素地になって学習を容易にしたらしいのです。

言われてみれば、西洋の言語と中国語は語順という点で日本語にくらべれば重なる部分が多い気がします。

それだけでなく、理（ことわり）、つまり形式的な論理を支えとする思考という点でも、両者は共通部分が多いと思われまます。

漢文の素養がヨーロッパの言語を学習するさいの素地になる。この説には説得力を感じます。

＊

もっとも漢文の読み書きはエリートに必須の条件であり、ごく一部の国民がその素養を身につけていたことを忘れてはなりません。

昔の人は誰もが漢文を読めたわけではないという意味です。まして漢詩を作れたのは、エリートのうちでもさらにごく一部の文人であったと考えられます。

まことに大雑把な図式ですが、そんな伝統というか「制度」があったようです。

＊

いずれにせよ、現在の日本語と現在の日本の諸制度は漢文なしには、この形では存在していないのであり、漢文を日本語の一部、さらには漢文による古文書を日本文化の一部と見なさないほうが無理があるのではないかと思われまます。

自分が動くことで動かない相手を動かす

自分が動くことで動かないものを動かす――。

漢文のことです。

大陸から持ってきた異物である漢字からなる文章を、列島にある言葉が迎えた。想像するとぞくぞくします。ここからは学校（小学校から高校までです）で習ったことの記憶を頼りに想像します。

文字のなかった列島で話されていた言葉で、文字という異物からなる文字列を読めるようにしたらしいのです。漢文の素読をイメージしているのですが、具体的にどんなことをしたのかは知りません。勝手に想像というか、空想します。

＊

漢字からなる文字列を動かさないで、自分が動いて読んだらしいのです。上から下という順で書かれている文字を、目を上下に何度も動かしたりして、列島で話されていた言葉で読めるような工夫をしたのは、はじめのうちはバイリンガルの人たちだったにちがいません。

バイリンガルではない人たちに、中国語の文章の内容を伝えるためです。さらにはその読み方をなんとか教えるためにでしょう。

しかもエリートだったにちがいません。ごく一握りの文字どおり頭のいい人たちだったと想像できます。

頭がいいというのは、記憶容量が大きく、情報の処理が素速いという意味です。直感力（直観力）や洞察力にも優れていたにちがいません。

素読によって積みかさねられた漢文の素養が、鎖国が終わった明治以降に西洋の言語や文物を取り入れるさいの素地になった。粗っぽい素描というか粗描ではありますが、想像するとぞくぞくしないではられません。

遠くにあるものを想像の中で遠隔操作する

自分が動く、つまり自分の目を上下に動かす（おそらく同時に頭の中と体でなぞる）ことで、自分の外にある動かないものを動かす（もちろんそう思い込むのですが）ことに成功したのです。

自分の外にいる異物を手なづけ、飼いならしたとも言えるでしょう。こう考えるとすごい話です。

＊

「自分が動くことで動かないものを動かす」とは、漢文だけでなく、人の知覚と認知のあり方のことではないかなんて大風呂敷を広げたくくなります。でも、そうじゃないでしょうか。

動か「ない」ものを目で追って、それが動いて「いる」と感じる、言い換えると「ない」を「いる・ある」にするのは、赤ちゃんがふつうにやっていることではないでしょうか。

さらに言うと、赤ちゃんに限らず私たちがふつうにやっていることではないでしょうか。

人は「ない」を「いる・ある」として想像しながら生きています。広義のフィクションのことです。

本を読む、映像を見る（音や声を聞くも含まれます）、音楽を聞く——こうした行為をしながら、人は自分が動いている、世界が動いていると感じますが、活字も映像も音源も見たり聞いている人とは関係なく存在（「いる・ある」）しています。

その意味で、フィクションは「人の外にある外」（人が放ったとしても人から離れて存在し、人の思いどおりにならない）だと言えるでしょう。

読書（読む・見る）や映像の閲覧（見る・聞く）や楽曲の鑑賞（聞く）における、あそ

ここにあれが「ある・いる」、あそこであれが動いて「いる」——これらはそう見える、聞こえるだけであり、人がそういうふうに想像しているだけなのです。

本も映像も音楽もその目的のために、人が、人の外につくった具体的な物に他なりません。抽象や概念ではなく物です。

「外」と「物」という点が決定的に大切です。「人の中にある中」（もしそういうものがあれば他人には見えないでしょう）ではないからこそ、他人と共有できるのです。

現物や実物や本物ではなく、複製を鑑賞する

絵や写真が添えてある本はさておき、おもに文字からなる本を読む行為と、映像や音楽を鑑賞する場合とは大きく異なる点があります。

本では時間的な拘束なしで読めます。好きな時に好きな部分を読めるという意味です。その意味では、文字からなる文章は一人で楽しむのに適しています。

たとえば、マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』や紫式部の『源氏物語』を数年かけて読む人がいます。

こうした長い作品は長時間の読書向きではなく、むしろ長期間の読書向きだと言えます。もちろん、一人で。

*

一方の映像や楽曲は、時間的な拘束があり、途中で止めることもできますが、それでは興ざめするだろうと私は思います。

もっとも、最近は倍速での鑑賞もあるそうですね。それはそれで興味深い現象だと思います。

そうした鑑賞が可能になり普及してきたのは、複製で鑑賞するのが一般的になってきたからだと考えられます。

絵、写真、映画、動画、楽曲、演劇——こうした作品を、実物や現物や生演奏や実演で鑑賞するのは、その場に出かけて行く必要があります。

大変ですね。手間も暇も、そして費用も掛かります。

そうであれば、自分が移る、つまり移動するのではなく、対象を移す、つまり映したり写したりすればいいのです。それが複製（模写、複写、録音、録画）です。

げんに、いまは複製での鑑賞が一般的になっています。

*

ところで、本も複製です。たとえば小説は複製で読むのが普通です。

その意味では、映像や楽曲は本に近づいてきていると言えそうです。

生演奏や実演は時間的に拘束されます。他の人たちもいっしょに鑑賞しているでしょう。本のように一人で独占できるものではないのです。

いまは違います。

演奏や実演を複製で鑑賞できるようになったために、いまでは演奏や実演を自分の好きな時に、自分の好きなタイミングで止めたり、自分の好きな倍速で楽しめるようになったのです。

一人で、です。

映像や楽曲の鑑賞の仕方が、本の鑑賞の仕方に近づいてきている、もう近づいてほぼ同じになっている、そんなふうと言えるかもしれません。

話を戻します。

身をかまし反らせて相手を制する

読書（読む・見る）や映像の閲覧（見る・聞く）や楽曲の鑑賞（聞く）における、あそこにあれが「ある・いる」、あそこであれが動いて「いる」——これらはそう見える、聞こえるだけであり、人がそういうふうに想像しているだけなのです。

本も映像も音楽もその目的のために、人がつくったものに他なりません。

広い意味でのフィクションと言えるでしょう。

*

言い換えると、人は世界という、自分の思いどおりに「動かない」異物（怪物でもいいです）を「自分が動く」（たぶん体と頭の中で動いてなぞる、です）ことで手なづけ、飼いならしている、つまり自分の思いどおりに「動かしている」つもりになっているのであり、それが人として生きることだという気がします。

自分の外にあるどころか、遠くにあるものを想像の中で遠隔操作すると言えば分かりやすいかもしれません。夢を見ているのと同じです。

たとえ自分が出てくる夢であっても、人は積極的に夢には参加できません。積極的に参加して夢の世界の事物に働きかけることができるとすれば、それは夢ではなくて現実です。

*

夢は、たったひとりだけ映画館にいて、最前列のど真ん中の席に縛りつけられて見るものです。強制鑑賞させられている映画、要するにフィクションなのです。

強制参加ではなく、強制参観、または傍観ですから、見ている者に主導権なんてあり

ません。たとえ、その映画＝夢に自分が登場していても参加できないのです。

悔しいと思いませんか。夢の中でどんなに走っても前に進めない、藻掻いても藻掻いても藻掻けないもどかしさを思いだしてください。

だからリベンジするのです。この復讐が、虚構＝フィクション＝言語活動なのです。

詳しく言うと、フィクション＝話を作る＝自分の都合のいいように再構成する＝物語る＝語り・騙りです。

ままならない＝思いどおりにならない夢に対し、思いと言葉はある程度自由にいじれるために、いじりながら憂さ晴らしをしているとも考えられます。

しかも、フィクションは人の外にある外ですから、つまり具体的な物——文字であったり映像であったり音声であったりする——ですから、他人と共有できます。

人はみんな夢への被害者同盟を組んでリベンジできるというわけです。というかじっさいにそうなっています。

でも、この憂さ晴らし、つまり夢を相手にした被害者同盟の活動も、じつは夢みたいなものなのです。フィクションをつくるために、思いと言葉をある程度自由にいじったとしても、「ある程度」でしかないからです。

思いと言葉の世界は、夢の世界と同様になかなか思いどおりにならない、ままならないという意味です。

たしかに、世界——現実のことです——という、自分の思いどおりに「動かない」異物（怪物でもいいです）に比べれば、思いと言葉はずっといじりやすいですけど。

夢と現実、この二つの世界のままならなさ、つまり人の思いどおりにいかないという

性質に対し、人はなすすべがないようです。

全面降伏しかないようですが、人は現実では目が覚めているつもりでいる——酔っ払いに素面かどうかを尋ねるようなもので人自身に確認も検証もできそうにありませんけど——ようなので、そこに賭けるしかない、言い換えれば、そこに賭ければなんとかなるかもしれないとも言えそうです。

＊

ところで、上で述べたリベンジ＝復讐は記憶されると復習できます。「あれは良かったなあ」「あれは気持よかった」なんて、あとになって何度も復習できます。

何度も何度も繰り返さず。ここがポイントです。嗜癖し依存しているという意味です。

人は記憶された虚構——たぶんループ状だと思われま——の世界に生きているようです。

＊

以上、身をおかし反らせて相手を制するというお話、言い換えると、相手を動かす代わりに自分が動く、自分が動くことで相手を動かしている気分になるというお話でした。

読書、そして映像や楽曲やVR（広義のフィクション）の鑑賞（および創作）の話です。

念を押しますが、人が世界——自分の思いどおりに「動かない」異物（怪物でもいいです）——に働きかけるとい話——そんな話はできそうにありません——ではありませんので、無いものねだりはなさないでくださいね。

#レトリック # 言葉 # 文字 # 日本語 # 漢文 # 漢語 # 素読 # 夏目漱石 # 森鷗外 # 遠隔操作 # 想像 # 創作 # フィクション # 読書 # 幻想 # 現実 # 仮想現実 # VR # 夢

連想でつなく、まつ

＊

連想でつなぐ、まつ

星野廉

2023年4月10日 07:38

＊「待つ」・「期待する」、そして「うたう」とは、「いまある・いる自分」を具体的体験として生きる、つまり、「いまを引き延ばし続ける」行為である。

と言えそうです。待っている・期待している・うたっているあいだの、「あいだ」＝「間」＝「時間＋空間」＝「時空」にぎっしり、「いま」が詰まっている。そんな気が、個人的にはします。

(拙文「連想でつなぐ、うたう」より)



本記事は、上の記事の続編で、「まつはいつまでも、まつ」2009-07-03 というブログ記事に加筆したものです。いまとはかなり違った文体とレイアウトで書かれていますが、当時の勢いを殺がないために加筆は最小限にとどめました。

うつせみのあなたに 第7巻 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がい
だき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

目次

まつ、間を打つ

durée、during

わくわく、ドキドキ、じりじり、待つ
フィクションはリベンジ
筋、ストーリーのあるもの
ヒトのフィクションへの偏愛
つなげる仕組み、つなげるフィクション
『大いなる存在の連鎖』(The Great Chain of Being)

まつ、間を打つ

*「まつ」

ですが、この言葉・イメージについて、このところ

*「うたう」と「持続性 = durée」

とともに、いろいろ考えていました。その過程で「まつ」を、広辞苑などの辞書で引いてみたりもしました。

*まつ・待つ (来ると予期される人や起きるはずの物事を迎えるために時を過ごす・これからの出来事について様子をうかがう)・俟つ (たのみにする・期待する・なにごとかの事態の進展をこれからの展開にまかせる)・松 (神がその木に降り立つことを「まつ」という説あり・葉が二股に分かれるさまから「また・股」から転じたという説あり)

以上が調べた結果ですが、個人的には、

*まつ・間つ・ま+うつ・間を打つ

とも、感字=当て字をしたい気持ちが強くあります。

*正しくない

に決まっています。でも、それでいいのです。

*言葉とは、ヒトがつくった、正確に動くとされる機械がつくったものではなく、きわめてテキトーで、ぼけーとする習性があるヒトがつくったものであり、この時点でも、いろいろなところで、いろいろなヒトによって、つくられつつある「動的な=ダイナミックな=動きつつある=変化の」過程にあるものである。

と思います。もちろん

* 「正しい」もある

でしょう。でも、

* 「正しくない」もある

のです。ひょっとすると

* 「正しくない」のほうが多い

かもしれないのです。いや、きっとそうです。そうお思いになりませんか？ ヒトって、

* 綱渡りをしている = 宙ぶらりんの状態にある

のではないのでしょうか。

* ヒトは、すべて「何か」におまかせの「状態 = 常態」にある。その「何か」が何なのかについても、「何か」にまかせてある。

という感じがしてなりません。

durée, during

で、さきほどの

* まつ・間つ・ま+うつ・間を打つ

ですが、

* ま・間・あいだ・あわい

という大好きなイメージ = 言葉が、あたまたに浮かんで仕方がないのです。

学生時代に、暗唱させられて、言葉の断片として、このアホのあたまに残っている＝
こびりついている

* 「durée = 持続性・持続期間・期間」

という言葉ですが、フランス語の名詞でして、動詞形は

* durer = 持続する・続く・長持ちする・しんぼうする・じっとしている

です。英和辞典を引いてみると、古い英語でも、durer が、フランス語とほぼ同じ意味で
存在していたみたいです。みなさんのなかには、ここで

* during に似ている

とお感じになった方もいらっしゃるかもしれませんが、その通りのようです。なにし
ろ、-ing がつけば、「～すること＝動名詞」、あるいは、「～しつつある＝現在分詞」です
よね。で、

* during = ～のあいだじゅう（ずっと）・ある特定の期間のある時に・～のあいだに

のほかに

* endure = 我慢する・持ちこたえる・持続する

も「dure = 固める」というラテン語から来ていると書いてある辞書もあります。

* 「固い・固める」と「続く・持ちこたえる」とが結びついている

みたいです。こじつけやすいイメージですね。

あと

* まつ・俟つ・期待する・たよりにする

の系列＝イメージですと、英語の

* expect = 語源は「何かを求めて外や前方をじっと見つめる」

や

* hope = 語源は「何かを求めて胸が高鳴る」：「ホップ・ステップ・ジャンプのホップ＝ぴょんぴょん跳ぶと親戚らしい」

や

* anticipate = 語源は「先取る・先取りする・予想する」

や

* wait = 語源は「待ち伏せする ⇒ 見張る、見守る、じっと見ている」

がありますね。こうやって、日本語や英語における、ほぼ同義の言葉の語源を調べて、その

* 言葉のもののイメージ＝原風景

を、ながめる＝みる＝感じるのが好きです。だから、このアホは、

* 言葉のフェティシスト

を、生意気に自任したりするのです。言葉を愛しています。

* 話し言葉＝音声、書き言葉＝文字・活字、言葉の意味＝イメージ

と、

* たわむれる（たわぶる＝ふざけあう＝じゃれあう）

とか

* あそぶ（浮世を離れて別の世界に身をまかせて、うたい、おどり、はしゃぐ＝ハレつまり非日常的時空に身をゆだねる）

のが、唯一の楽しみなのです。

わくわく、ドキドキ、じりじり、待つ

で、この記事を書く

*時間=とき

が、そうした

*言葉との接触=付き合いの「持続しているあいだ =ま・間・あいだ・あわい」になっている

のです。だから、多少長い記事を書くことになっても、疲れはしますが、苦にはなりません。

*いい気持ちで、好きな歌をうたっていたり、ハミングしていたり、あるいは、好きな人を待っている

のと、似ています。

*待つ

に関して言えば、

*会った瞬間よりも、会うまでの待っているあいだのほうが幸せだ

という気持ち=心理が分かるような気がします。

*「durée = 持続性・持続期間・期間」

というのは、そんな、

*わくわくどきどきじりじり

ではないでしょうか。変なことを書きますけど、

*おしっこを我慢している状態にも相通じる

ものはありませんか？ あれって、まさに

*「待っている」「俟っている」

のですよね。わくわくどきどきじりじり、なんて感じつつ。

*サスペンス = suspense

にも通じるような気がします。あれこそ、

*宙ぶらりん=どうなるんだろう=この結果を知りたいなあ=この先を見たいなあ

ですよね。

*世界中の多くの人たちが、サスペンス小説や推理小説や謎解き、および、その種の映画・テレビドラマを好んでいる

というのは興味深い現象です。

フィクションはリベンジ

人は宙づりにされたいのではないのでしょうか。気持ちがいいから。

ただし、「待たされる」より「待つ」のほうが気持ちがいい。「快をもたらす待つ」には主導権が必要です。

同様に、宙づりにされるより宙づりになるほうが気持ちがいいのです。

では、「待つ」と「待たされる」、「宙づりになる」と「宙づりにされる」の違いはなんでしょう。フィクションであるかないかだと思います。

詳しく言うと、虚構を主導している気持ちになっているかないか、です。気持ちの問題です。

ところが、人間はややこしい存在であって、「待つ」よりも「待たされる」、「宙づりになる」よりも「宙づりにされる」ほうが快である人もいます。

最後は好みの問題のようです。

ただし、虚構を主導している気持ちだけは譲れないのです。実際はどうかは関係なくです。人は虚構の世界に生きているからです。

＊

虚構を主導している気持ちだけは譲れないというのは、リベンジなのです。何に復讐しているかというと、夢にです。

人は毎晩（昼間でもいいですけど）、夢の中で主導権を奪われます。夢の中で思いどおりに動けたら、それは現実です。

夢は、たったひとりだけ映画館にいて、最前列のど真ん中の席に縛りつけられて見るものです。強制鑑賞させられている映画、要するにフィクションなのです。

見ている者に、主導権なんてありません。たとえ、その映画＝夢に自分が登場していても参加できないのです。

悔しいと思いませんか。

だからリベンジするのです。この復讐が、虚構＝フィクション＝言語活動なのです。

詳しく言うと、フィクション＝話を作る＝自分の都合のいいように再構成する＝物語る＝語り・騙りです。

ままならない＝思いどおりにならない夢に対し、思いと言葉はある程度自由にいじれるために、いじりながら憂さ晴らしをしているとも考えられます。

＊

この復讐は記憶されると復習できます。「あれは良かったなあ」「あれは気持よかった」なんて、あとになって何度も復習できます。

何度も何度も繰り返す。ここがポイントです。嗜癖し依存しているという意味です。

人は記憶された虚構——たぶんループ状だと思われま——の世界に生きているようです。物理的世界——そんなものがあるとして、あるいはそんなものを人が知覚し想像できるのとしての話ですが——に生きているのではないという意味です。

筋、ストーリーのあるもの

で、このところずっと考えていることで、特に気になるものとして、

＊「歌・音楽＝音声の持続」における、「旋律＝経路＝進行方向＝運んでくれるもの＝乗物」

と

＊「歌・音楽＝音声の持続」における、前の「歌う」の「再現・再演・模倣＝重なる・かぶる・ダブる」および「変奏・編曲・改変＝ずれる・ゆがむ・はずれる・ぶれる」

があります。これを、「まつ」でも、考えてみます。

＊「まつ・待つ・俟つ・期待する・たのむ・頼む・恃む・当てにする・宙ぶらりんになる or される＝あいだ・間・サスペンスの持続」における、「予測・予見・予想・見込み・見通し・見積もり・先読み・下読み・シミュレーション」と、それに対する「演習・練習・訓練・リハーサル・予習・心積もり・けいこ・用意・準備・備え・ウォーミングアップ・段取り・対策・対応・地ならし・お膳立て・布石・身構え・心構え・心積もり・心得」

みたいなものを、あたまたに浮かべています。

さらに、でまかせ＝こじつけ＝フィクションつくりをエスカレートさせてみます。とにかく

＊筋＝広義のストーリーのあるもの

を列挙してみましょう

*歌・音楽・踊り・能・オペラ・演劇・物語・小説・神話・経典・映画・テレビドラマ・ゲーム・人生・生活・歴史・未来図

こうなると

*「何でもあり状態」

になってきます。実際、そうなのでしょう。何でもありい〜って感じです。

ヒトのフィクションへの偏愛

で、その

*筋=広義のストーリーを「なぞる・あとをたどる・そう・つける・つきそう・くっつく・くつついていく・まねる・ならう」という運動・動作

が、すごく気になるのです。ひよっとすると、この運動・動作が、

*わくわくドキドキじりじりの正体

ではないでしょうか。で、上のフレーズをもっと長くしてみます。

*筋=広義のストーリーを「なぞる・あとをたどる・そう・つける・つきそう・くっつく・くつついていく・まねる・ならう」という運動・動作を、あたまのなかで、あるいは、身体を用いて、何度も繰り返す喜び・快感に、ヒトは取り付かれている=依存症になっている=離れられない=なしではいられない。

という気がします。これは、

*ヒトのフィクションへの偏愛=異常な愛着=依存症と深くかかわっている

とも言えそうです。

依存ですから、何度も何度も繰り返かえます。

つなげる仕組み、つなげるフィクション

*ミメシス・ミーム・模倣・擬態・コミュニケーション・伝達・学び・学習・共感＝感情移入＝empathy・思いやり・同情・関係性・引き寄せ・感染・反復・永劫回帰・円環・輪・鏡・複製・コピー・クローン・生殖・増殖・培養・細胞分裂・挿し木・再生・再演・認証・同定.....

という具合に、イメージと言葉とが、まさに「増殖」し続けます。

*増殖が増殖する。

ということです。で、上記の言葉たちに共通するのは、

*つなげる仕組み＝つなげるフィクション＝つなげるダイナミズム

という点かもしれません。いろいろなものが、つながってしまいます。というより、勝手につながってしまっているのですけど。いや、そうじゃなくて、

*実際につながっているらしき現象を、今度は言葉とイメージでつなげるという儀式＝操作によって、確認＝納得する。

というのが正確な言い方かもしれません。もちろん、

*「実際につながっている」かどうかは、検証不能だ

ですけど。

『大いなる存在の連鎖』(The Great Chain of Being)

いずれにせよ、これこそまさに、

*アーサー・O・ラヴジョイ (1873-1962) の著作『大いなる存在の連鎖』(The Great Chain of Being)

です。

ちくま学芸文庫 存在の大いなる連鎖

至高の存在である神から、非存在すれすれの被造物へ。この宇宙はあらゆる階層の存在で充満した、連続する鎖の環である。「存在の

www.kinokuniya.co.jp

大学生時代の私にこの本の存在を教えてくれたのは、

* 「学魔」の異名をとる高山宏氏

でした。

高山宏 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

*何でもつなげてしまう名人

です。私の何でもこじつける癖は、この方の影響も大きい気がします。高山氏は、

*由良君美（ゆらきみよし）（1929-1990）

の直弟子です。

由良君美 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

由良君美とは何者か？ 阿部公彦 | じんぶん堂

博覧強記の人て知られ数々の逸話を残す英文学者・由良君美（1929 - 1990）。「偏った本ばかり読む男」を自認する由良

book.asahi.com

由良君美については、「辺境としての人間」という記事に書きましたので、お読み願えれば幸いです。再評価されるのを、個人的に切望している人です。

#待つ #歌う # アンリ・ベルクソン # 時間 # サスペンス # フィクション # 筋 # 物語
アーサー・ラヴジョイ # 高山宏 # 由良君美

音を見る、模様を聞く

＊

音を見る、模様を聞く

星野廉

2023年4月8日 08:04

目次

なんとなく似ている

つながっている、いないに関係なく「似ている」

きらきら、またたく

まばたく、まぶた、めのふた

上下、左右、往復（前後）

微小な○○部分を拡大すると△△に「見える」

点・ツー

ツー・ツー・点・点・ツー・点・点

点と線から面へ

音を見る、模様を聞く

置き換えの結果としてのリアルとリアリティ

現実の文法、言葉の文法

まばらに、まだらに読む

なんとなく似ている

・にている、に、ふたつ、ふたたび、たびたび、ふたまた、またまた、また、またたく

日本語だと、なんとなく似ています。

「なんとなく」を詳しく言うと、発音が似ている、イメージが似ている、字面が似ている、です。

＊

- ・two (二)、twig (小枝・二股の枝)、twin (ツイン)、twice (二回)、twist (ツイスト・ひねる)、twinkle (またたく・まばたく・きらきら)
- ・wink (ウィンク・まばたく・またたく・きらきら)
- ・too (もまた・あまりにも～すぎ)

英語もなんとなく似ているのですが、よく見ると共通点があります。

tw- という語源の素 (もと) みたいなものでつながっていると似ているようです。

親戚か親子か兄弟か分かりませんが、血は争えないようです。

wink と too は、語源的なつながりはないようなのに、tw- のついた語と似ています。発音と字面とイメージが似ています。

つながっている、いないに関係なく「似ている」

日本語と英語は、ぜんぜんつながっていないらしいのに似ているところがあります。

つながっている、いないに関係なく似ているのを私はシンクロとか同期と呼んでいます。

似ているだけですから印象に他なりません。

私のイメージするシンクロとは普遍や法則やはたまた真理とはほど遠いものです。

きらきら、またたく

Twinkle, twinkle, little star
きらきらまたたくお星さま

「またたく」は「目叩く (またた) く」というふうに、広辞苑にはとても分かりやすい、駄洒落のような語源の説明が載っています。

「またたく、まばたく、瞬く」ということですね。

Twinkle, twinkle, little star
またたけ、またたけ、小さいお星さま

こういうのは、似ていると思うと似ているように見えたり聞こえたりします。

「何かと何か似ている」のも不思議ですが、「似ていると思うと似ているように感じられる」のも不思議です。

どちらのシンクロも不思議だと思います。

人は似ているを基本とする印象の世界に生きているではないか、と私は感じています。

世界は「似ている」に満ち満ちています。

まばたく、まぶた、めのふた

まばたく、またたく、きらきらひかる
まぶた・目蓋・瞼・まなぶた・目の蓋・めのふた

「目を閉じる」と「目を開ける」、オンとオフ、これがまばたきの最小単位です。これが繰り返されるのです。

人は一年で何回まばたきをするのでしょうか。

*

ぴくぴく、ひくひく、ぱちぱち
どきどき、わくわく、びくびく
心臓バクバク、動悸に同期する

オン・オフ、on・off、0・1
白・黒、陰・陽、ポジ・ネガ、明・暗
満潮・干潮、満ち・欠け、満月・新月

こうやって並べるとシンクロを感じます。私流の言い方で恐縮ですが、イメージの韻を感じます。

つながっているか、つながっていないかに関係なく「似ている」、それが私のイメージするシンクロや同期であり、イメージの韻です。

ピストン運動、上下運動、行ったり来たり、往復運動、ぴくぴく、ゆらゆら、びくびく、ジグザグ、ぴくんぴくん、ひくひく。
(拙文「つながる、かさなる、ふるえる」より)

上下、左右、往復（前後）

どんな動きにも、上下運動（見方を変えればジグザグ運動）、左右の揺れ、往復（前後）運動、ピストン運動があるようです。

その基本単位は、ぴくぴく、on・off、0・1 に感じられます。

移る、通じる、流れる、走る、移動する。震える、振れる。曲がる、曲げる。

こうした動きや姿の基本もぴくぴくなのかもしれませんが。

さーさー、しゃーしゃーを、細かく分けると、ぴくぴく、ひくひく。すいすいを、細かく分けると、がくがく。

滑らかな動きを細かく分けていくと角張っている、というイメージ。

既視感を覚えます。

微小な○○部分を拡大すると△△に「見える」

数学の微分で、方程式をグラフに描くと曲線になって、その曲線の微小な部分を拡大すると直線に見えるというような話があったように記憶しています。

理屈というのには、あまりにも適当でいい加減に感じられて、一種の面白いお話として受けとめてきました。

数学に対して、自分が勝手にいっているイメージを裏切るほどのテキトーぶりなのです。

数学って、こんなに感覚的なものでしたっけ。もっと冷徹かつ緻密で、感覚などという曖昧なものを排除したガチガチの論理で成りたっているものだと勝手にイメージしていました。

いまPCに向かって文章を書きながら、あたりを見回すと、あちこちに曲線が見えます。

目の前にもありました。PCのモニターに映し出されている活字は直線と曲線から成りたっています。また、PCの脇に家のカギが置いてあるのですが、それには細い紐と鈴がついています。

紐は細い糸を編んだもののようです。その紐が曲線を描いています。虫眼鏡でその紐の曲線部分を拡大してみると、確かに直線に見えます。ここで、大切なのは、「見える」です。

微分では、方程式をグラフにした場合の曲線を拡大すると「直線になる」とは言っていないなかった気がします。あくまでも「直線に見える」だったと記憶しています。

「見える」なんて、すごくテキトーじゃありませんか。それとも、そんなことはないのでしょうか。この種の疑問を質問できる相手がいないので、どうなのかは分かりません。

点・ツー

まばたく、またたく、きらきらひかる
まぶた・目蓋・瞼・まなぶた・目の蓋・めのふた

「目を閉じる」と「目を開ける」、オンとオフ、これがまばたきの最小単位です。これが繰り返されるのです。

*

「まぶた」と言えば、あれは冷戦時代の話だったか、敵が報道した映像での捕虜のまばたきがモールス信号だったという話を思い出しました。たしか「torture（拷問）」という単語だったとか。

捕虜への拷問は国際法違反ですから、それが切っ掛けで捕虜釈放への機運が高まったとか、なんとか.....。

ぴくぴくか、ひくひくか、ぱちぱちか、その辺のところは分かりませんが、まぶたの動き、つまりまたたきでモールス信号が送れるのですね。

*

検索を続けていたら、動画が見つかりました。

百聞は一見にしかずという感じの興味深い映像です。

(動画省略)

なお、この動画では、「まばたきする」に wink では blink という動詞がつかわれています。

ジーニアス大英和辞典によると、blink の語源は「ひるむ・たじろぐ」で、「(まぶしさなどで無意識に) まばたきする《wink は意識的》、目をぱちくりして見る、驚いて見る」とあります。

勉強になりました。

＊

以下の動画の 0:30 あたりからアルファベットの打ち方が出てきます。点と短い線の数を組み合わせているようです。

(動画省略)

Aが「・ー」で、Bが「ー・・・」みたいです。私には、Aが「点・ツー」で、Bが「ツー・点・点・点」みたいに感じられます。

たしかにまばたきをすることで、アルファベットがつづれる、つまり単語ばかりか文章がつづれそうです。

＊

ということは、シェイクスピア全集がモールス符号で送れるということになりそうです。でも時間がかかりかかりそうですけど、きっと名人がいるはずですよ。

日本の電報も同じ原理で信号を送っているのでしょうか。「サクラサク」や「サクラチル」が送れるなら、源氏物語も送れそうですね。ただし、かなり遅れそうです。

＊

思い出しました。

ちいちいぱっぱ、ちいぱっぱ

このリズム、躍動感。生き生きとしたリズム。波打つリズム。

思わず、こどものように手を打っている自分がいます。

ちーちーぱっぱ・ちーぱっぱ

ツー・ツー・点・点・ツー・点・点

「ちーちー」と「ツー・ツー」の部分では、手を打つ私の手はわずかのあいだですが合
わさっています。

これは間（ま）というか、持続する間というか、空っぽではありません。オン・オフで
いうなら、オンが続いているのです。わくわくが続いている感じ。

ツー・ツー・点・点・ツー・点・点

なにもモールス符号とか信号とか、難しいことを考える必要はないのです。自分の体
に聞いてみましょう。体から出てくるリズムに耳を傾けましょう。

ちーちーぱっぱ・ちーぱっぱ
ツー・ツー・点・点・ツー・点・点

*

*びくびく、on・off、0・1——。

どこかデジタル的な、

*びくびく、ひくひく、びくびく

よりも、

*ちーちーぱっぱ・ちーぱっぱ

とか、

*ツー・ツー・点・点・ツー・点・点

でいいのです。

こちらのほうに生命っぽさを感じます。

*

点だけでなく、それに加わる「ツー」という時間の長さ、間（ま）とでもいうのでしょうか、瞬間の持続感——これがリズムの素ではないでしょうか。

次の点を「待っている」「間（ま）」なのです。「待（ま）つわ～」という感じの「ま」。

間（ま）には、期待が詰まっているのです。空（から）の時間ではありません。わくわくが続いています。

点と線から面へ

ー・

ツー・点

持続、休止

息を継ぐ、息を止める、息を吐く、息を吐き続ける

つづる、つづける、つぐ、つぎはぎ

綴る、続ける、継ぐ・接ぐ、継ぎ接ぎ

beat（ビート・打つ・たたく・打ち勝つ）、bat（バット・打つ）、battle（バトル・戦闘・戦う）

period（ピリオド・期間・周期・生理・終止符・休止）

stop（中断・止める・止まる・停留所・句点）

*

上の例は、点と線からなる筋とか、線状っぽいですが、このリズム感は面にもなりそうです。

点と線から面へ、つまり二次元の模様です。

継ぎ接ぎ

つづれ、綴れ、綴れ織り

パッチワーク、織物、引用の織物

まばら・まあら・間疎・間があらひ・疎ら

まだら・斑・ぶち・むら

音を見る、模様を聞く

時間的な線状の断続と、空間的なまだらでまばらな感じがシンクロしているように感じられます。

ちー・ちー・ぽっぽ・ちー・ぽっぽ
ツー・ツー・点・点・ツー・点・点

上の文字列を模様として見てください。

時間的な断続を文字にすると、その模様が浮かんでいるようにも見えてきます。

「……のように見える」という感覚が大切なようです。見えなければ、時間的な継続や断続が記憶として残らないからかもしれません。

文字に似ています。というか、上で並べた文字列は模様であると同時に全体が文字そのものです。

*

音を見る、模様を聞くが起きている気がします。

既視感を覚えます。

レコードと磁気テープです。

レコードはよく見るとぎざぎざした溝である細い線が渦を巻いています。私が初めてカセットレコーダーを買ってもらったのは、むき出しの磁気テープである帯を巻いた、オープンリールという方式からカセットテープに移行する時期でした。帯が細くなり小型の箱に収められたのです。

(拙文「文字や文章や書物を眺める」より)

レコードの溝のぎざぎさを拡大鏡で見れば、音が見えます。ぎざぎざは模様であり暗号であり文字ではないでしょうか。

磁気テープは磁気を帯びた粒子がフィルムに張りついたもののようです。たぶん粒子は模様を描いているのでしょう。そうだとすれば、私たちは模様を聞いているのです。

置き換えの結果としてのリアルとリアリティ

音を見る、模様を聞く——これは奇をてらったレトリックではありません。じっさいに現実で起きているのです。

私たちはそうした現象に囲まれて生きています。とりわけ、広義のテクノロジーと工学が進歩して日常に入りこみ溶けこんでいる、いまはそうです。

溶けこんでいるので気づかないのです。

文字を聞く、楽曲を見る、映像を嗅ぐ・触る・舌で味わう、手ざわりで見る・聞く・嗅ぐ・味わう——ほら、こういうことってあるじゃないですか。

本やテレビや映画やパソコンやスマホと付き合っている私たちは、これらのことを日常的に体験しているのです（パソコンもスマホも手指で操作するものだということを思い出しましょう、頭というより指が操作を覚えているのです）。

置き換えと、それによる連動のことです。

不正確な記述になりそうなので立ち入ることはできませんが、点字や指点字もそうだと考えられます。

点字 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

指点字

www3.nit.ac.jp

私は障害者手帳を持つ（中途）難聴者なのですが、常時装着している高性能の（しかも高価な）補聴器でも置き換えが起こっているはずで、私は人工の音声聞いて生活

しています。

*

仮想現実に行かなくても、すでに私たちは置き換えを体感して生きています。私たちにとっての「リアル」は置き換えられたものなのです。

Aの代わりにAとは別のもので済ませる。

たとえば、見えるものが聞こえるものに、聞こえるものが見えるものに置き換えられています。

それだけではありません。遠いが近いに（たとえばテレビやラジオ）、厚いが薄い（たとえば本や絵や写真や映画やスマホ）に置き換えられています。

要するに、Aの代わりにAとは別のもので済ませて澄ましている。しらっと澄ました顔をしてやっているのです。知覚と錯覚をうまく利用しているわけです。

（拙文「文字や文章や書物を眺める」より）

現実の文法、言葉の文法

繰り返します。音を見る、模様を聞く——これは奇をてらったレトリックではありません。

言葉の世界と現実の世界には、それぞれ独自の文法（比喻です）があるからです。

食い違いや齟齬や矛盾が生じて当然なのです。言葉は事物ではありません。言葉は現実ではありません。たとえ、事物や現実の影であったとしても。

現実には現実の文法（比喻です）があって、それは言葉の文法や言葉の慣用とは重ならないし、ずれていてもおかしくはありません。

（拙文「影の文法」より）

まばらに、まだらに読む

私にとっては、小説も、詩も、言葉を並べた文字列も模様に見えます。細部を見れば区別はできません。

文字列が長いかなの短いかなのようですが、細部や部分を見ているかぎりは区別することはできませんし、する必要もない気がします。

誇張ではなく、私には以下の動画——杉浦康平さんのブックデザイン、タイポグラフィの作品です——のように文章が見えます。

(動画省略)

このデザインが好き # シンクロ # 語源 # 英語 # デジタル # 数学 # 二進法 # リズム
電報 # モールス信号 # モールス符号 # 杉浦康平 # タイポグラフィ # 点 # 線 # 持続

よむ、読む、訓む

＊

よむ、読む、訓む

星野廉

2023年4月5日 07:59

はじめにまとめます。

たとえば、「よむ」に「読」や「詠」という字を当てる、「読」や「詠」に「よむ」を当てる。こうして、この島々にもともとあった音で、よそから来た字を読み下した。すらすら読めるようにした。そればかりか、よその字を変えて字をつくりもした。そうやって、放せば消えてしまう音を残すやり方を編み出した。そうやって大きな竜（たつ）に飲まれることなく、くださったと言えるかもしれない。

今回はそんな話をします。

目次

文字・しるし、話し言葉、表情・身振り

文字という異物

文字という怪物

異物である文字を手なずけて飼いなす方法

怪物である竜をくださす方法

下（くだ）すことで降（くだ）す

文字・しるし、話し言葉、表情・身振り

言葉は異物だと思います。

私は言葉を広く取っていて、話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、視覚言語と呼ばれることもある表情と身振りとするしも言葉と受けとめて生活しています。

文字・しるしにもっとも異物感を覚え、話し言葉、表情・身振りの順で異物感は減少していきます。もちろん、これは私の印象にすぎません。

文字としるしは物であり、消さないかぎり残ります。文字は、たとえば紙に染みこんだ染みであったり、液晶画面の上に浮かんでいる画素の集まりですが、後者を物と呼ぶのにはためらいを覚えますが、消えずにどこかに残っているため、ここでは便宜上物としておきます。

文字としるしが消えずに残っているのは人の外にあるからだという気がします。外にあって消えずに残っているのですから異物感は強いと言えるでしょう。

話し言葉、表情、身振りは発したとたんに消えていきます。それを受けとる人は、ほとんど記憶していくことで「受けとる」しかありません。もちろん、聞き流したり無視することもできます。忘れる場合もおおいにありそうです。

文字という異物

文字の異物性については以下のまとめをご覧ください。

整理します。

- ・文字の習得には、とほうもない時間と労力がかかる。
- ・学習障害として文字の読み書きだけができない人がいる。
- ・人類には無文字社会という選択もあった。
- ・話し言葉、書き言葉（文字）、表情、身振りと言葉と考えた場合に、文字がいちばん遅く出てきた。個人レベルでも、文字の習得が後になりがち。
- ・文字だけが見える、しかも残る。
- ・複製として存在し広まり継承される。
- ・スーパースターとして最後にあらわれた。それでいて、あちこちであらわれ続けている。
- ・産む。産み続ける。

(拙文「文字に異物を感じる時」より)

文字という怪物

私たちの住んでいる大小の島々には文字がない、またはあったとしても普及していなかった時代が長くあり、のちに大陸から文字が伝わってきた。そういう意味のことを小学校、中学校、高校で学んだ記憶があります。

この記事ではそうした経緯を前提に話をします。

*

くだす、下す、降す
くだる、下る、降る
おろす、下ろす、降ろす、卸す、墮ろす
おりる、下りる、降りる
さがる、下がる
さげる、下げる、提げる
もと、下、許、本、元、原、基、旧、故
した、下
しも、下

このように見てみると、日本語の表記がもつれにもつれていることが見えます。

言葉の中に言葉があり、言語の中に言語があるのが一目瞭然なのです。

日本語を母語としていない人が、こうした表記と言葉のもつれを覚えるさいの苦労を想像すると気の毒になります。これを教える人の苦労も並大抵ではないでしょう。

一方で、私たちは上の表記を見て、「そう言えばそうだね」ぐらいの受けとめ方をする場合が多いように思います。もちろん、「そんなの知らなかった」という部分もあるにちがいありません。

いずれにせよ、これだけの知識が身についているとすれば、すごいことだと私は思います。誰もが自分を褒めてやっていいのではないのでしょうか。

*

世界にはいろいろな言葉がありいろいろな文字があるようです。いろいろな表記があ

るのでしょうか、日本語の表記は中でも複雑なのではないかといつも感じています。これは私の印象でしかありませんけど。

話し言葉とちがって、文字を習得するには時間と労力を要します。世界というレベルでは言葉を話せても文字の読み書きができない人が相当数いると聞きます。

日本でも文字の読み書きがこれほど浸透したのは日本の歴史の中でも比較的最近だった。学校で習ったそんな経緯を思いだすたびに、私は複雑な思いになります。

文字は人にとって必ずしも自然なものではない。異物なのではないでしょうか。

異物である文字を手なずけて飼いならす方法

ここまできをまとめてみます。

もともとこの島々にあった音が、のちになって大陸からの文字を迎えたと考えられます。

当時に大陸で読み書きされていた中国語の音の一部（漢字の音読みしている部分）と文字を、当時話されていた「日本語」の音に当てて読み、さらに漢字という異郷の文字から仮名をつかって、「日本語」が読み書きされる環境が整っていった。

簡単に言うと、こういうことでしょう。

この島々では公文書は漢文で書かれ保存されてきたと学校で習いました。ということは昔の中国語が書き言葉として併用されていたのでしょう。おそらく一部の知的エリートだけが漢文の読み書きができたにちがいありません。

朝貢という言葉をお考えください。大昔の中国は経済的にも政治的にも制度的にも文化的にも科学技術的にも軍事的にも大国であり、その周辺の地域の人たちが、中国を文字どおり中心の国と見なして、ひれ伏していたのでしょう。

機嫌を損じれば、攻めこまれるに決まっています。恐ろしい存在でなければ朝貢なんてしません。

大昔の中国はその周辺の地域にとって怪物だったのではないのでしょうか。竜です。へたをすれば、この島々では竜の国の言葉が話されていたのかもしれないのです。

その場合には、竜の国の言葉を話すだけでなく、書いてもいたと想像します。

でも、そうならなかった。よく考えるとすごいことではないでしょうか。

怪物をくださったのです。怪物を手なづけ、飼いならしたのです。文字のことです。漢字のことです。

怪物である竜をくださす方法

大陸から来た異物どころか怪物である文字を手なづけて飼いならし、公文書を漢文で書き保存し継承するようになった。あっさりと書きましたが、すごいことをやったものです。

知は力なり。まさに文字は力であり武器だと言えるでしょう。発したとたんに片っ端から消えていく話し言葉と違って、残り、写し、広め、残し、渡すことができるのです。というか、そのことに気づいた人類は、おもにそのためだけに文字をつかっていると言えます。

経済、政治、諸制度、文化、科学技術、そして軍事といったあらゆる知の領域で、漢字という文字を用いて、その綴り方（文法）に従って作成されたおびただしい数の文書が、複製され、拡散し、保存され、継承されてきたのです。

驚くべきことに、漢文（漢語）と並行して話し言葉である大和言葉（和語）がもちいられ、漢字からつくられた仮字と漢字を当てたり組みあわせることで和語が書き言葉にもなっていったと聞きます。

この島々で話し言葉と書き言葉としての中国語が一般的につかわれることなく、「おいしいとこ取り」と言っは語弊がありますが、リングワ・フランカであった中国語の文語をうまく利用したと言えそうです。

リングワ・フランカ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

下（くだ）すことで降（くだ）す

読み下（くだ）す、訓み下（くだ）す、書き下（くだ）す
漢文（中国語の文語）を日本語として読む、書く

翻訳のようで翻訳ではない、翻訳ではないようで翻訳である。

書き下した文章に倣って文章を作成すれば遜色ない漢文調の文書ができる。公文書として利用できる。

手なずけて飼いなすために読み下し（訓み下し）書き下すことで、読み降し書き降す。よくもまあ、こんな方法を編みだしたものです。

「読み下ろす」と「書き下ろす」（異なった意味になりますね）ではなく、「くだす・降す・下す」という訓読みを選んだところに反応しないではいられません。

この言葉を当てたところに意図すら読みたくなります。

おまじない、のろい、お呪い、呪い
言霊の幸わう国

属国や属領になりさがるという運命もありえたのではないのでしょうか。

異物であった文字を読み下す書き下すという方法を取ることによって、怪物である竜の配下に成り下がるのではなく、竜を降すという道を切り開いた。そして、この島々にいまの言葉のありようがある。

というお話でした。

#言葉 # 文字 # 日本語# 漢文 # 和語 # 大和言葉 # 漢語 # 表記 # 異物 # 怪物 # 竜

目くばせしあう音（連想でつなぐ）

＊

目くばせしあう音（連想でつなぐ）

星野廉

2023年4月1日 08:08

目次

似ているからつなげる

またたく

印象の世界の住人

「同じ」と「異なる」は知識、「分ける」はローカルな決まり

またたき目くばせしあう音たち

反復、連続、変奏の心地よさ

語呂のよさ

「い・イ・i」

音の記憶、記憶の音

似ているからつなげる

「似ている」に「に・二」を見てしまうのは私だけでしょうか。

（拙文「連想でつなぐ「2・二・II」より）

two、twelve、twenty、twice に共通する tw- のイメージは、「twig（小枝、二股の枝）」から来た「枝が分れる」らしいのです。

twist（ツイスト）や twin（ツイン）も、語源的につながっているようです。twist は「ねじれる、ねじる、よじる、よじれる」ですから、「もつれる」とつながってきます。

こんなふうに連想でつなげていますが、基本は「似ている」です。

なにしろ「似ている」は印象ですから、人は勝手に「似ている」と感じて、勝手に「似ている」もの同士をくっつけます。

その結果が言葉にあらわれていると考えると、言葉がもつれたりよじれたりこじれるのは当然ではないかと思えてきます。

*

「似ている」を相手にしているかぎり、人は「あっ」「あれっ」「まあ」「おお」という感じで、つぎつぎと「似ている」と出会うのはもはや宿命と言っていい気がします。

「似ている」の連続ですから、「あ、まただ」の連続ですね。「また」や「二」や「分れる」が出てくるのは避けられないようです。つまり、それぞれがつながっているみたいです。

にている、に、ふたつ、ふたたび、たびたび、ふたまた、またまた、また、またたく。

two、twig、twin、twice、(too)、twist、twinkle

またたく

Twinkle, twinkle, little star

きらきらお星さま

きらきらとまたたくお星さま

「またたく」は「目叩く（またた）く」だなんて、広辞苑にはとても分かりやすい駄洒落のような語源の説明が載っています。

「またたく、まばたく、瞬く」ということですね。

これくらいの「こじれ」や「もつれ」だと、ほどよい「こじれ」であり、いい具合の「もつれ」だという気がします。

「まばたく」は、wink（ウィンク）ですが、twinkle と似ています。

またたき、まばたき・瞬き、めくばせ・目配せ、めまぜ・目交ぜ。

ほどよい「似ている」とほどよい「こじれ」が快い、心地よいです。

印象の世界の住人

持論なのですが、人は「似ている」を基本とする印象の世界の住人ではないでしょうか。

「同じ」か「異なる」かは人にとって不明である、つまり確認できないのです。

「同じ」と「異なる」は印象や感想ではなく断定であり断言です。AとBが「同じ」であるか「異なる」かは、器具や器械や機械をつかわないと確認も検証もできないのです。

一方の「似ている」は、各人が勝手にそう感じてそう言っているだけです。だから、「似ている」と言う人もいれば、「似ていない」と言う人もいます。

「同じ」と「異なる」は知識、「分ける」はローカルな決まり

「同じ」と「異なる」は他人から教えてもらった知識や情報であるとも言えます。器具や器械や機械をつかって調べたり、みんなで「同じ」であるとか「異なる」と決めた、つまり「決まり」だという意味です。

ポメラニアンとセントバーナードが同じ犬という種類の動物だなんて、赤ちゃんには分からないでしょう。犬というものを知らない人にも分からないにちがいません。ヒラメとカレイの違いも、たぶん人が決めたのでしょう。

そのように決めたのです。分類とは、人が決めたものに他なりません。

DNAですか？ それは人が機械をつかって決めたのでしょうか。「異なる」も「同じ」も人が器具をつかったり、みんなで決めたりした結果という意味の知識であり情報なのです。

虹が七色だという決まりのところもあれば、六色、五色、四色という言語や地域があるようです。出世魚なんて日本だけの分類ではないでしょうか。四季なんて言いますが、そもそも季節の区分が世界ではまちまちなのです。

「分ける」「分類する」はローカルな——つまり普遍や客観とはほど遠い——決まりであり、伝承されてきた知識であり情報だと言えるでしょう。

たしかミシェル・フーコーの『言葉と物』の冒頭で、ボルヘスの著作を引き合いに出し、「分類」に対して疑問の目が向けられていた記憶があります。

ミシェル・フーコー、渡辺一民／訳、佐々木明／訳『言葉と物〈新装版〉—人文科学の考古学—』| 新潮社

ベラスケスの名画「侍女たち」は、古典主義時代における人間の不在を表現している。実は「人間」という存在は近代に登場したもので

www.shinchosha.co.jp

またたき目くばせしあう音たち

堅くて、ややこしい話になったので、楽しい話に変えます。

Twinkle, twinkle, little star,
How I wonder what you are!
Up above the world so high,
Like a diamond in the sky.

よく口ずさむことがあります。語呂がいいですね。韻を踏んでいるからでしょうか。

英語なのですが、口にしているときには、何語かなんて考えません。ただ音が快いだけ。

韻をはじめ、同じ音や似ている音の反復では、音たちがまたたき、目くばせしあっているのです。

high、diamond、sky ——音とイメージにさそわれて、晴夜の清夜にきらきら輝くお星さまが目浮かぶようです。その空から音が降ってくる気がしませんか。

*

Ah ! Vous dirais-je Maman
Ce qui cause mon tourment?
Papa veut que je raisonne
Comme une grande personne
Moi je dis que les bonbons
Valent mieux que la raison.

フランス語バージョン（こちらが先なのでしょうか）でも韻が見られます。

https://www.youtube.com/watch?v=n3_0_tdabNQ

大学生時代に私は、福永武彦先生にフランス語の詩の読み方を手ほどきしていただいたのですが、福永先生が詩の音節を数えたり、韻を確認するために単語を発音なさるときが好きでした。

ふだんは近づきたい雰囲気福永先生が、ふと和んだ表情をお見せになったのは、きっと類似する言葉の音と戯れていらっしかったからではないか。そんなふうにいまになって考えています。

元歌らしいフランス語の曲です。

https://www.youtube.com/watch?v=B_YVFZ7TOWk

この歌に興味のある方は、ウィキペディアの解説をご覧ください。とても詳しいです。いろいろなバージョン（替え歌）があるということは、それだけ愛されてきた曲なのですね。

きらきら星 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

反復、連続、変奏の心地よさ

バージョン・版、変奏・編曲・アレンジ、替え歌、翻訳、翻案——どれもが「似ている」わけです。「似ている」でつながっているとと言えます。

こうしたことを考えていると、「似ている」大好き人間の私はわくわくするどころか、気が遠くなりそうです。

気持ちいいから楽しいから人は「似ている」に惹かれ、さらには「似ている」を自分でつないだり紡いでいくのではないのでしょうか。

*

同じ音や似ている音がほどよく出てくると、聞いていても、唱えても、目にしても、読んでも気持ちよく感じる場合があります。

似ているものや同じものには人の気持ちをなごやかにする働きがあるようです。

反復や連続や変奏の心地よさは、視覚的なものでも見られますね。模様やパターンなどの広義のデザインがそうでしょう。

語呂のよさ

日本語で簡単な例を見てみましょう。

セブン (2)

イレブン (3)

いきぶん (4)

口調がいいですね。ブン、ブン、ぶん。脚韻でしょうか。耳にずっと入りずっと馴染む。しかも母音の数が2、3、4と畳みかけるように増えて気分（きぶん）を盛り上げていきます。

魔法のように、お客様がどんどんお店に入るわけです。イツ・マジック。

*

スカット sukatto
さわやか sawayaka
コカコーラ kokakora

耳に快いですね。sという子音をつかった頭韻でしょうか。心を開く母音のaの連続が、じつに爽やか（sawayaka）です。

三つのkの連続もいい感じに喉に掛かって（kakattte）きます。飲み物ですから喉に訴えなければならぬわけですが、こういうのも一種の掛け詞ではないかと私は思います。

体の内部から出てくる感のある母音とくらべると、そもそも子音は歯や唇や舌や喉という体の出口に近い——外に近い——部分で、母音につかかってくるわけです。

外に近いというのは異物を感じさせるという意味です。咳やくしゃみや鼻水や吐き気や嘔吐を思いだしてください。生理現象や発作は異物を体外に出そうとする行為なのです。

子音は擦ったり（s・z）、絞めたり（m・n）、引っ掛かったり（k・g）、かすれたり（h）、叩いたり（t・d）、なでたり（r・l）、ぶつかったり（b）、はじけたり（p）します。なお、私にはwとyは母音、つまりuとiに近い感じがします。

この例では、「擦る・suru」と「掛かる・kakaruru」の適度の異物感が人に「渴き・kawaki」を想起させ、「喉を潤したい」とか「飲みたい」というアクションへと誘うのではないのでしょうか。

まさに「爽やか (sawayaka)」です。

さわやか
あざやか
あざとい

魔法のように清涼飲料水が売れるわけです。イツツ・ア・ミラクル。

*

以上の例は両方とも、もともとが外資系の会社のCMソングですね。さもありなん。コピーライティングに携わっている方々はきわめて繊細な言語感覚をそなえた詩人なのです。

欧米の定型詩の韻はもっと複雑でややこしいみたいですが、歌詞やキャッチフレーズやコピーなどでの韻は簡単に考えていいと思います。要するに、似た発音（母音も子音もです）の言葉がいい具合に散らばっているのです。

この「いい具合に」がポイントです。いい具合に散らばっていると快く耳に響くわけです。同じ形をした音を星のようにちりばめるとも言えそうです。

*

ガラスと言えば、透明。
カラスと言えば、黒。
マリア・カラスと言えば、男性で苦勞。
カラスは英語で crow。

自作の戯言なのですが、韻の練習をしてみました。頭韻と脚韻です。

*

うさぎおいしかのやま (yama)
こぶなつりしかのかわ (kawa)

この歌の出だしにも同音というか韻を感じますね。口にするとうっとりします。

山川草木、日本の原風景が重なります。あと花（hana）も。

＊

花は花が花。

桜（はな）は花（はな）が華（はな）。

誰が決めたのでしょうか。

これも先ほど述べた「決まり」「分ける」「分類」です。

「分ける」は選別と排除でもあります。分けて何かを選べば、何かが除かれるのは、人にとっての必然であり自然なようです。

＊

なにしろ、人は線引きが好きなのです。

話をもどします。北アメリカやアフリカの国境には不自然に長く伸びる直線が目立つという話でしたね。

切り分けたのでしょうか。切るためには直線が必要です。刃物は直線部分があります。ぴんと張った細い紐でも切れますね。手術でも、ある部分に糸を巻いて両方から引っばって切断していたような気がします。

縄張りを思い出します。縄を張って直線をつくり、こっちはわたしのものとか「うち」、あっちはおまえのものとか「よそ」と決めるイメージです。張る、切る、分ける。張り切って分けていたのでしょうかね。

（拙文「【小説】あいまいでやさしい境」より）

線を引いて分ける。「分ける」は「切る・伐る・剪る・截る・斬る」です。kill でもあります。

人がどんなに線引きと「切る」と kill が好きなのかは、世界地図と世界史年表を見ると一目瞭然です。

あと、毎日のニュースも。

「い・イ・i」

山川草木、花は花が花、与作は木をきると言えば、日本の原風景。

日本の原風景と言えば、山口百恵さんの歌った「いい日旅立ち」（作詞・作曲・谷村新司・1978年リリース）です。

日本、母、少年、父、子供、雪、夕焼け、岬、魚、すすき——これだけ盛りだくさんののに、歌は静かです。眉や顔をしかめることもなく、淡々とうたっているからではないでしょうか。

いい日旅立ち——綺麗な響きのフレーズですね。

iihi-tabidachi——「い・i」の連続がとても、きれいでこちよい。しかも「い・i」を要所でサポートする母音は、心を開く音の「あ・a」が二つあるだけです。

この曲の歌詞を読むと、「い・i」や「い段」の音が目立ちます。特に「い」と「に」が驚くほど多い。これも、この曲を落ち着いた印象にしている理由の一つではないでしょうか。

ま、こういうのは、そう思うとそう見えたりそう聞こえたりするものですけど。

個人的な感想ですが、「い・i」や「い段」の音は軽いのです。軽くて薄いではなく、軽くて快い、つまり軽快なのです。母音の中ではいちばん軽い気がします。

その「い」を山口百恵さんがきれいにうたっていたように思えてならないのです。

音の記憶、記憶の音

音の美しさは何にも勝ります。音が模様や風景を呼ぶことがありますね。

話し言葉は音と意味からなりますが、人にとっては意味よりも音が先だと最近よく思います。音は意味を呼びますが、意味は音を呼んでくれないからです。意味は後付けだ

という気がします。

話し言葉では意味やイメージ、つまり思いが音を主導すると考えられがちですが、逆に音が意味やイメージを先導するのではないのでしょうか。

音が意味やイメージを喚起する力は強いです。言葉を持ってしまった人間にとって、意味が後付けされた音が記憶と重なって付きまとうのかもしれませんが。

人は目をつむって寝ます。目を閉じて亡くなります。

寝際や死に際にあるのは音の記憶と記憶の音が呼び覚ます風景ではないのでしょうか。際にあっては、音の記憶も記憶の音も、もはや意味ではないのだらうと想像しています。

たぶん風景だけがあるのです。

そんなとき、目蓋の裏では音がまたたいている気がします。人を離れて自立した音たちが目くばせしあっているのかもしれませんが。

人はその光景を眺めているだけ。夢と同じです。夢と同じで参加できないのです。

#連想 # 意味 # 詩 # 英語 # フランス語 # 福永武彦 # 韻 # 母音 # 子音 # 歌 # 広告
コピー # 洋楽 # 邦楽 # 発音 # 歌詞 # 山口百恵 # 谷村新司 # ミシェル・フーコー
分類

影の文法

＊

影の文法

星野廉

2023年3月25日 07:37

目次

影を落とす

慣用句、決まり文句、定型を外す

定型を外す

文字どおりに取る

影の文法

影を落とす

影という言葉を使った言い回しはたくさんあります。どれもがぞくぞくするようなイメージをいだかせてくれます。

「影を落とす」という言い方が好きです。作文してみましよう。

久しぶりに庭に出ると、伸び放題になったヤツデの茂みが、これまた伸びた雑草の上に黒く大きな影を落としていた。

道に夕日が影を落としている。私はまぶしさに目を細めた。

戦争の記憶がいまも彼の日常に影を落としているのは間違いない。

＊

最初の例文は、そのまま文字どおりに取れます。ヤツデに日が当たって、その下に影

が映っているという物理的な現象を言葉にしたものです。余計な飾りを取れば、純粋な描写だと言えそうです。

「夕日が影を落とす」という場合には、「光がさす」という意味になるのですが、個人的にはこの言い回しを使ったことはありません。初めての作文です。

三番目の例文の「影を落とす」はネガティブな影響を与えるという意味ですから、比喩的な言い方だと理解しています。

慣用句、決まり文句、定型を外す

「影を落とす」という言い回しはどの辞書でも、「影」の語義の例文としてではなく、別の扱いになっています。いわゆる慣用句とか成句であり、決まり文句とか定型とも言えそうです。

「(地面や水面に) 影が映る」、「光がさす」、「ネガティブな影響を与える」——「影を落とす」は、大きく分けて上の作文で見た三つの使い方ができるようです。

つぎの例文を見てください。

彼は影を落とした。気がつくとき自分の影がなくなっていたのだ。

午後遅くのことだった。夕日が影を落としている坂道を下っていくと、長い影を引きずりながら上ってくる友人が見えた。すれ違いざまに軽く会釈した瞬間、彼ははっとした。目の前にあるはずの自分の影がないのに気づいた。

理屈に合わない描写もありますが、小説であれば、ありえる文章ではないでしょうか。「これは小説です」と断れば、それはどんなことを書いた場合でも、その言い訳になります。

*

小説と嘘は意外と近そうです。小説、フィクション、虚構、作り話、嘘と並べると分

かりやすいと思います。

小説では何を書いてもいいのです。詩もそうかもしれません。とはいえ、詩は嘘に近いと言う勇氣は私にはありません。書きましたけど。

こういうご飯論法はいけないですね。

小説の基本は「語る」ですから「騙る」に堕ちるのはやむをえないでしょう。「かたる・語る・騙る」、血は争えませんが。

一方の詩の基本は「うたう・となえる・よむ」らしいので、「かたる」とは異なる文脈でとらえたほうが良いと私は思います。

定型を外す

「そこのあなた、忘れ物です。影を落としましたよ」

これは小説ならありそうです。

シュールな展開だと言えます。この科白をうまくつかえば、おもしろい掌編小説が書けるかもしれません。

「影を落とす」という慣用句を文字どおりに取ることで、慣用句の意味をちょっとずらした、つまり定型を外したとも言えるでしょう。

「ずらす」とか「はずす」といったことを私はよくやります。へそが曲がっているからかもしれません。

*

「へそが曲がる」も文字どおりに取ると、なかなか面白い光景が頭に浮かびます。

「へそで茶を沸かす」——いま頭の中で視覚化してみましたが、仰向けになっておへそにやかんをのせている光景には、まさにへそで茶を沸かす滑稽さがあります。

文字どおりに取る

影を落とす、影が落ちる、影は落ちる、影に落ちる、影と落ちる、影で落ちる

こういうふうには、言葉を転がすことが好きです。寝入り際にやるルーティーンの設定です。眠れない夜にも、この遊びをよくやります。

浮かんだフレーズを文字どおりに取って、そのさまを思えがいて楽しむのです。もう少しやってみましょう。

影が影を落とす、影に影が落ちる、陰に影が落ちる、「影を落としたことが、その後の影の生き方に影を落とすことになった」、影と駆け落ちする

＊

「影に影が落ちる」と「陰に影が落ちる」は、日常生活でよく目にします。いまも目の前にそうした光景があります。

居間のテーブルでパソコンを使っているのですが、目の前にあるモニターの背後には、窓からの光で薄く長い影ができています。そこに頭上の蛍光灯を浴びたモニターが、濃い影を落としているのです。

輪郭のあいまいな長く四角い影に、くっきりとした長方形の濃い影が落ちているわけですが、陰の中に影があるとも言えそうな気がします。

影の文法

上で述べた「影に影が落ちる」と「陰に影が落ちる」は、よく観察すると現実にある

わけです。

言葉にするとややこしいことが現実にはある。言葉にしてみるとありえない、つまり非現実に見えるけど、そんな現実がある。

言葉には言葉の世界があるのではないか。言葉を現実の影として考えると、影には影の世界があるのではないか。言葉に文法があるように、影の文法があるのでないか。

こう考えるとわくわくします。

*

繰り返します。

言葉にするとありえないことに思われることが現実にはあるのではないのでしょうか。

もしそうであるなら、現実には現実の文法（比喻です）があって、それは言葉の文法や言葉の慣用とは重ならないし、ずれていてもおかしくはありません。

こういうありえないことを想像すると、わくわくどころかぞくぞくしてきました。ありえなさにぞくぞくするのです。

ありえないこと、さらにはありもしないこと、ないことほどぞくぞくするものはない気がします。少なくとも私にはそうです。

ありそうや、あるは、つまらないのです。ありふれていて退屈なのです。

*

言葉の文法があるように、現実の文法があり、影の文法がある。影の文法なんていいですね。

影の思考とか、影の夢とか、影の言葉なんていうふうにエスカレートしたくなります。

ところで、「影の文法」という言葉に「影の内閣 (shadow cabinet)」を連想してしまい、「言葉には裏の文法がある」なんてぞくぞくするような妄想をいだきそうになります。

ありえない、ありえなさそうなだけに魅力的なフレーズです。いつか妄想してみたいです。記事が一本書けそうな気がします。

そんな妄想をしていたら、言葉には裏の文法がありそうな気がしてきました。あるかも……。影には何でもありそう。

＊

影は自立しているとも言えます。

影には影の論理と文法があるのです。影をよく見てください。その現物とされているものとの類似は驚くほど少ないのです。「似ている」はあくまでも印象なのです。

類似や対応や関係性は、想像力と空想力の産物です。

(拙文「素描、描写、写生」より)

上の引用文ですが、もうエスカレートしていましたね。書いたことを、すっかり忘れていました (最近物忘れがひどいのですが、それでいて既視感の洪水に襲われてもいます)。

影 (言葉や絵や映像や音楽) には影の文法があるようです。現実とは異なる文法にしたがって描かれるし書かれるし作られるのです。

絵を描いている最中に、もはや対象から離れて、絵を成り立たせている素材と細部、そして絵を描くための道具の「論理」と「文法」にしたがって描かれることがあるのと似ています。

そんなときには、描く人は対象を見ながら描いていないように見えます。失礼な言い方になりますが、絵の中での辻褄を合わせているように私には見えます。

私が文章を書くとき、私は言葉の辻褄合わせに夢中になっている自分を感じます。現実にある物や風景を描写しているときにさえ、そうなのです。

細かいところになるほど、目の前の言葉に目を注ぎます。物も風景も思いうかべていないのです。少なくとも私はそうです。

そうした意味で、影（言葉や絵や映像や音楽）は自立していると思います。だから、見たことのない物や風景を描いたり書いたり作ることができるのかもしれませんが。

＊

先ほど上で挙げた作文ですが、「あるべきはずの自分の影がない」というのは確信犯的な「ありえない」だとしても、もし忠実に実写したなら、それ以外にありえない描写がありそうな（要するに下手である）気がします。

私は描写が大の苦手なのです。だから、影の文法なんて言ってレトリックを弄しているのです。

彼は影を落とした。気がつくと自分の影がなくなっていたのだ。

午後遅くのことだった。夕日が影を落としている坂道を下っていくと、長い影を引きずりながら上ってくる友人が見えた。すれ違いざまに軽く会釈した瞬間、彼ははっとした。目の前にあるはずの自分の影がないのに気づいた。

作文 # 影 # 陰 # 言葉 # 日本語 # 描写 # 文字 # レトリック # 比喩 # 擬人法 # 夢 # 絵画

「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする身
振り

＊

「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする身振り

星野廉

2023年3月23日 08:23

目次

ミシェル・フーコーの笑い声

ロラン・バルトの座った席

『批評 あるいは仮死の祭典』

『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』

人はもつれているから、もつれた言葉が解けない

たった一つの解を求めるのではなく

危険と崩壊を回避し、無難で安全な中心にとどまる

「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする身振りたち

関連記事

ミシェル・フーコーの笑い声

昔おもにその著作の邦訳を読んだり、ただその邦訳の字面を見ている存在だった、懐かしいフランス人たちの動画を、最近になって YouTube で漁っています。

以下の動画は最近見つけたものです（この記事が投稿された日のほぼ一週間前）。初めて見ました。ロラン・バルトの長話が続いていますけど、テーブルを囲んで会している顔ぶれをご覧ください。

1978年、ポンピドゥー・センター、ジル・ドゥルーズ、ミシェル・フーコー、ピエール・ブーレーズ……。

(動画省略)

Pierre Boulez Roland Barthes, Gilles Deleuze, Michel Foucault Le temps musical

探すといろいろあります。YouTube が登場した時代まで生きていてよかったとつくづく思います。難聴のために聞き取れないのが残念ですが、それは贅沢な悩みというべきでしょう。字幕を利用できる動画が増えています。

その恩恵に浴して、根がミーハーな私が懐かしいフランス人たちの動画を見て老後を楽しんでいるというわけです。

*

さて、ミシェル・フーコーですが、なんとノーム・チョムスキーと対談しています。難しいですが、なかなか興味深い話のようです。英語の字幕を見ながら、ぼーっと見ていると、目についた言葉の断片から考えが浮かぶことがよくあります。

(動画省略)

ミシェル・フーコー - Wikipedia

ja.wikipedia.org

二人の議論の噛み合わなさあまりにも刺激的すぎて圧倒される自分がいます。ぜんぜん理解などしていないのですが、何度眺めてもおもしろいです。

この動画を見ると、かつて来日したフーコーが吉本隆明と対談したという話を思い出します。対談は後に書籍化されました。その対談のさいに両者の間で通訳をしたのが蓮實重彦なのです。

そういえば、ミシェル・フーコーがNHKテレビに出たときのことを覚えています。渡邊守章氏がインタビューをしたのです。

フーコー著の『言葉と物』がフランスで「プチパンのように売れた（飛ぶように売れた）」ことに渡邊氏が触れると、フーコーが「きっきっ」とまるでお猿さんのような声を上げて笑ったのでびっくりしました。この笑い声はいまでも夢の中で出てきます。

渡邊守章 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

哲学書がベストセラーになる時代がフランスにあったのです。日本でも思想関連の書籍が飛ぶように売っていた時期です。

あれはいつだったのかと気になって調べてみると、フーコーが二度目に来日した 1978 年のことだと分かりました。

ロラン・バルトの座った席

フーコーはちょっと強面なので会ってみたいとは思わなかったのですが、ロラン・バルトには会って見たかったというか、この目で見たかったです。バルトも来日したことがありますよね。

大学進学を機に上京した年の思い出なのですが、生まれて初めて入った飲み屋で、びっくりしたことがありました。

「いらっしゃいませ〜。あら、お若いのね、学生さん？ 何を勉強なさってるのかしら？ まあ、フランス文学ですって？ ほら、あなたのいる席の隣に、ロラン・バルトが座ったことがあるの。バルトは知ってるでしょ？ こんなになって、座ってたわ」

その店のママ（男性です）が、わざわざしなを作ったり、身ぶりや手振りを交えてその時の模様を教えてくれたのです。もちろん、感激しました。思わず居住まいを正し、空席だったその椅子に見入ったものでした。興奮のあまりに鳥肌が立ったのを覚えています。

バルトの日本旅行記というか独創性に富んだ日本論である『表徴の帝国』に、バルトが自分で手描きした新宿の地図が収録されていて、そこにお店の場所と名前が出ていることも、ママが教えてくれました。

後にその本を手に入れて、またまた鳥肌が立ったのを覚えています。あと、その地図にはバルトが来日した当時に、ある種の人たちによく知られていた都内のある映画館の場所も明記されていました。

これなどは、ある種の分野の研究において貴重な資料となるのではないのでしょうか。以上は、言うまでもなく、バルトのしたお仕事とは直接的には関係のないことですが。

”「記、号、の、帝、国、」としての日本は、ロラン・バルトにとっては、ありうべからざる楽園の、不意の、しかも東の間の幻影としてあるのであり、だからその言葉たちは、いささかも「日本論」を構成したりはしえないのだ。”

(蓮實重彦著『批評 あるいは仮死の祭典』p.208)

こうお書きになったのが、蓮實重彦先生なのです。かつて先生の授業を受けたにもかかわらず、ぜんぜん学ばなかったこの私は、いまこんなミーハーな文章を書いています。

筑摩書房 表徴の帝国 / ロラン・バルト 著, 宗 左近 著

筑摩書房のウェブサイト。新刊案内、書籍検索、各種の連載エッセイ、主催イベントや文学賞の案内。

www.chikumashobo.co.jp

ロラン・バルト - Wikipedia

ja.wikipedia.org

ロラン・バルトの動画では以下の映像がとくに好きなのですが、それは素のバルトを感じるからです。

(動画省略)

私は大学の卒業論文でバルトの『S/Z』を論じたのですが、一時期バルト漬けだったこともあって特別な思い出があります。

『批評 あるいは仮死の祭典』

蓮實重彦（以下は敬称略で失礼します）の『批評 あるいは仮死の祭典』では、ミシェ

ル・フーコー、アラン・ロブ＝グリエ、ジル・ドゥルーズ、ロラン・バルト、ジャン＝ピエール・リシャールが扱われていますが、フーコーとドゥルーズとバルトについてはインタビュー（バルトを除いて蓮實がその自宅やアパートに訪ねていく）があり、またその生の人物像が語られていて、私のミーハーな気持ちを満足させてくれます。

ルポルタージュ形式の小説みたいなので、楽しく読めます。

これだけ臨場感にあふれるフランス現代思想のテキストは他にはないのではないのでしょうか。何しろ見てきたように語られているのですから。実際、そうなんです。若き日の蓮實は現場で見てきたのです。

批評あるいは仮死の祭典

電子書籍ストア Kinoppy、本や雑誌やコミックのお求めは、紀伊國屋書店ウェブストア!

1927年創業で全国主要都市や海外

www.kinokuniya.co.jp

ジル・ドゥルーズの出てくる動画では以下が好きです。始めに話しているのはフェリックス・ガタリで、ドゥルーズは11:00から映ります。

(動画省略)

Deleuze & Guattari in Vincennes / A Thousand Plateaus / Lecture 1 / November 18, 1975

晩年のドゥルーズの映像と比べると、この動画から熱気を感じられます。見入ってしまいます。

ジル・ドゥルーズ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

『批評 あるいは仮死の祭典』で描かれている人間味あふれるドゥルーズ像と、あまりにも悲しいあの最期を思うと感傷に流されていきます。ドゥルーズだけではありません。バルトもフーコーも、レイ・アルチュセールも、死因こそ異なりますが非業の最期でした。

もっと長生きして、お仕事を続けていただきたかったと心から思います。

合掌。

＊

『批評 あるいは仮死の祭典』で印象に残っている「ルポルタージュ」があります。

一九七二年の一月にパリで三日間にわたって、マルセル・ブルーストをめぐるシンポジウムが行われ、「ブルーストとヌーヴェル・クリティック」という会が持たれたというのですが、その発言者たちの顔ぶれがすごいのです。

ロラン・バルト、ジャン・ルッセ、ジャン・リカルドゥー、ジェラルド・ジュネット、セルジュ・ドゥブロウスキー、ジル・ドゥルーズ。しかも聴衆の中に小説家クロード・シモンや批評家ジャン＝ピエール・リシャルがいたと書かれています。

その会場にいた蓮實が耳に挟んだという隣席の男のつぶやきが当時の状況を伝えていて興味深いです。

”（前略）今夜の客を見ろ、あれがブルーストって顔かよ、（中略）、ほらあの女の子はバルトの本をかかえている、連中はみんなバルトを見に来たんだ、（中略）、彼等はサインでももらえればとっとと帰ってゆくんだ（後略）”

（蓮實重彦著『批評 あるいは仮死の祭典』p.38、丸括弧内は引用者による。）

根がミーハーな私はこのあたりの描写で、もうため息吐息でめろめろへろへろになります。その会でジル・ドゥルーズが登場して、会場の雰囲気が一変するのですが……。それはいったいどういうことなのか。

これ以上引用も要約も私にはできません。この本を読んでいただくのがいちばんいいと思います。

お祭り騒ぎの雰囲気のイベント。数々の新しい手法を用いた批評のプレゼン大会。ミーハーな観客たち。そんな現場を活写した蓮實の文章はいま読んでスリリングです。

とりわけ、新しい批評がフランスという場でどのような登場の仕方をし、どのように受け入れられていったか、については歴史的な文脈に置いて考えることが不可欠だと感じます。新旧の対立とかせめぎ合いという単純な構図には収まらない「事件性」があったのです。そして蓮實はその事件に立ち会ったのです。

＊

『批評 あるいは仮死の祭典』が出版された時期の日本はどうだったか。

「エピステーメー」をはじめ、「パイディア」、「海」といった雑誌におけるさまざまな書き手の活動が、当時の状況を歴史的な波として考えるさいの資料になると思います。いま振り返ると、フランスとは状況がかなり異なっていたのが分かります。とくにアカデミックな場での状況は日仏では大違いだったみたいです。

日本では——哲学や思想界ではなく——むしろ文芸や文芸批評の担い手たちが、フランスの新しい哲学と思想を紹介・導入する際に積極的で大きな役割を果たしたことは注目していると思います。ともに故人ですが、宮川淳氏と豊崎光一先生のお仕事が忘れられません。

宮川淳 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

豊崎光一 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

沈黙の向こう側—豊崎光一追悼集

沈黙の向こう側 豊崎光一追悼集豊崎令子（監修）／岩崎誠、佐久間和男、中村裕、平山規子（編）／2013年

www.shumpu.com

＊

ジャック・デリダの動画も行きましょう。

あまり長くない動画ですが、内容的に好きな動画です。英語の字幕で読むことによって、エクリチュールという空疎なカタカナ語の不用で無用な呪縛から逃れるだけでも収穫ではないでしょうか。

(動画省略)

ジャック・デリダ - Wikipedia

ja.wikipedia.org

『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』

蓮實重彦の『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』をときどき拾い読みします。通して読むことはないです。

思考停止的な印象、つまり個人の意見および感想で恐縮ですが、この著作でのフーコー論は物語みたいです。何度も読み返さないと分からない物語。読み返しても分からない物語。それでいいのだと思います。あれよあれよと読み返しています。

ドゥルーズ論は現代詩という感じがします。とうてい言葉では伝えられないし説明できないような「何か」をレトリックでほのめかす。そんなポエムです。詩ですから、理解というよりも鑑賞するつもりで読むといいかもしれません。

デリダ論は、この著作ではいちばん読みやすいし分かりやすい気がします。記述が図式的なのです。チャート式ということですね。明晰という言い方もできそうです。読むとすっきりします。言語学のとまとめとか整理に最適の解説だと思います。

講談社文芸文庫 フーコー・ドゥルーズ・デリダ

今や古典となった『言葉と物』『差異と反復』『グラマトロジーについて』をめぐって紡がれた、この「三つの物語」は、一九七八年、

www.kinokuniya.co.jp

人はもつれているから、もつれた言葉が解けない

影は見えるが、意味は見えない。人はもつれているから、もつれた言葉が解けない——。このことをジル・ドゥルーズは繰り返しかえし丹念に言葉にしていた人だったという印象を私は持っています。文学をやるにせよ、哲学をやるにせよ、意味なんていう抽象

でお茶を濁すなという感じでしょうか。
(拙文「解くのではなく溶ける」より)

人はもつれているから、もつれた言葉が解けない——。以下の人たちは、共通してそうした言葉の身振りを演じていたような気がしてなりません。それは、言葉が人の外にある外だからではないでしょうか。

Roland Barthes (1915-1980)

Gilles Deleuze (1925-1995)

Michel Foucault (1926-1984)

Jacques Derrida (1930-2004)

＊

以下の人たちは、上の人たちのものした言葉の模様を、といたりほぐしたりする振りを演じながら、母語である自らの言葉の模様としてほぐしてみせる——それぞれの手法や持ち味は大きく異なりましたが——という、しなやかな身振りを示してくれた。その美しい言葉の身振りは、外国語の著作に母語を重ねるといふいとなみに対する誠実さに他ならなかった。そんな印象を私は持っています。

宮川淳 (1933-1977)

豊崎光一 (1935-1989)

渡邊守章 (1933-2021)

合掌。

たった一つの解を求めるのではなく

話は飛びますが、二十世紀の一時期にフランスあたりで文化的な革命に似た運動の機運がありました。

「フランス現代思想」なんて言葉で検索すれば、たくさんの人名や作品名が出てくるはずです。私もそれに熱中したことがありました。

いまになって思いかえすと、あの運動は決まりに逆らうという言葉と、言葉の身振りに満ちたものでした。

「たったひとつ」という決まりに反抗しまくった人たちがたくさん出たという感じ。

読みの多層性、権力の構造の多元性、解釈と意味の多様性、文字と文字列（アルファベットです）の多義性と多層性、歴史の無数性、知に無数の穴があること（つまりま

だらでまばらですかすかであること)、に注目した人たちがいました。なぜか、みんな比較的短命に終わりました。

(拙文「「たったひとつ」感、「たったひとり」感」 in 「すくえないことで、すくわれる (更新：2022/10/05)」)

フーコー、ドゥルーズ、デリダ、バルトの言葉の身振りから、私が学んだ大切なことは、彼らの著作から「たったひとつ」の解を求めるなという戒めでした。どのセンテンス、どのパラグラフ、どの章、どの著作のレベルにおいてもです。

それなのに、フランス語で読もうと日本語の翻訳で読もうと、人は「たったひとつ」の解を読もうとか求めようとしてしまいます。

「たったひとつ」の解を求めるのではなく、自分の問題として自分の母語で、彼らの言葉の身振りを真似て演じることが、「フーコーする」であり、「ドゥルーズする」であり、「デリダする」であり、「バルトする」だと、私は思います。

たとえば、彼らの著作の翻訳にある翻訳語をもちいて作文したり、または著作を部分的に引用したり、あるいは部分を継ぎ接ぎすることが、「○○（上の固有名詞のお好きなものを入れてください）する」ことになるわけではぜんぜんないのです。

極端な話が、○○の著作を読んでいなくても、たとえ○○の名前を見聞きしたことがなくても、「○○する」のはじゅうぶん可能であり、知らずに○○と似たような身振りを自分の母語の言葉の身振りとして演じている人は、どの国にもいるにちがいません。

いま述べた状況を、「実物や現物のない複製」とか「起源のない引用」という比喻をつかっていいでしょう。いや、むしろそもそも複製や引用や影響といった、「たったひとつ」「たったひとり」への指向を引きずった状況ですらないと言うべきでしょう。

危険と崩壊を回避し、無難で安全な中心にとどまる

よそとよそ者たち（外部と他者である多者）と出会うためにふち（辺境）を歩こうと

いう身振りに満ちたテキストを前にして、ひとつ（同一性や真理や一つの解）を求めてど真ん中（中心）にとどまる。

テキストを解くのではなく、自分の問題としてとらえて自らが溶ける——そんな余裕は頭にも身体にもない。危険と崩壊を回避し、無難で安全な中心にとどまる。

そもそもたった一つの真理やたった一つの解を求めがちな読者層に忖度し迎合しなければならない業界の事情がある。本は売れなければ意味がない。たった一つ感をプレゼンして売るしかない。

そもそもたった一つを指向するアカデミックな村で冷遇されないためには、たった一つを指向する振りをする必要がある。たった一つを指向しがちな学生たちにそっぽを向かれないために、たった一つを指向する振りをしなければならない。

以上のような事情があるのは私も承知しています。

*

「先生、『△△』で○○が何と言っているのか、その意味を分かりやすく、できればX X字以内にまとめてご教示願います。あと、この著作における○○の意図についても手短かに教えてください。全体を簡潔かつ明快で、やや難解っぽい味付けで仕上げただけであればうれしいです」

ほら、読者も学生もフォロワーも口をそろえてそう言っているではないか。現在は、著作や作品の意味と意図をすっきりさくさくと投稿して拡散させる時代なのだ。

たった一つを指向する身振りをしなければ、いいねもフォローももらえない、すっきりすんなりさくさく至上のSNSが、出版界や学問の世界の「武器」になっている事情も理解しています（なお、味付けについてもうるさくなっている傾向に関しては同情いたします）。

ただし、そこにはきっと葛藤があるにちがいないと私は想像しています。

「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする身振りたち

固有名詞（たとえば人名や著作名や作品名）の放つ光はまばゆいです。「たった一つ」「たった一人」を指向するからです。その指向する力はとてつもなく強いと言えます。

たった一つの作品、作品はたった一つでしかない、たった一人の作者、作者はたった一人しかいないー。

なにしろ、この記事で挙げた固有名詞たちが戦ってもびくともしなかったのです（もしそんなことがあったとしての話ですけど）。現在もそのまばゆい光と力は温存されています。

この記事で挙げた固有名詞たちに共通した身振りがあったとするなら、それは「たったひとつ」「たったひとり」に抗おうとする——抗って勝てるものではないのを承知のうえであえて抗おうとする——身振りではなかったかと思います。

そうした身振りがいまでも世界のあちこちで演じられているはずだと私は信じています。

関連記事

※以下の記事やマガジンでは、この記事に出てきた人物たちの著作を私なりに読んだり眺めながら、解くのではなく溶けようとした記録が集めてあります。解説や注釈や感想文ではないという意味です。

イメージ、連想、似ている | 星野廉 | note

このマガジンのキーワードは、イメージ、連想、似ている、起源なき引用、実物なき複製です。

note.com

意味、言葉、レトリック、体感 | 星野廉 | note

このマガジンのキーワードは、意味、言葉、レトリック、体感です。

note.com

抽象、具象、体感、印象 | 星野廉 | note

このマガジンのキーワードは、抽象、具象、体感、印象（「似ている」「そっくり」）、レトリックです。

note.com

※以下の各記事には重複する内容があります。

* 「たったひとつ」感、「たったひとり」感

* 私たちは同じではなく似ている

(※この2本の記事は比較的読みやすいと思います。)

* ふーこー・どうるーず・でりだ・ばると (その1) 【引用の織物】

* ふーこー・どうるーず・でりだ・ばると (その2) 【引用の織物】

* ふーこー・どうるーず・でりだ・ばると (その3)

* ふーこー・どうるーず・でりだ・ばると (その4) 【引用の織物】

* ふーこー・どうるーず・でりだ・ばると (その5) 【引用の織物】

* 意味の論理楽・その1 【引用の織物】

* 意味の論理楽・その2 【引用の織物】

* 1/3 『仮往生伝試文』そして / あるいは 『批評 あるいは仮死の祭典』 その1

* 2/3 『仮往生伝試文』そして / あるいは 『批評 あるいは仮死の祭典』 その2

* 3/3 『仮往生伝試文』そして / あるいは 『批評 あるいは仮死の祭典』 その3

* 文字の顔

* 【小説】知らないものについて読む

* 【小話】Mの世界で生きる

ミシェル・フーコー # ジル・ドゥルーズ # ロラン・バルト # ジャック・デリダ # 宮川淳 # 豊崎光一 # 渡邊守章 # 読書 # フランス語 # 日本語 # 批評 # 現代思想 # 同一性 # 蓮實重彦

解くのではなく溶ける

＊

解くのではなく溶ける

星野廉

2023年3月21日 08:22

目次

ときほぐす

落とした影、投げた影

影を並べる

影をときほぐす

解くのではなく溶ける

関連記事

ときほぐす

ときほぐす、解きほぐす、解き解す

「解き解す」という表記を見てください。こういうことになるのは、日本語がもつれているからです。

もつれにもつれているという印象を私は持っています。言葉の中に言葉があるからでしょう。言語の中に言語があるからでしょう。

日本語が一様なものではないという意味です。次の言葉たちを見ると一目瞭然です。もともと島々にあったらしい音が、のちに大陸から来た形を迎えた跡が見えます。

とく、ほぐ

とく、溶く、融く、熔く

溶きほぐれる

「解く」と「溶く」は同源らしいのですが、「溶きほぐれる」というのもじっくり来ます。溶解というイメージ。

溶けて解れていく。

「溶けて解れていく」のは私たちのことではないでしょうか。もつれにもつれた日本語を話し書きながら、私たちが溶けて解れていくのです。言葉は人という存在を溶かし解していく力がありそうです。

頭だけにではなく体に働きかける力でしょう。おそらく体のつぎに頭なのではないでしょうか。

落とした影、投げた影

” ジル・ドゥルーズ——エディプスと形而上学

L'enfant est un être métaphysique.

——Gilles Deleuze, Felix Gatari:L'Anti-dipe”

蓮實重彦『批評 あるいは仮死の祭典』（せりか書房）P.49

「子どもは形而上学的存在である」と日本語にすることもできる文の意味はさておき、『批評 あるいは仮死の祭典』という本で、ジル・ドゥルーズが蓮實重彦に「落とした影」（「投げた影」でもいいです）を眺めていると、次の言葉が浮かびます。

métaphysique、physique（フランス語）

metaphysics、physics、physical（英語）

私にとってジル・ドゥルーズという固有名詞が投げてくる影は、上の語に尽きると言ってもかまいません。

それぞれの単語の語義を辞書で眺めるとわかりますが、フランス語も英語も日本語と同じく、もつれにもつれていることが目に見えます。一目瞭然なのです。言葉の中に言葉があり、言語の中に言語があるからに他なりません。

英語やフランス語の単語のそれぞれの語義は英和辞典や仏和辞典に載っているものの、英和や仏和辞典に載っているのは、語の意味ではなく訳語です。そもそも意味は見えるものではありません。

こうした訳語が日本語の中の言葉になっていることは明らかです。まさに言葉の中の言葉です。

漢字やひらがなからなる訳語があるのに、カタカナで表記された語が並行してもちいられている場合も多々あります。

もつれているのです。私は、こうしたもつれは言葉にとって自然なありようであり、このもつれが言葉を豊かにしていると思います。

もつれにもつれたものを、ときほぐすのは人には無理でしょう。人がもつれているからです。こちらがとけてほぐればいいのです。

＊

英和や仏和辞典で見えるのは、英語やフランス語の落とした（投げた）影たちだという気が私にはします。影つまり像ですから、見えているのは文字という形なのです。意味は見えません。

影は見えるが、意味は見えない。人はもつれているから、もつれた言葉が解けない——。このことをジル・ドゥルーズは繰り返しかえし丹念に言葉にしていた人だったという印象を私は持っています。文学をやるにせよ、哲学をやるにせよ、意味なんていう抽象でお茶を濁すなという感じでしょうか。

河出文庫 意味の論理学〈上〉

ルイス・キャロルからストア派へ、パラドックスの考察にはじまり、意味と無意味、表面と深層、アイオーンとクロノス、そして「出来

www.kinokuniya.co.jp

河出文庫意味の論理学〈下〉

ドゥルーズの思考の核心をしめす名著、渴望の新訳。下巻では永遠回帰は純粋な出来事の理論であり、すべての存在はただひとつの声で

www.kinokuniya.co.jp

批評あるいは仮死の祭典

電子書籍ストア Kinoppy、本や雑誌やコミックのお求めは、紀伊國屋書店ウェブストア!
1927年創業で全国主要都市や海外

www.kinokuniya.co.jp

影を並べる

器官なき身体、corps sans organes

métaphysique、physique

メタフィジック、フィジック

metaphysics、physics、physical

メタフィジックス、フィジックス、フィジカル

形而上、形而下、物質・身体

無形、有形、有形・身体

抽象、具象、具体

形がない、形がある、体で感じ分ける

影をときほぐす

- ・無形と有形のあいだで、有形の身体を置いて有形を感知する。
- ・抽象と具象のあいだを行き来しながら、具象を具体的な体験として生きる。
- ・「形がない」と「形がある」との縁（ふち）で、形を体で感じ分ける。

- ・意味と影のあいだで、影を解こうとした人間が溶けていく。

形のある影を、そもそも人がすくい取ったり解いたりできるわけがありません。人は形である影に追いつけません。人には枠があり限りがあるからです。

影を解きほぐそうと試みたところで、人は自分がほぐれるしかなさそうです。自分が

ほぐれて溶けていくのです。

形のある影を、人は解きほぐそうと試みながら、自分が溶きほぐれていく。

解くのではなく溶ける

厳めしい、偉そう、もっともらしい、漢字・漢語。
音の羅列、カタカナの羅列、意味不明、カタカナ語。
しっくりくる、すっと入ってくる、和語・大和言葉。

漢字からなる語とカタカナ語を大和言葉で解きほぐす。
抽象を具体的に自分の問題としてほぐす。

ほぐして何かに到達するとは限らないでしょう。むしろこっちがほぐれて溶けていく
かもしれません。溶けていくのは頭ではなく、たぶん体です。

解くのではなく、溶けるのです。分けるのではなく分（わか）れるのです。

関連記事

※以下の2本の記事は、私なりにジル・ドゥルーズの著作を読んだり眺めて、解くのでなく溶けようとした記録です。日本語を母語とする自分の問題として考えたという意味です。解説や注釈や感想文ではありません。

※意味の論理楽・その1【引用の織物】

※意味の論理楽・その2【引用の織物】

※以下の記事は、過去の記事を集めたパッチワークなので重複があります。

※ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その1）【引用の織物】

※ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その2）【引用の織物】

※ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その3）

※ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その4）【引用の織物】

※ふーこー・どうるーず・でりだ・ぼると（その5）【引用の織物】

#ジル・ドゥルーズ # 蓮實重彦 # 日本語 # 漢字# ひらがな # カタカナ # 大和言葉 # 和語 # 漢語 # 翻訳語 # 英語# フランス語 # 辞書 # 辞典 # 影 # 文字 # 意味 # 翻訳

言葉の向こうに見える、言葉、現実、まぼろし

＊

言葉の向こうに見える、言葉、現実、まぼろし

星野廉

2023年3月14日 15:59

目次

あなた・貴方（貴男・貴女）・彼方

言葉の向こうに見える言葉

置き換える

かげ、影、陰、翳

言葉の向こうに見える現実

言葉の向こうに見えるまぼろし

うつせみのたわごと

あなた・貴方（貴男・貴女）・彼方

「あなた」は「貴方、貴男、貴女」とも「彼方」とも書けます。

こうなったのには理由があるのですが、いまのこの時点で考えると、英語で言えば、1) you の意味と、2) over there の意味の二つがあるということです。

「あなた」という音に、「貴方、貴男、貴女」と「彼方」という漢字を当てたと考えることもできるでしょう。当て字です。

言葉の向こうに見える言葉

上で述べた二つの意味の「あなた」は両方とも言葉であり文字です。言葉の向こうに見える言葉とも言えそうです。

「貴方、貴男、貴女」(you)という言葉の向こうに見える、「彼方」(over there)という言葉。

「彼方」(over there)という言葉の向こうに見える、「貴方、貴男、貴女」(you)という言葉。

どちらから見ても、言葉の向こうに見える言葉です。

いま見えると言いましたが、どちらか一方を意識していると、もう一方が見えない気がします。騙し絵のように。

不思議と言えば不思議です。ふだんは考えないことですから、当たり前と言えば当たり前かもしれません。

置き換える

「そういうのはね、両義性とか多義性と言うの」、「多義語っていうのがあるんだ」

そう言われると、「なんだそういうことか」と納得しそうになります。ある言葉に二つ以上の、つまり複数の語義や意味があるという話です。

このように、ある現象を偉そうな言葉や用語に置き換えると、それで分かった気持ちになりますが、それは別の言葉に置き換えただけで分かったのではないと私は思います。

偉そうな言葉に置き換えることで、それが指す現実を観察しなくなるからです。解決済みのものとしてかえりみなくなり、それについて考えるのもやめてしまうからです。つまり、思考停止状態におちいっているとも言えます。

ある具体的な体験を、ゲシュタルト崩壊とか承認欲求とかブルースト効果とかバタフライエフェクトと呼んで済まし澄ましているのと同じです。

レッテルを貼って分かった気分になるよりも、そうした現象をよく観察し自分の問題として具体的に考えるほうが、人生はわくわくと私は思います。

かげ、影、陰、翳

「かげ」を辞書で調べると、いろいろな語義が載っています。そのどれもが「かげ」です。上で述べた多義語であり、多義性が「かげ」という言葉に立ちあらわれているわけです。

言葉の向こうに見える言葉がこれだけたくさんあるなんて、すごいです。多義語とか多義性なんて言葉に置き換えて、考えるのをやめてしまうなんて、もったいないと私は思います。

「かげ、影、陰、翳」と書き分けることができるのですから、それだけいろいろな「かげ」が現実にあるのにちがいません。

「かげ、影、陰、翳」という言葉から、「かげ、影、陰、翳」を探して現実を見てみる——。そんなふうになるとわくわくぞくぞくしてきます。

さらに、「かげ」を比喩的に騙し絵として考えてみると、ものすごい騙し絵じゃないですか。何通りに見えるのでしょうか。想像すると気が遠くなりそうです。

このすごさは、言葉が必ずしも視覚に訴えるものではないからなのでしょうが、だからこそ、言葉はすごいと思います。

言葉の向こうに見える現実

言葉は現実を写したもの、言葉は現実の影、小説は世界を写した鏡——このように言われることがあります。

現実が先にあって言葉が後に来るという発想です。

一方で、言葉は現実ではないので、言葉と現実がぴったり重なることはありません。言葉と現実是一对一に対応しないという意味です。

言葉には言葉の世界があります。言葉は自立した世界を持ち、自立した存在でもあるのです。

とはいうものの、言葉の世界と現実の世界は似ています。

＊

猫という文字や発音は、猫という生きものとは同じではない、つまり別物である。それどころか、ぜんぜん似ていないのに猫という文字と発音で、人は現実の猫を思いだすし、思いうかべるし、思いえがくことができるのです。

言葉の世界から現実の世界を見ているとか、入っていくとも言えます。

たとえば、学習の効果とか条件反射という偉そうな言葉に置き換えて、考えるのをやめるのではなく、人が言葉から現実に入っていく現象を、自分のこととして意識的に体験するのもわくわくするだろうと思います。

私はいまこの現象がとても気になります。不思議でならないのです。

言葉の向こうに見えるまぼろし

言、現、幻。

この三つの漢字は「げん」と読めます。

言界、現界、幻界。

この三つの漢字の文字列は「げんかい」と読めます。私がつくった自分語なのですが、よくこうやって並べたり、記事の中でつかったりします。

言葉の世界、現実の世界、まぼろし（思い）の世界。

このように変奏したり変装したり変相することもできます。こういうことが好きなのです。

*

いま私が挙げた三組の文字列ですが、これは言葉であると同時にまぼろしではないかと私は思います。いま現実目にしているという意味では現実と言えるのかもしれませんが。

これが言界であり現界であり幻界なのですが、そう自分語で言われても困りますよね。そんなことを言われても確認しようがないからです。

その意味では、言界は現界であり幻界であり、限界でもあるのです。

うつせみのたわごと

上で見てきたように、言葉の向こうには言葉が見えることがあるし、言葉の向こうには現実が見えることがあるし、言葉の向こうにはまぼろしが見えることがある。そんな気がします。

「うつせみのたわごと」（全14回）ではそういう話をしていきます。以上、「うつせみのたわごと」のご紹介と宣伝でした。

読みにくくて退屈な連載ですけど、よろしく願いいたします。

レトリック # 言葉 # 漢字 # ひらがな # 多義性 # 多義語 # 両義性 # 意味 # 日本語
自分語

素描、描写、写生

＊

素描、描写、写生

星野廉

2023年3月13日 08:00

目次

かげ、影、陰

言葉のかたち

記憶の風景、記憶のかたち

写生と描写

描写、なぞる

言葉の影、言葉というまぼろし

複写、複製、印影、拡散

外にある線をなぞる

影には追いつけない

かげ、影、陰

かげという言葉が好きです。「かげ、カゲ、影、陰、蔭、翳、景」という字面をみているだけで、気が遠くなりそうになります。

呼びさまされるイメージに圧倒されるのでしょうか、息が苦しくなり收拾がつかなくなるので、深呼吸をして心を静めます。

寝入り際に、かげについて思いをめぐらすことがあるのですが、そんなときには幸せな気分になります。

昨夜は、影と陰について考えていました。

大きな木の下を夢想しながら、かげについて考えていたのです。それを思いだしながら、文字にしてみます。

言葉のかたち

木の陰で木の影について思いをめぐらしていたのです。夢うつつの中での話です。

まず影と陰の違いを見てみましょう。影と陰の使い分けは、例文で見るのがいちばんです。以下の例文は私が作文したものです。

葉の落ちた地面に、木が影を落としている。

庭の池に木の影が映っている。

散歩の途中に木の陰で一休みした。

犬が木陰で身を横たえている。

影は光をさえぎってできる、あるいは水や鏡に映った形や姿です。一方の陰は、日の当たっていない場所です。

*

かげが影と陰という言葉で分かれているというよりも、かげの使い分けが漢字の使い分けにあらわれている気がします。

もともこの島々にあった「かげ」という音の影が、ずっと後になって「影、陰、蔭、翳、景」という形の影を大陸から迎えたのですから。

「かげの使い分けが漢字の使い分けにあらわれている」というのは、「まず現実での体験があって言葉は後に付けた」というふうにとることもできそうです。言葉から現実に入る人は、まずいないでしょう。

いや、いるかも。そういうことが、あるかも。いつか寝入り際に考えてみます。

*

言葉、とりわけ文字は後付けです。ことわり、言割り、事割り、理なのです。理屈のことです。

分けなくてもいいものを分けているのか、分けるべきだから分かれているのか。分かりません。これは、断り。言いわけです。

私は研究者でも探求者でもありません。ただ言葉が好きだけです。言葉の不思議さに取り憑かれているだけです。

こうやって言葉に付きあってもらっているだけで満足しています。

記憶の風景、記憶のかたち

話を戻します。

昨夜の寝入り際の夢うつつの中で浮かんだ景色を、いま思いえがいています。

言葉にしてみます。

*

草原を歩いていると、遠くに大きな木が見えた。近づいてみると、木のそばには池がある。草の生えた地面に木がくっきりとした影を落としている。

池には、その大きな木の先端の影が映っている。草で被われた地面に落ちている木の影が伸びて、水面に映る木の影につながっているように見えなくもない。

どうなっているのだろうと興味を覚え、歩を進めて木の陰の中に入った。地面に映った木の影が池に映った影と重なっている。

不思議な気持ちでそのさまに見入っていると、そばで何かが動いた気配がしてぎくりとした。

木の陰で身をひそめていたのか、猫がこちらを見ている。灰色っぽい毛の痩せた猫だ。

＊

この後に、寝入った記憶があります。昨夜と今朝の夢では影も陰も出てこなかった気がします。

写生と描写

以上の作文は、昨夜の寝際に浮かんだ風景を思いだしながら作ったものですが、いま読みかえしてみると、その嘘っぽさに恥ずかしくなります。

記憶を頼りに何かを思いえがいたり、ましてやそれを言葉にすることの難しさを実感しただけでなく、そこまでして言葉にしようとする自分の執念にたじろいでしまったのです。

影と陰について意識的になっているために取って付けたような作文になっています。いかにも作りものっぽいのです。

＊

文章を書くという行為は、ふつう屋内というか室内でおこなわれます。私の場合には自宅の居間でパソコンを使って書くのが習慣になっています。

何かを、あるいは何らかの風景を見ながら、その場でノートやメモ帳にペンで書くとか、スマホに文字を入力して書くというのは想像しにくいです。

書くことを職業としている人なら、現場で取材メモを取るでしょう。いわば言葉による素描（デッサン）でしょうか。でも、清書するのは帰ってからの屋内だと思います。

俳句や短歌や短い詩の場合には、その場で言葉を口にして、何かに書きとめたりすることは十分に考えられます。俳句だとそのまま、作品になるのかもしれませんが。そういう場合があるとすれば、素描がそのまま清書になる感じがします。

写生という言葉が、明治になって俳句の関係者たちの間で口にされるようになったのは、分かりやすい展開だと言えるでしょう。

＊

絵画と文章を同列に扱うことはできませんが、デッサン、素描、写生、描写という共通の言葉で論じることは多いようです。私もやっています。

文章の場合に話を限れば、その場で文字にして、以後手を加えない——一気に書く、一筆で書く、一気呵成——という写生は、きわめて稀な出来事だと思います。俳句くらいのものでしょうか。

デッサン、素描はあるでしょうが、後で清書することになります。さらには推敲もあるでしょう。

小説、エッセイ、新聞や雑誌の記事、ブログという形で、私たちが読む文章は、現場で撮られた写真とは異なり、現場から持ち帰ったメモや記憶を元にして描かれた絵に近いと言えます。

描写、なぞる

描写は、写す、映す、移す、撮すと言うより、事物や風景そのものではなく、その影をなぞっているのです。それもじっさいに見てから時間を経てのことです。見て写す、つまり写生とは、次元が異なっているとも言えます。

その意味で、描写は事物を描き写すのではなく、むしろ事物の影をなぞることではないでしょうか。そもそも見なくても描写できます。現場にいなくても描写は可能だし、じっさいにそういう創作がおこなわれています。

だから、見たことがない事物でも描写できるのです。

(意外に思われるかもしれませんが、『夢十夜』を書いたときの夏目漱石は、このことにきわめて意識的であった節があります。夢日記の形を取りながらも、あの作品が夢の再現では断じてないからです。細部に見られる優れた描写に目を注げば一目瞭然なのです。

たとえば夢日記という言葉があるから、勝手に人はその存在をでっち上げてしまうのでしょうか。その意味で夢十夜はミスリーディングなタイトルと言えるかもしれません。)

なぞるという行為は、必ずしも対象を見ているわけではないのです。

むしろ、影（言葉のことです）そのものの世界に入っていくといとなみなのです。影には影の文法があるようです。現実とは異なる文法にしたがって描かれるし書かれるのです。

絵を描いているとき、もはや対象から離れて、絵を成り立たせている素材と細部、そして絵を描くための道具の「論理」と「文法」にしたがって描かれるのと似ています。

日本でも西洋でも、絵は先行するたくさんの絵を見てその描き方を覚えたうえで、手本に沿って描く、あるいはじっさいに物や風景を見て描かれてきた。そんな話を見聞きした覚えがあります。

ほら、〇〇流とか、〇〇主義とかあるじゃないですか。描き方があって、それに従って描いていたし描いているようです。だから、その流派の絵はそれぞれ似ているのです。

個性や才能は伝統という枠の中での括弧付きのものだという気がします。

*

影は自立しているとも言えます。

影には影の論理と文法があるのです。影をよく見てください。その現物とされているものとの類似は驚くほど少ないのです。「似ている」はあくまでも印象なのです。

類似や対応や関係性は、想像力と空想力の産物です。

言葉の影、言葉というまぼろし

木の影と似た言い方に樹影があります。木の影と木の陰だけでなく、木の姿という意味もあるようです。

樹齢二百年という、そのいちょうの樹影がピラミッドに見えた。

即席に作った文ですが、こんな使い方ができそうです。

＊

木という生き物、その木の姿である樹影、その木に日の光が当たって地面に移る影、その木にさえぎられてできる陰。そうした「かげ」たちは、木そのものではありません。

言葉は、それが指ししめしたり、名指す事物そのものではありません。その意味で、かげに似ている気がします。いわば言影です。勝手に作った言葉、いわば自分語ですが、ことかげとか、ことえいとでも読みましょうか。

言葉には姿があります。文字のことです。文字は形であり姿ですが、文字には音（おん）も、語義も意味もイメージもあります。

音と意味とイメージは目に見えません。それなのに、音と意味とイメージには大きな存在感があります。

＊

音と意味とイメージは、まるで文字の影のようですが、そんなことはなく、むしろ音が先で、文字は後付けなのです。まず話し言葉があって、書き言葉が出てきたのはずっと後のことだと言われています。

それなのに、目に見える形としてある文字はいかにも偉そうに見えます。人は目に見えるものに信を置きます。一方で、目に見えないものに畏怖の念をいだくことがあります。

言葉は目に見えるものでありながら、目に見えないものでもあります。具象と抽象を兼ねそなえている、具象と抽象が同居しているという言い方もできるでしょう。

だから、人の外にあって、人の中に入ったり出たりできるのです。

不思議ですね。謎です。考えれば考えるほど不思議でなりません。

複写、複製、印影、拡散

まるでまぼろしのようです。幻影のようです。見ているようで見えていない。見えていないようで見える。

まぼろしは見るものではなく、なぞるものではないでしょうか。なぞるのであれば、目をつむってもできそうです。

なぞることなら、日向もなく陰もない、したがって影もない闇の中でもできそうです。

なぞることなら、生きていない物でもできるのです。人工知能のことです。コピー機のことです。ネット上での文字の入力、投稿、複製、拡散、保存のことです。

よく考えるとぞっとすることが、日々、いやいまこの瞬間にもあちこち、いや無数の場で起きているのです。

＊

見ていなくても、闇の中でも、描写はできます。無生物も、描写ができます。

まぼろしはまぼろしも描けるのです。まぼろしでまぼろしを描くこともできるのです。

まぼろしをなぞる。さらに言うなら、なぞるをなぞる。

これは、人の外にある出来事であって、人の中に入ったり出たりすることがあっても、つまり人がなぞることはあっても、外そのものなのです。

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。

だから、機械や AI にも文章が書けるのです。書いていると、書いているように見えるのさかいはないのです。さかいがあるのは人においてだけであり、さかいはおそらく外にはないのです。

たぶん、あらゆるさかいがそうなのでしょう。さかいは人が決めるものです。だから、線引きをめぐる争いが跡を絶ちません。

さかいはありません。少なくとも外にはありません。

外にある線をなぞる

人は自分で勝手に引いた線をなぞっているだけだとも言えそうです。

自分が引いたはずの線が「外にある外である」のは皮肉ではないでしょうか。これは線が自立しているからに他なりません。

＊

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。人の思いや思惑とは関係がなく「ある」という意味です。

これは、いま始まったことではありません。写本、写経、印刷の時代から起きている出来事なのです。

(人が文字をなぞり写すのは、線からなる文字が外にあるからです。内にあれば、わざわざ苦労して写しません。)

そして、複写。コピー (印影と呼びたいです)、複製。さらには、現在のコピーのコピー、複製=拡散=保存が起きているのは、同じ理由でそうなっていると言えそうです。

いまや、「写す」と「なぞる」は人の手に負えないものになり、人は振りまわされています。いや、これもいま始まったことではないでしょう。

影が外にある外であるという話は、人が言葉を持ったときに始まったにちがいません。

私は詳しくない分野なのですが、おそらく音楽や演劇やスポーツも影をめぐり、影を追っているいとなみだという気がします。

影には追いつけない

プレイ (play) なのです。演技、演劇、ドラマ、遊戯、賭け、演奏、競技、パフォーマンス、これらすべてがプレイであり、影を追い、影をなぞっているのではないのでしょうか。

演じる、振りをする、遊ぶ、戯れる、賭ける、奏でる、競う、おこなう、なぞる。名詞ではなく、このように動詞としてとらえるとさらに、体感しやすいと思います。

影をなぞるというのは、動きであり、その動きが刻々とうつつっていくことだからでしょう。ほら、影って動いていますよね。だから、ずっと目で追い、体で追いつづける必要があるのです。

影を前にして、人は迂回するしかなさそうです。おそらく言葉という影にまどわされながら、でしょう。人が（に）先立つ影に、人が導かれるはずがありません。人は影には追いつけません。気づくのにも遅れるのです。全体像を目にすることさえできないのです。

（拙文「意味のある影、意味のない影」より）

そうなのです。人は決して影に追いつけません。それなのに、自然界にある影に満足せず、自分でも影を作っているのです。作りつづけているのです。

#影 # 陰 # 言葉 # 日本語 # 記憶 # 素描 # 描写 # 写生 # 絵画 # デッサン # 文字 # 幻
夏目漱石 # 複製 # 拡散 # AI

小説をまばらにまだらに読む

＊

小説をまばらにまだらに読む

星野廉

2023年3月12日 07:52

目次

線と点で線状に並べていく

言葉は外にある外

「きょうから、黒いカラスは白いサギだ」

一気に書かれたわけではない

点と線を面として眺める

染み、模様を眺める

文字や文字列や文章を見る、眺める、読む

言葉の夢、夢の言葉

線と点で線状に並べていく

「動き」は自然の状態であり常態であると思います。とはいえ、人は「動き」を見たり知覚したとしても、それを言葉にする以外に他の人と「動き」について語りあうことはできません。言葉という形で外に出さない限り、他人といっしょに確認できないからです。自分の中で思うだけという意味です。

(拙文「【小説】動くものを手なずける」より)

小説は文字で書かれています。小説には最初があって終わりがあるのですが、それは冒頭の一文字、一語、一フレーズ、一センテンス、一段落、一章であるとも言えます。最後も同様に、一文字、一語、一フレーズ、一センテンス、一段落、一章で締めくくられるわけです。

冒頭と終りのあいだはどうなっているのでしょうか。

文字や語やフレーズやセンテンスや段落や章が、線状に並んでいきます。発せられた瞬間にどんどん消えていく音からなる話し言葉と違って、文字からなる文書は始まりと終りとそのあいだが目に見えます。

これは文字が物だからです。具体的にはインクの染みであったり、液晶上の画素の集まりだったりします。物だから固定されています。動かないのです。消さないかぎり残ります。

印刷物であれば、他にもたくさんどこかに同じものがあるはずです。ネット上で読めるものなら、これまたなぜかどこかに同じものがたくさんあるはずです。

不思議でなりません。私が趣味として言葉のありようの観察をしているのは、言葉がこうした不思議だらけだからです。

文字からなるある文書とまったく同じものがどこかにたくさんあるのは、どんな文字も複製だからであり、そもそもどんな文字や文書も複製で読むものだからでしょう。詩も俳句も小説も宣伝のコピーも法令も実用書も、すべて複製で読まれています。

あっさりと書きましたが、私にはこれもまた不思議でなりません。頭では分かりますが、どう受けとめていいのかよく分からないところがあるのです。

言葉は外にある外

おそらく点でも線状でもないもの——現実や思いのことです——を、文字という人の外にあって外であるもの——物だという意味です——をもちいて、点と線として配列するというのは不思議ないとなみだといわなければなりません。

人の中にそういう仕組みがあるとした私には考えられません。人の中にある仕組みに合わせた形で、外にある外——これはままたまらない、つまり人の思いどおりにならないという意味です——である物を利用しているのかもしれない。

人のつくるものは人に似ている。人の外面だけでなく内にも似ている。人の意識をうつしていると思えないものがある。

書物、巻物、タブロー、銀幕、スクリーン、ディスプレイ、モニター。
(拙文「影に先立つ【引用の織物】」より)

いずれにせよ、声という音と異なり、文字は人の外にある物です。見えます。音読すれば声、つまり話し言葉にもなります。消さないかぎり残っています。しかも文言をいじるという形で文字はいじれます。こう考えると文字はとても便利です。

ただし、いじりやすいのは、それがインクや液晶上の画素の集まりである物としての文字だからであり、曖昧模糊とした思いや、手を加えるのが困難な現実ではないからです。

しかもというか、そもそも、文字と現実と思いは別物であって、一対一に対応したり、きれいにぴったり重なるものではありません。

これを忘れててはならないと思います。だから、文字で現実や思いの辻褃合わせや帳尻合わせをするのは無理があります。

そんな無茶をすると無理がたたって喜劇や悲劇が生まれます。実のところ、あちこちで喜劇や悲劇や悲喜劇が生まれています。これは文字を使う誰もが日々体験することです。

人類にとって最大の悲劇である戦争も、現実の辻褃合わせを言葉、とりわけ文書でおこなっていることから、しばしば起きます。

「きょうから、黒いカラスは白いサギだ」

たった一人、または一握りの人たちの辻褃合わせに国民だけでなく、世界が付き合い合われています。現在の話です。

「きょうから、黒いカラスは白いサギだ」

「異議なし。そのとおりでございます」

このようにして「黒いカラスは白いサギである」と決まり、文字になって複製されて

世界中に拡散すると、もう消せません。文字は決めた人の手の届かない「外である外」だからです。

こうやって今度は文字の辻褃合わせと帳尻合わせのスパイラル（デフレスパイラルのスパイラルです）が始まります。苦勞するのは、それに付き合わされた国民です。スパイラルは渦ですが禍でもあります。

どだい無理な辻褃合わせは必ず綻びが生じますから、つぎつぎと綻びをつくろう必要が出てきます。切りがないわけです。渦どころか禍でしょう。

＊

ここまでをまとめます。

文字はいじりやすいのですが、いったん文字にすると残ります。複製されてたちまち拡散もします。すると取り消すことができなくなるのです。

これを取り消すことができないため、辻褃合わせはエスカレートするしかないという悪循環（スパイラル）におちいりますが、これは恐ろしい話です。いま起きている戦争の話です。

何が恐ろしいって、戦争も恐ろしいですが、文字が外であること、つまり文字が人の思い通りにならないことがもっとも恐ろしいのです。

いじりやすいのに、思い通りにならないし、言うことを聞かないのですから。こんなやっかいなものが、ほかにありますか。

＊

戦争までには至っていませんが、人びとが権力側にいる人の辻褃合わせに付き合わされる例はあちこちで見られます。自分にとって都合の悪いことは、フェイクニュース、嘘、印象操作、でたらめ、捏造、フィクション、事実か確認できない、記憶にないと決めつけたり決めるわけです。

つまり、その人は言葉をいじって、それで辻褃合わせや帳尻合わせをした気分になります。その言葉が文字、つまり文書になり、固定され複製され拡散されます。

すると、その文字化されてがちがちに固まった言葉を支持するか支持しないかで、人びとが分断されるという事態を招きます。真偽や正誤や善悪といったかつての判断基準が機能しなくなり、声の大きさや権力（暴力を法にのっかって行使する権利）で、「そうだ」「そうでない」が決まる時代に、いまはなっています。

権力側は辻褃を合わせるためには何でもしますから、エスカレートして辻褃合わせ地獄になります。

現在は、真偽、本物と偽物、正誤、善悪の境が曖昧になっている気がしてなりません。複製には複製の本物があり、引用には引用の起源があるというモデルが曖昧になっているからでしょう。そもそも真対偽、本物対偽物、実物対複製、起源対引用、正対誤、善対悪なんて図式はウソという感じです。本物や起源の権威が失われてきているだけでなく、本物や起源という概念を成立させている西欧的な知の枠組み自体が危うくなってきているとも言えるでしょう。

(拙文「本物のない複製の複製、起源のない引用の引用（更新：2022/11/08）」より)

辻褃合わせ地獄（スパイラル）で権力を持つ側が圧倒的に優勢なのは、みなさんご承知のとおりです。こうなっているのは、法という最強の「文字による現実と思いの辻褃合わせ集」の後ろ盾があるからにほかなりません。法にのっかってさらなる辻褃合わせをする権利は、常に権力が握っているという仕組みがあるという意味です。構造的な問題というのでしょうか。

〇〇領令、〇議決定という形で、一人のあるいは少数による辻褃合わせが即法律になったり、法的根拠を持ってしまうのです。それを支えているのが、人事上の任命権や業務の認可権が三権分立と権力の監視をないがしろにし骨抜きにしているという構造です。

こうなると、法にのっかって辻褃合わせをする権利を握っている権力をのっからない限り勝ち目はないという理屈になります。

＊

このように、文字をいじるのは簡単だけど、いじって固まってしまった文字の辻褃合わせは、するほうもそれに付きあうほうもかなり忍耐を要するし、しんどいということになります。文字が人の外にある外だからです。

とはいうものの、文字は便利です。

文字がどう便利かという、たとえば文字や文字列の入力、投稿、配信、複製、拡散、保存がほぼ瞬時に同時に、さらには並行して継続することができます（だから、恐ろしいのですけど）。げんにネット上でいまも起きていることです。

この文章もそうやって、あなたのつかっている端末の画面で読まれているにちがいません。私にはこれが不思議でならないのです。私の入力した文字はどこにあるのでしょうか。どこにいったのでしょうか。これから先もどこかにあるのでしょうか。その「どこか」ってどこなのでしょう。

分からないこと、知らないことだらけなのです。でも、知ろうとはしません。ややこしそうだし、調べるのが面倒だから、このまま深く考えることなしにパソコンで文章を入力したり読んだりするという生き方をつづけるつもりです。

一気に書かれたわけではない

俳句、短歌、詩、新聞や雑誌の記事やコラム、テレビのニュースの原稿、テレビドラマや映画の脚本、口述筆記、インタビュー記事。

思いつくままに上に並べましたが、小説だけでなくいま挙げたものすべてが文字として書かれ、文字として読まれているはず。のちに誰かによって音声化されるものであっても、一語一語並べられて、始まりと終りのある文書としてあったはず。

こうした広い意味での文書は、一気に書かれたものではありません。加筆、書き直し、

推敲、第三者によるチェックや手直し、編集、校正といった作業をへて最終的な原稿や作品として読まれると想像できます。

書き手が一人であるとも限りません。

(※以上のことは、小説だけでなく、楽曲や絵画や写真や映画や演劇でも言えることでしょうが、ここでは触れる余裕がありません。それぞれの分野に詳しい方がお考えになるのがいいと思います。)

それが実感できるのが小説の生原稿でしょう。書き込みがあったりして、決して一気に呵成に書かれたという印象を与えるものではない原稿が圧倒的に多い気がします。

*

それにもかかわらず、私たちが目にしたり耳にするのはいわば最終的な形の完成品ですから、まるで一気に書かれたような印象を与えますが、それは錯覚であり事実誤認とすべきでしょう。

一気に書かれたという印象を与えるのは、一語一語きれいに活字が並べられたものを目にする（文字を声にされたものであれば、プロによってきれいに音声化された科白やナレーションや朗読を耳にする）からでしょう。

筋があって——筋は人が読み取るものです、それが流れとの違いです、流れは読み取るのではなく「ある」という意味です——、それに沿ってきれいに流れているように見えるのです。とりわけ、活字になった文字の威力は強いです。あまりにも整然としているために、あまりにも流れが視覚的にきれいなために、そう書かれたのだらうという錯覚を起こすのでしょ

*

もし、一気に書かれたように見えるだけで、じっさいには一気に書かれたものでないなら、一気に読まなくてもいいのではないのでしょうか。まばらにまだらに読むという意味です。

これは音楽や絵や映画の鑑賞でもそうだと私は思います。振り返ってみると、じっさい、そんな聞き方や見方をしてきた気がします。

創作は一気に滞りなく整然とおこなわれる、鑑賞も一気に滞りなく整然とおこなわれる。

予定調和的すぎませんか？ 出来過ぎた話ではないでしょうか？

そんな綺麗事はありえないはずなのに、まるでそれが現実におこなわれているという前提のうえで、文学や芸術が論じられているように私には思えてなりません。

文学と芸術において体裁をつくらう必要があるのでしょうか。

人のつくるものは人に似ているだけではなく、人は自分のつくるものに似てくるのでしょうか。いや、むしろ人は自分のつくるもののようになりたいたいかもしれません。機械や人工○○のことです（○○に入るのは知能に限りません）。整然と滞りなく作業がこなせるものに。

人は鏡を見てお化粧をしているのではないのでしょうか？ 自分の似姿に自分を似せていくのです。実際には似せているのではなく、自分を変えていることに気づいていないのではないのでしょうか？

点と線を面として眺める

私たちは、整然とした字面できれいに流れている文字列からなる文章をどのように読んでいるのでしょうか。

私の場合には、かなり適当に読んでいます。読んでだけでなく、見ているとか、ぼーっと眺めていることも多いです。最近は読んでいるというよりも眺めているのがずっと多くなりました。

文章を読むさいに、点からなる線として、最初の一文字から最後の一文字までの途中で、視線の動きが止まったり、前に戻ったり、場合によっては先を見たり、あるいは一度席を立ったり、長時間または長期の空白があったりすることなく、一気に整然と読みすすめる。

そんな読み方は現実にあるでしょうか。機械なら、そういう読み方をしそうです。読み取り機ですね。

コピー機は面としてページを複写しているのであり読んでいるようには思えません。いわゆる自炊用のスキャナーは、線状に文字を追うだけでなく、ひょっとすると面としてページを読み取っているのかもしれない。翻訳機であれば最初から丹念に読んでいく気もします。

いずれにせよ、文章を面として眺めたり、面として読んだり、線状に戻ることなく一気に読んでいく読み方と見方がありそうです。機械には、です。

＊

人間はどうやって文章を読んだり見たりしているのでしょうか。

視線の動きを見える形にする機械やソフトがあるようで、視線が点や線として動くさまを映した映像を見たことがあります。視線の動きがそのまま読んでいるとか見ているという保証にはならない気もします。

いずれにせよ、視線の動きはたどれるようです。

話を戻します。

小説をどんなふうを読むかという話でした。

ひとさまのことは知りません。私にとって「小説を読む」とは「点と線を面として眺める」ことだという気がしてなりません。

染み、模様を眺める

たとえば、私が古井由吉の小説をどんなふうに見ているかですが、次のように見えています。

＊

”（前略）もう五時間ちかく人の姿を見ていない男の目の中に、岩の上にひとり坐る女の姿は、はるか遠くからまっすぐに飛びこんできてもよさそうだった。三日間の単独行の最後の下りで、彼もかなり疲れはいた。疲れた軀を運んでひとりで深い谷を歩いていると、まわりの岩がさまざまな人の姿を封じこめているように見えることがある。そして疲れがひどくなるにつれて、その姿が岩の呪縛じゅばくを解いて内側からなまなましく顕あらわれかかる。地にひれ伏す男、子を抱いて悶もだえる女、正坐せいざする老婆ろうば、そんな姿がおぼろげに浮かんでくるのを、あの時もしか彼は感じながら歩いていた。その中に杏子の姿は紛れていたのだろうか。（後略）”

古井由吉『杏子』（『杏子・妻隠』新潮文庫所収・p.9）

異、違、移。この場面で描写されている岩は、異和、違和、移和なのです。同じ「いわ」でありながら、つぎつぎとその姿を変えます。

こうした日常感覚の失調は、下山する男の疲労がもたらすものであると同時に、不自由な言葉の世界に投げこまれた書き手が体験する言葉つまり文字を相手にするときの過酷な不調でもあると私は感じます。

＊

以上は、拙文「「ない」から書けている」という記事からの引用です。その記事では、もう少し具体的に私の読みについて触れているのですが、上の引用部分に私の読み方がいちばんよく出ていると思い、紹介しました。

単純化して説明します。

「まわりの岩がさまざまな人の姿を封じこめているように見えることがある。そして疲れがひどくなるにつれて、その姿が岩の呪縛じゅばくを解いて内側からなまなましく顕あらわれかかる。地にひれ伏す男、子を抱いて悶もだえる女、正坐せいざする老婆ろうば、そんな姿がおぼろげに浮かんでくる」

という小説の箇所を、

「異、違、移。この場面で描写されている岩は、異和、違和、移和なのです。同じ「いわ」でありながら、つぎつぎとその姿を変えます。」

と読んでいるのです。

冗談でもなく、奇をてらっているわけでもなく、本気でそう言う読み方をしています。古井由吉は私が尊敬している数少ない書き手の一人です。冗談で、または受けを狙って冗談ばく語るなんて罰当たりなことは私にはできません。

上の読みに異和感や違和感を感じる人がいるにちがいないとは十分に意識しています。でも、私はそう読んでいるのです。

*

私にとって、小説は点と線を面として眺めながら読むものなのです。線状に並んだ文字を冒頭から終りまで流れるように読んでいくことはありません。そんなことは一度も経験した覚えがありません。

いわば、まばらにまだらに眺めてきたのです。

たとえば、古井由吉、宮部みゆき、吉田修一、スティーヴン・キング、パトリシア・ハイスミスなんて大好きですが、どんなジャンルでも、点と線を面として眺めながら読むことができました。線状に並んだ文字を冒頭から終りまで流れるように読んでいた記憶はありません。

面として眺めるのですから、行ったり来たりしたり、ある部分をじっと見ていたり、ある部分はほとんど目を通さなかったり、読むのを中断したり（数年間かかって読んでいた小説もあります）、読みながらメモを取ったり、寝入り際や昼間の夢うつつに思いだしたり、夢に見たり——そんな読み方をしています。

断じて、整然としてはいないし、一つの方向にきれいに流れて進行していくものではないのです。私にとっては。小説を読む場合の話です。

私は言葉の語義や使い方を調べるために辞書を引くのとは別に、辞書を読んだり眺めることがあります。辞書の読み方と眺め方と、小説の読み方と眺め方とが、大きく隔たっているという感覚はありません。

同じように文字や文字列と接している気がします。

文字や文字列や文章を見る、眺める、読む

自分が人とは、ずれている意識はあります。

とはいうものの、ある作品を読んで、その作品について誰かが何かで書いたフレーズを引用したり、その作者について貼られているレッテルをまじえたり、その作品の宣伝文句に沿って作文したり、筋を紹介した文章を読書感想文として公表する気にはなりません。

そうしておけばいいのかもしれませんが。首を傾げられたり軽蔑されたり、または単に無視されるすることはないでしょう。誰もがそうだそうだと頷いてくれるにちがいありません。

*

私にとって読むことは、具体的な文字の形と模様と身振りをひたすら眺め、それから受けるイメージに浸ることにほかなりません。そうした文字を読むというとなみは、しばしば自分が崩れ壊れる感覚をとまなうのですが、それは言葉や文字という「外から来た外」の世界に身を置く違和と異和と移和から来ている気がします。

言葉、とりわけ文字は人を過酷な異世界に誘う異物——いじりやすいのに、ぜったいに人の言うことを聞かない——なのです。私にはそう感じられます。

読むという体験は、必ずしも綺麗に整然とした言葉でまとめられそうな感覚とイメー

ジではありません。その意味で、「外から来た外」である異物としての文字に接し、かわることは崩壊感覚をともなう体験である気がします。少なくとも私にとっては、そうです。

＊

私が意識散漫な人間であることは確かです。「あなたは、ぼーっとしているね」とよく言われつづけてきたことも事実です。あと、いわゆる論理的思考が苦手だという自覚があります。

「AだからB、BだからC、CだからDだから……」というふうに物が考えられませんが、また「Aして、次にBして、それでもってCして、それからDして」という物語の筋を追ったり、それを再現するのにもとても苦労します。

私が話したり書くときには、「Aといえば、Bといえば、Cといえば、Dといえば……」というふうに連想に頼っている気がします。

だから、私は点からなる線上の文章をたどるのに苦労するし、苦労するからそうするのをやめているようにも思います。

漏れ聞くとところによると、現代の詩の中には冒頭から終りまでを線状に読むことを疑問視したり拒否しているものがあるそうです。当然の帰結として、読むと言うよりも見たり眺めることを想定した書き方になっているらしいのです。

詩について私は素人なので伝聞の話として紹介しました。誰がどのように書いているのかは知らないのですが、例を挙げたり具体的にはお話しできませんが、参考になればうれしいです。

＊

文学作品を、点と線の一方向的な流れとして読むのではなく、面の上の染みや模様として読み、かつ眺めることを想定して創作活動をおこなった人はいまもいるし、大ざっぱな言い方で恐縮ですが昔もいたようです。

いま私の頭に浮かんでいるのは、フランス語で詩を書いた人であるステファヌ・マラルメ、そして英語で小説を書いたローレンス・スターンと、その作品である『トリストラム・シャンディ』です。

この二人とその作品については、以下の記事「書物の夢 夢の書物」をご覧ください。のがいいと思います。言葉を眺めるという話ですから、動画も入っています。

言葉の夢、夢の言葉

文学作品を、点と線の一方的な流れとして読むのではなく、面の上の染みや模様として読み、かつ眺める——これは私にとって「言葉の夢」と同時に「夢の言葉」を眺めることなのです。

あくまでもイメージですが、こんな感じです。

文字の顔と表情を眺めながら、浮かんでくる言葉の断片や映像や音の記憶や触感の記憶を体感する——そんな体験なのです。

私は小説を点と線の流れではなく面に浮かぶ染みとして眺めていく。

まばらに、まだらに、とりとめなく。

だらだらと、ばらばらに。

#古井由吉# 杉浦康平 # ステファヌ・マラルメ # ローレンス・スターン # 小説 # 文学
詩 # 読書 # 文字 # 辞書 # 創作

文字や文章や書物を眺める

＊

文字や文章や書物を眺める

星野廉

2023年3月10日 08:14

人のつくるものは人に似ている。人の外面だけでなく内にも似ている。人の意識をうつしていると思えないものがある。

書物、巻物、タブロー、銀幕、スクリーン、ディスプレイ、モニター。

見えないものを真似ている。聞こえないものを真似ている。感知できないものを真似ている。知らないものを真似ている。

(拙文「影に先立つ【引用の織物】」より)

目次

線や帯を巻く

巻物、綴じた本

読む、見る、眺める

視線の動き

薄っぺらい、ぺらぺら

Aの辻褃合わせや帳尻合わせをAとは別のものとする

Aの代わりにAとは別のもので済ませる

抽象と具象の同居

文字や文章や書物を眺める

線や帯を巻く

レコード、カセットテープ、映画、ビデオテープ、蚊取り線香、トイレットペーパー——どれもが細い線や幅のある帯を巻いたものです。

レコードはよく見るとぎざぎざした溝である細い線が渦を巻いています。私が初めてカセットレコーダーを買ってもらったのは、むき出しの磁気テープである帯を巻いた、

オープンリールという方式からカセットテープに移行する時期でした。帯が細くなり箱に収められたのです。

そういえば、初期のコンピューターにはガラスの窓がついていて磁気テープが回っているのが見えた記憶があります。なんだか生き物じみた動きをしていました。ときどき戸惑うように見えたのです。ずずっずずっという感じ。映画は、巻いた帯状のフィルムを映写機で銀幕に映す形で公開されていました。フィルムはしゃーっと流れます。

ビデオテープは音と像の両方を磁気テープに記憶させた画期的な発明だったらしいです。

以上述べた知識を私は言葉で知っているだけで、仕組みについてはぜんぜん分かっていません。ただ、いま挙げたアナログ的な仕組みのものの方が、そうした知識を体感しやすいような錯覚におちいります。

デジタルは情報処理となると、私にはまったく体感できません。体感するとっかかりがないのです。

巻物、綴じた本

トイレットペーパーといえば、トイレで目にするたびに昔の巻物を連想します。絵や文字が書かれていた巻物のことです。

そうした絵と文字からなる文には、流れがあります。その流れは無限ではなく限りのある線や帯や面として存在しています。「限りがある」というのは始まりと終わりがあるという意味であり、「存在している」というのは物だという意味です。

巻物の始まりと終りのあいだには、ある順序や秩序に沿った流れがあり、その流れは筋とも言えるでしょう。筋道を立てて話すという言い回しに見られる筋のことです。

巻物といえば、巻物を裁断すると紙切れになります。その紙切れを流れにしたがって束

ねて綴じていくと本になります。巻物と同じく本にも絵があり、文字からなる文が載っているものがあります。

ページという二次元の枠に収められた絵や写真と、やはり二次元の枠で区切られた文字の列が印刷されている本にも始めと終わりがあります。

人の作った線や帯や面や連続した面や流れや筋には、必ず枠——たとえばページやコマ（コマ送りのコマ）やコマ数や場面（シーン）や段落や章——と、始まりと終り（これも枠ですが）があるのではないのでしょうか。

読む、見る、眺める

本といえば、いまは綴じた紙のページからなる本よりも、インターネットに接続されたさまざま端末機の画面を読んだり見ている人が増えているそうです。私もその一人です。

人は液晶の画面をスクロールしたりスライドして、文字からなる文を読んだり見たり、静止画像や動画をじっと見たりぼんやりと眺めているわけですが、そのさまは巻物を見たり読むに似ています。スクロールには巻物の意味があり、なるほどと納得します。

右から左へ流れるか、上から下へ流れるかの違いはあっても、巻物と同じようにある方向に目を走らせていると言えそうです。ある点から流れるように線状に目を走らせているのでしょう。

点が移動して線になるという、例の話です。

走らせるといえば、速度を上げて動画や番組を見るケースが増えていると聞きますが、そうやって映像と同時に文字も読んでいるようです。忙しかったり、せっかちな人が多くなっていると思われませんが、倍速で文字を読むとすれば、もはや読むと言うよりも見ているのではないのでしょうか。

たしかに現在は文字はしだいに読まれなくなり、見る対象になっている気が私にはします。熟読とか精読とか丹念に文字を追うという言い回しが、最近ぴんと来ないのです。

誰もがせわしく文字を追っている。読むと言うよりも見ている感じがしてなりません。

視線の動き

本のページや、端末の画面を目にして、人はどうやって見たり読んだりしているのでしょうか。

視線という、おそらく点のようなものをページや画面に当てることで——レーザー光線を面にピンポイントで当てるさまをイメージしています——、点を移動させて線で、面を読んだり見たりしているのではないのでしょうか。

点と言っても、ある程度の面積が視野に入っているようなので、面に近い大きめの点なのかもしれません。そうすると点を移動させた線というより、ある程度の幅を持った帯と考えたほうがよさそうです。

この帯の幅は、その時々気分や集中度によって大きさが変わるでしょう。また帯にも濃淡がありそうです。濃ければきちんと読んだり見ていて、薄ければぼーっと、あるいはうわの空で眺めているだけだという意味です。

まだらであったり、まばらに見ているとか読んでいるという状態が、人には意外とあるのではないのでしょうか。年を取ったせいとか、ぼーっとしていることの多い私には、まばらやまだらというのが、とてもリアルな感覚なのです。

私は自分がまだら状とか、まばら状だという気がします。意識だけでなく存在として、です。

薄っぺらい、ぺらぺら

巻物、本、レコード、カセットテープ、映画、ビデオテープ、蚊取り線香、トイレットペーパー——こうした広い意味での巻いた物はある部分が薄っぺらで、ぺらぺらしています。巻物だから当然と言えば当然なのですけど。

細い溝や線を巻いたレコードや蚊取り線香のようが平べったい円盤状（ディスク）であったり、薄いぺらぺらしたもの——紙、羊皮紙、フィルム、磁気テープ——を巻き取ってあるという意味です。

CD、MDのDはディスクで円盤です。そういえば、レーザーディスクなんてありました。ハードディスクも円盤ですが、これはパソコンを壊して解体したときに見たことがあります。

ICカードやICチップは薄いです。ポテトチップスも薄い。ICのCはサーキットですから、円環とか輪っかのイメージを感じますが、これも薄そうです。

ひょっとすると、こうしたぺらぺらしたものに載っていたり内蔵されているらしい文字や絵や映像は、薄っぺらいのではないのでしょうか。厚みがあるとは考えにくいです。

でも、人はその薄いものから、量や厚みがありそうなものを読み取っているみたいに思えます。量や厚みがあるだけでなく、深みや奥行きさえ読み取っているかのよう。情報とか知識のことです。

Aの辻褃合わせや帳尻合わせをAとは別のものとする

そんなふうにと考えると不思議です。まさに深そうな話に思えてきます。

薄いと厚い、浅いと深い、細いと太い、小さいと大きい、軽いと重い、短いと長い、近いと遠いが同居しているのではないのでしょうか。私にはそうとしか考えられません。

たぶん、いま挙げたペアたちが反対に見えるのは、そうした言葉が反対語みたいに扱われているからであり、つまり言葉の世界でそうなっているだけであって、言葉で現実や思いや印象の辻褃合わせや帳尻合わせをするから、矛盾しているように感じられるだけ——そんな気がします。

言葉と現実と思いや印象は別個のものですから、一対一に対応しているわけではないの

でしょう。Aの辻褃合わせや帳尻合わせをAとは別のものとするには無理がありそうです。

Aの代わりにAとは別のもので済ませる

そもそも人は矛盾することをしていません。

厚いものの代わりに薄いもので済みます。

深いものの代わりに浅いもので済みます。

太いものの代わりに細いもので済みます。

大きいものかわりに小さいもので済みます。

重いものの代わりに軽いもので済みます。

長いものの代わりに短いもので済みます。

人間の代わりに人間でないもので済みます。

人間でないものに代わりに人間のようなもので済みます。

遠いものの代わりに近いもので済みます。

巻物、本、レコード、カセットテープ、映画、ビデオテープ、蚊取り線香、トイレット
ペーパー。

絵、遠近法、地図、世界地図、地球儀、年表、言葉（音、文字、表情、身振り、しるし）、放送、報道、写真、レントゲン、顕微鏡、望遠鏡、電話、電報、放送、孫の手、糸電話、人生ゲーム、人形、キャラクター、小説、演劇、漫画、アニメ、ロボット、仮想現実、人工知能、MRI、CT、遠隔操作、遠隔医療。

Aの代わりにAとは別のもので済ませる。

Aの辻褃合わせや帳尻合わせをAとは別のものとする。

遠くを近くする。

遠くを知覚する。

やっているじゃありませんか。要するに、Aの代わりにAとは別のもので済ませて澄ましている。しらっと澄ました顔をしてやっているのです。知覚と錯覚をうまく利用しているわけです。

それを言葉、とくに文字にすると、矛盾や、辻褃合わせや帳尻合わせをやっていることがもろに出る、つまり目立つので、あれれーっと思っているだけ。

反意語とか対義語というのは、やらせというか、自作自演の狂言というか、人だけに受けるギャグに見えてなりません。勘違いとか、なにかの間違いではないのでしょうか。そんなふうには私には見えます。たぶん私にだけそう見えるのかもしれませんが。

抽象と具象の同居

遠くを近くする。

遠くを知覚する。

遠くを近いと錯覚する仕組みをうまく利用している。

手で触ったり直接目にできないものを抽象と、手で触ったり肉眼で見たりできるものを具象と呼んでみます。

簡単にいうと「遠い」が抽象であり、「近くて知覚できる」が具象です。

抽象の代わりに具象で済ませて澄ましている。こういうことをしていると、抽象と具象が同居してあらわれる、見えることになります。

*

いちばん分かりやすいのが言葉だと思います。言葉は抽象と具象が同居しているものです。

というか、抽象と具象のあいだを行き来しているというのが正確な言い方でしょう。

遠くを近くする。遠くが近くなる。

近くを遠くする。近くが遠くなる。

たとえば、「猫が眠っている。」という文字を読んでいると、猫が眠っている光景が頭に浮かびますが（または人によってはそれとは別の光景が浮かびますが）、それはいまこ

ここにはない光景です。

肉眼で見ているわけではなく、その猫に触ることもできません。それが抽象です。抽象は人それぞれが勝手にいただくものでもあります。

「猫が眠っている。」という文字に意識を集中してじっと見ていると、文字だけが感じられてきます。これが具象です。

書体、フォント、漢字、ひらがな、濁点、促音を表わす「っ」という小さな「つ」、漢字の偏旁（へんとつくり）、太文字であること一つまり、文字や形や模様（これが具象です）としての「猫が眠っている。」に意識が行って、猫が眠っている姿が消えるという意味です。

「猫が眠っている。」と口にして出た音（音声）でも同じです。その声を聞いて姿や光景（抽象です）を思いうかべる。聞こえている音としての声（つまり、声の質や高さや響きという体感できるものが具象です）に意識を集中する。

抽象と具象が同居している言葉を、人は抽象（そこにはない像）としてとらえたり、具象（そこにある文字やいま聞いている音）として体感しているわけです。両者のあいだを行ったり来たりします。どちらがいいか悪いかの話ではありません。

こういうとりとめのない話をしていると、眠くなります。おそらく、ふちとか、ほとりとか、きわにいるからでしょう。ゆめうつつ、ゆめとうつつのふちにいる。

文字や文章や書物を眺める

文字や文章や書物を読む（意味や内容といった抽象としてとらえる）だけでなく、つまりその遠くを見るだけでなく、文字や文章や書物そのものを眺めてもいいのではないのでしょうか。

私はそれが素晴らしい体験、素晴らしい体感だと思い実践しています。

近くは意外と遠いのです。薄くて軽くてぺらぺらしたものが意外と深淵であり深遠であったりもします。ふちに立つと分かります。

(動画省略)

上の動画は、杉浦康平さんのブックデザインなのですが、文字や文章が書物が眺める対象になることをよく見せてくれていると思います。大ざっぱに言うなら、私はそんな感じで文章を見ていることがあります。

そのときの私はひょっとするとまだらでまばらなのかもしれませんが、それでもかまいません。綺麗だし、心地よいのです。似たような光景を夢に見ることもあります。大好きな動画です。

この動画は、以下の記事「書物の夢 夢の書物」にあります。文字や文章や書物そのものを眺めるという体験と体感について述べているので、興味のある方は、ぜひご覧ください。眺めるだけでいいです。

#杉浦康平 # 読書 # 巻物 # 本 # 書物 # レコード # 文字 # 知覚 # 情報 # 知識 # 具象
抽象 # タイポグラフィ # ブックデザイン

言葉が世界を見えなくするとき

＊

言葉が世界を見えなくするとき

星野廉

2023年3月1日 08:16

目次

さわる、さわられる

言葉が世界を見えなくするとき

俯瞰に嗜癖する

部分、全体

さわる、さわられる

路上で負傷して歩けなくなり、通りかかった人におんぶされて、とりあえず安全な場所へと運ばれた。

見も知らぬ人の背中にひしにしがみつकिながら、涙が出てきた。その人の親切にではなく、情けない自分ではなく、悲しいその状況にではなく、懐かしさでいっぱいになる自分がいた。

幼いころに、母親の背中にしがみついていたときの記憶が、腕、手、背中、首、肩、腰、胸、腹、足のさかいなく、全身的によみがえってくる思いがした。

以前に、こんなことがありました。

「腕、手、背中、首、肩、腰、胸、腹、足のさかいなく」と書きましたが、まさにそんな感じだったのです。体の部位のさかいがないだけでなく、相手の体と自分の体のさかいも感じられない一体感を覚えました。

おんぶをされるとというのは、相手に抱きつくようなかたちにもなります。背後から抱く感じです。ふだん人と接触することのない私は、あのときほどうろたえたことはありませんでした。

＊

さわる・さわられる、ふれる・ふれられる、おす・おされる、なでる・なでられる、さする・さすられる（こする・こすられる）、あてる・あてられる、つねる・つねられる、ひっかく・ひっかかれる、たたく・たたかれる。

いま挙げたのは、触覚とか触感的な身振り、動作、行為、動詞です。

目をつむって、上の動作をしたり、思えがいたり、思いだすと分かりますが、「する」と「される」が同時に起きている場合があります。「働きかける」と「働きかけられる」、「かける」と「かけられる」が同時に起きているとも言えそうです。

触覚や触感とは、相手、つまり人や物や生物との双方向で相互的な行為だからです。全身的な行為とも言いたくなります。訳（分け）が分からないのです。対象と一体化するとも言えるでしょう。

触覚の双方向性は、視覚や聴覚や嗅覚や味覚にはない気がします。それだけに五感のうちで最も始原的な体感に思えます。知とはほど遠い感じ分けなのです。

触覚や触感が感じ分けとしてプリミティブであったり、知識や知能とは遠いものであったとしても、後ろめたさを感じたり恥じることはないし、ないがしろにしていいとは思いません。

いずれにせよ、対象がない状態でひとりで触れるわけにはいかないのが触覚や触感です。これと対照的なのが視覚だと思います。視覚は絵にしますから、言葉と相性がいいのです。絵も言葉も、ある部分だけを切りとり、ふるいにかけるからでしょう。

取捨選択が根っこにあるのです。この取捨が、一方的で一方的なものであることに注目しましょう。サディスティックとも言える気がします。

視覚にせよ、言葉での切り分けにせよ、触覚や触感のように双方向的ではありませんから、相手のことを意識しない、考えない、つまり思いやりに欠けるのです。

見ているだけ、言葉だけ、触れよう（同時に触れられよう）とはしない。触れない以上、対象との間に距離があるのだから当然ではありますが、ダイレクト（直接的）なかわり合いでない（遠隔操作になる）ことは確かです。

（視覚だけでなく聴覚と嗅覚でも、対象との間に距離があります。味覚や食感はといえば、対象に舌や唇や歯や口内の粘膜が触れるわけですが、相手を食べるのですから、触覚や触感と同様に、対象との間に距離がないとか、ダイレクトなかわり合いだとか、双方向的だと言っても、それはブラックでシックなジョークでしかありません。）

そんなわけで言葉は抽象と相性がいいと言えそうです。繰り返しになりますが、言葉の基本的な身振りは「分ける」「切り分ける」だからです。部分に分断するのです。余計な部分は捨てることもあります。つまり抽象です。その代わり、すっきりはします。ある程度は。

＊

こどもをだっこしていると、抱いているのか抱かれているのか分からない気分になることがある。これは、ある女性から聞いた話です。子をもった経験のない私は感心しながら聞いていました。

「あと、お乳をやっているとき、うちは男の子なんですけど、乳首を口でふくまれていると、何というか、夫と重なるんです——」

女性はそこで口をつぐんで、その話はそれで終わったのですが、それ以上尋ねる気にはなりませんでした。

＊

性行為のときに、するとされるのさかいが不明になるとか、自分の体と相手の体のさかいが消えた感じがするとか、自分がどこにいるのか、何なのか、誰なのかが頭のない状態におちいる。

そうした状況は、小説、映画、テレビドラマで繰り返されてきます。表現の仕方しだいで、いやらしくも、うつくしくも、きれいにも、きたならしくも、ほっこりにも、暴力的にもなります。

「する・される」が不明になるのは、性行為だけでなく、読むとき、書くとき、映画や動画を見るとき、お芝居を見るとき、歌を歌ったり、音楽を聞くときにも起きる日常的な体感ではないかとも思います。

私は不案内なのですが、たぶん、ゲームやスポーツや楽器の演奏でもあるのではないのでしょうか。

そういう状況をどう言葉にすればいいのでしょうか。描いた言葉はあります。数えきれないほどあります。文学でも、学術的な論文でも。でも、しっくりこないのです。

そうかなあ。そうだったかなあ。そういうものなのかなあ。

言葉に期待しすぎているのかもしれません。

＊

なぐる・なぐられる、ひっぱる・ひっぱられる、つきだす・つきだされる、つつく・つつかれる、ひっぱたく・ひっぱたかれる。

こうした行為、動作もひとりではできません。相手や対象とのかかわりあいから生まれる出来事です。

「する」と「される」が言葉として既にあるから、それらをつかうだけの状況に投げ

こまれている。それが人と言葉の関係であり、その言葉とは必ずしも世界や現実を「正しく」反映したものではないのです。

いま「正しく」を括弧に入れたのは、そもそも「正しい・正しく」なんてあるの？
と思っているからです。言葉は欠陥品だと考えているので、慎重になってしまうのですが、人それぞれです。

*

なぐりあう、ひっぱりあう、つきだしあう、つつきあう、ひっぱたきあう。

このように「あう」をつかうという妥協策もあるのですが、なんだか笑ってしまいました。

ふれあう、ふれあっている、さわりあう、さわりあっている、なであう、なであっている、だきあう、だきあっている。

うーむ。そういう話でもない気がします。なんか、こう、しっくり来ないのです。「する・される」が不明である、あのわけの分からない一体感と恍惚とは隔たっている気がします。やっぱり言葉で分けたところで分からないのかもしれない。

言葉が世界を見えなくするとき

車の運転をする人も同乗者も移動しながら静止している、静止していると思いきんでいるが、じつは動いている。

こういう文を書いていると、自分の表現力のなさを棚に上げて、言葉はなんてまどろっこしいのだろうとか、言葉にもてあそばれているなあ、なんて思うことがあります。

記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもあると感じる瞬間です。

つまり、言葉をつかって「しるす」行為つまり記述は、すでに何度もしるされた言葉

や言い回しを「なぞる」ことで、言い換えると既述であり、そもそも言葉ではない事物や現象を、もっともらしく言葉に置き換えて「描写しました」とか「説明しました」と澄ましているという意味で奇術であり、ひいては語ることで騙る、要するに人を「だます」のですから詭術である、というわけです。

いま書いたような騙りに満ちた文自体が、記述であり、既述であり、奇術であり、詭術なのですから、語るに落ちるところか、騙るに落ちるという感じで、呆れかえって思わずのけぞりそうになる自分がいます。

＊

言葉は物を見えなくしているのではないか。いや、正確には言葉で物が見えなくなっていることもあるのではないか。そんなふうに思います。

たとえば、「〇〇する」と「〇〇される」という言い回しがあるから、ある物や事や現象を見て、「する」と「される」に「分けて」しまう。それで「分かった」気分になるという意味です。

でも、じっさいには「する」と「される」のさかいが不明な状況というのは多々ありそうです。訳が分からないというよりも、一時的に分けが分からなくなっているだけだから、時間をかけて真摯に丁寧に分けていけばそのうち分けが分かるはずだ。そのように楽観できるたぐいの問題なのでしょうか。

世界はそんなに単純明快だとはとうてい思えないのです。

＊

言葉をつかうと世界は「ある程度」単純明快に見えるでしょう。言葉の世界に入るからです。言界は現界とは異なります。「ある程度」の対応や関係はあるにちがいません。

人は言界（言葉の世界）と現界（現実の世界）と幻界（思いの世界）のあいだを行き来している、あるいは複数の界に同時にいる、とも言えそうです。ただし、限界があります。それぞれの界が一对一に対応した関係にあるわけではないからです。

食い違い、ずれ、ゆがみ、誤差、欠損、干渉、錯覚、ノイズがあるはずで、それが限界です。限りがあるわけです。かぎりなくかぎりがあるはずで。

あらゆる現象や、言象や幻象が、たがいに整然と対応しあうという形で、人に都合よく存在しているわけでもないでしょう。いや、存在するどころか、しょせん、どこかの阿呆がつくった自分語でしかありません。

*

言界は現界に追いつけません。言葉や言い回しの数が圧倒的に少ないからです。現界の複雑さについていけないのです。これが言界の限界である減界です。

限りなく少ないもので限りなく多いものを組み立てようとすることに土台無理があるのです。少ない限りには単純明快に見えるという利点もあります。

複雑で難解なことを簡潔で平明に——そこそこの数で無数を説明する利点はそこにあります。しかし、「そこそこ」であるという限界を念頭に置かないと過信にいたるのは分かりやすい話だと思います。

分かったつもりになってしまう恐れがあるという意味です。ある意味怖いのです。人は分かりやすいものや分かりやすい世界を蔑ろにする気がします。チョロいと感じてしまうのです。

俯瞰に嗜癖する

目に見える世界、つまり眼界もまた、限界にあります。視野と視点とは、枠と焦点でもあります。つまり、見える範囲には限りがあり、見るとは見えている部分を忘れてたり意識に置かないようにして、ある一点に集中することです。

視野全体をまんべんなく見ることができる人はいないでしょう。焦点があるからです。

集中すれば、捨てる部分が必ず出てきます。捨てないで集中しようなんてありえません。虫のいい話です。

俯瞰や展望とは、世界や宇宙の、ある部分をながめることにほかなりません。威勢のいい言葉に惑わされてはいけません。全体とは必ず部分なのです。あらゆる俯瞰と展望は局所的、つまりローカルなものだと言えそうです。

＊

人は俯瞰が好きです。嗜癖（しへき）し依存しているとしか考えられません。

何でも視覚化できるだけでなく、何でも俯瞰できると思いこんでいる節が見られます。地域地図、世界地図、航空写真、宇宙の画像。集合写真も、俯瞰の一種かもしれません。クラスの全員が映っていれば、全員を把握した気分になれるからです。

俯瞰とは、場所、つまり空間だけではありません。時間的な俯瞰もあります。スケジュール表、タイムライン、カレンダー、年表などは、時間を見える化するだけでなく、時間の流れを時系列で視覚化する仕掛けとか仕組みとか装置だといえるでしょう。

地誌・地史、家系図、伝記、国の歴史、世界史、文学史、音楽史、科学史、宗教の歴史というぐあいに、個々の事象にまつわる出来事を時系列で記述しようとする人の試みと情熱には驚かされます。

図書館、博物館、美術館、博覧会も、それぞれが俯瞰の一形態だと見なすことができるでしょう。百科事典、辞書、図鑑、博物誌のたぐいも、空間（地球・宇宙）だけでなく時間（歴史・有史以前）の俯瞰を指向していますね。人の飽くなき意志と欲求に驚かされます。

＊

話を縮小します。

地誌・地史、家系図、伝記、国の歴史、世界史、文学史、音楽史、科学史、宗教の歴史

——。歴史は時間的な俯瞰と見なすことができますが、それぞれの歴史は、やはりローカルなものです。

ある部分、ある特定の要素、ある特殊な視野と視点（立場）からながめているだけです。

たとえば、世界史という言葉は言葉の綾です。世界史という言葉があるから世界史があると思ってしまう。

各国、各地域、各言語圏、各文化圏にそれぞれの世界史があります。世界史はローカルなものなのです。「世界史」間の闘争も起きています。戦争にもなります。

しかも、いま挙げた各〇〇の中に、さらにさまざまな考えや意見に基づく世界史があります。この国でもあります。「世界史観」間の争いもありますね。話が、ややこしくてごめんなさい。

普遍的な世界史などないのです。それぞれの立場と視点による無数の世界史があると言えます。世界史とは名前だけがそうなっているのであって、ある時代のある時期という時間、ある場所という空間の制約の中にあるわけです。

人に世界が俯瞰できるわけがないじゃありませんか。時間的にも、空間的にもです。世界地図という言い方も言葉の綾という意味です。

このように人には、自分にできもしないことや自分に検証もできないことを言葉にする習性があります。真理や普遍や客観や魔法や悟りがそうです（努力目標なのかもしれません）。

*

言界は現界とずれています。どれくらいずれているかは、人それぞれでしょう。印象の問題だからです。そこそこずれているか、とほうもなくずれているか。

言界と現界がそこそこ対応していると感じて、たとえば世界史という言葉が文字どおりに取ってしまう。これは致し方ないことです。

人は目にした文字、読んだ文字を、いったん信じます。信じないと読めないからです。読むことは信じることなのです。

判断、批判、否定、評価は、信じた後に来ます。ただ信じることの容易さにくらべて、判断、批判、否定、評価にはエネルギーを要します。考えなければならないし、調べることも必要でしょう。

面倒なのです。だから、たいてい「信じた」だけが残ります。

*

「ない」のに「ある」ように感じさせる。これが基本のようです、「ない」とか「そのものでは「ない」」にもかかわらず、「ある」とか「そのもので「ある」」ように見せて、思わせて、さらには感じさせる、仕組みである、文字、とりわけ漢字と似ていませんか。

猫という文字をよく見てください。猫に似ていますか？ 私にはぜんぜん似ていないように見えるのですが、それでも猫をさすものとして、人は使っています。使ってきたし、これからも使いつづけるでしょう。(中略)

言葉、とくに文字は太古から人が利用している仮想現実（「ない」を「ある」と感じさせる仕掛け）ではないでしょうか。

(拙文「「ない」を「ある」に変える魔法」より)

言葉の世界は仮想現実というよりも、疑似現実だったり偽装現実だったりするのかもしれない。

部分、全体

空間的なものにしろ、時間的なものにしろ、俯瞰はローカル、つまり局所的なものしか、ありえません。そもそも視野自体が枠であって、枠には限りがあります。

俯瞰の語義としてある「全体を見おろす」というのは「部分を見おろす」であるという意味です。あくまでも見ているのは部分なのです。

また視野全体をまんべんなく見ることができる人はいないでしょう。焦点があるからです。集中すれば、捨てる部分、見ない部分が必ず出てきます。

「捨てる」と「見ない」を選択と排除と言い換えることもできます。その結果として、「たまたま残ったもの」が、たとえば歴史を構成するのです。必然でそうなっているわけではありません。

また、良いものが残ったとは必ずしも言えないでしょう。運が良かったとは言えると思います。すごい強運です。

文学史、音楽史、美術史、科学史、宗教史。

残ったものは強いです。無言で既得権益を主張することができるからです。しかも誰も既得権益とは言いません。

遺産や古典としてもてはやされます。それしか残っていないのですから、失われた同時代のものと比較できません。褒めるしかないでしょう。

長く残っているものにはファンも多いです。崇拝者もたくさんいるでしょう。ますます評価されます。ただし競争者のいない評価です。

結果オーライということです。

*

部分なき全体、つまり全き全体とは抽象でしょう。抽象は便利です。焦点や視点と同じく、捨てること、無視することで成り立つからです。つまり、抽象とはすかすかだという意味です。

すかすか、すっきり、軽い、短い、小さい、薄いがもてはやされる現在は、抽象が優先される世界なのです。

0 か 1 かを単位として無数を処理するコンピューター、投稿・複製・拡散・保存が瞬時に同時に並行して起きるインターネットがあらゆる活動の根っこにある世界だから当然であり必然でしょう。

部分に集中することで全体をながめるという抽象は、人類の悲願だと思われませんが、それは彼岸の話でしょう。この世ではありえない話です。虫のいい、貪欲な願望であることは確かです。

幻界ではありえる話でしょう。幻界はそうした不条理で荒唐無稽な話に満ちています。現界での、願い、思い、祈りは、人の幻界で花咲きます。

*

以上、する・される、部分・全体、分かる、世界史が言葉の綾ではないかというお話でした。

#体感 # 五感 # 触覚 # 視覚 # 知能 # 知識 # 抽象 # 俯瞰 # 世界史 # 言葉# 日本語

影の精度を向上させる

＊

影の精度を向上させる

星野廉

2023年2月28日 09:20

かげ、影、姿、像、声、文字、表情、身振り。

こっちがあっちに映っている。似ているような似ていないような、ときには同じにも見える。映っているのは確か。こっちが手を振れば、あっちも手を振っている。

あっちはこっちとどれくらい似ているのか。あっちのこっち度。こっちのあっち度。

言葉、像、影。

あっちを「そのもの」とか「実体」とか「世界」とか「何か」とか「それ」とか「彼岸」とか呼んで名づけたところで、それはこっちで使っている言葉という影でしかありません。「あっち」はこっち、「こっち」はあっちの影でしかないから、影で影を見ている、影に影を見ているというわけです。

言葉。

手なづけようとして名づけてもなつかない。飼いならせないし、なれてくれないし、なじまない。もどかしい、ままならない。隔靴搔痒。長靴の上から痒いところを搔いても搔いても痒みが続く。夢の中で駆けても駆けても駆けたことにはならない。うつつでどんなに書いても書いても書けていない。藻搔く、足搔く。

何かの代わりにその何かではない別の物で済ましているからです。それが永遠の隔たりとなっているからです。

＊

落書き、絵、影絵、しるし、文字、筆写、印刷、写真、レコード・蓄音機、映画、複写・コピー、デジタル化した情報（映像・音声・文書）の配信・複製・拡散・保存。どれもが「うつす・うつる・うつし」です。

私たちはこうした影たちに何を見ているのでしょうか。世界でしょうか、森羅万象でしょうか。やはり、影に影を見ているのではないのでしょうか。（拙文「影に影を見る」より）

影であっちを見ている、影で影を見ているといっても、あっちのこっち度、こっちのあっち度、影の精度はそこそこあるようです。

なにしろ、影のおかげで、人は月に仲間を飛ばしたり、この星の気温を上げたり、2000年問題に打ち勝ったり（ですよ？）、高速の人工流れ星で敵を攻撃したり脅したりできるわけです。ある程度の精度がなければ叶いません。ぜんぶ、おかげさまのおかげ。かげ、さまさま。

影は実体をある程度正しく反映している、映している、写している。できれば、「移す」まで考えたいところなのです。移すとなると、何かが何かに、何かがどこかに移動するので、物理的な移動と考えた場合には、これはすごいことになります。理論から観測と実験による再現を経て実証する。

念力が可能になったも同然です。念ずれば為る。こっちで念ずればあっちで為る。隔靴搔痒の遠隔操作の有効性と実用性。精神一到何事か成らざらん。サイコキネシス、テレパシー、マインドパワー、ハンドパワー、千里眼、透視、クレヤボヤンス、テレポーション、ぜんぶオーケー。

物理的、そうなのです。メタフィジカルではなくフィジカルにいきたい。人は影の精度を物理的かつ身体的にとらえたいのでしょうか。「映る」とか「写す」なんていかにも影っぽい言い回しでは満足できずに、「移す・移る」という、なんか、こう、移動っぽい、つまりじっさいに何かを動かせる力がほしいようです。

影に働きかけることで、ものを動かす。動けばそれで結果良しとする。影がどれだけ

実体を反映しているかなんて考えているだけ時間の無駄ということでしょうか。

*

影の精度を磨く。精度を向上させる。精度、向上、です。漢語は見映えがいいし格好いいです。元気も出そう。

あっちがどれくらいこっちか。あっちがどれくらいこっちに似ているか。あっちのこっち度、こっちのあっち度。こんな和語を使った煮えきらない言い方より、漢語のほうが、ずっと「ある」度、つまり現実感や存在感やリアリティ、そして何よりも説得力があります。

「ない」を「ある」に見せかける、いや、「ない」を「ある」に変える魔法。

結局はレトリックの問題なのでしょうか。何と云うかによる、どう語るか次第というわけなのでしょうか。語るは騙る、なんて語るに落ちました。あることないことではなく、存在と無。

「無」を「存在」に偽装し、「無」から「存在」を捏造する魔法、おまじない、お呪い、呪い、*creatio ex nihilo*、*ex nihilo, nihil fit*。

見映えのいい耳にも快い、威勢のいい言葉を使って威勢の言い方をする。これで気合いを入れれば、何とかなります。じっさいに人類はそうやってきたのです。言葉は景気づけのためにあるのです。「影に影を見る」なんていって、意気消沈するためにはありません。

念力が可能になったも同然です。念ずれば為る。こっちで念ずればあっちで為る。隔靴搔痒の遠隔操作の有効性と実用性。精神一到何事か成らざらん。サイコキネシス、テレパシー、マインドパワー、ハンドパワー、千里眼、透視、クレヤボヤンス、ぜんぶオーケー。

テレグラム/テレグラフ (文字)、テレホン (音声)、テレスコープ (像)、テレビジョン

(像)、テレメデシン/テレヘルス (医療)。遠くを近くする。遠くを知覚する。こうやって生きてきたのですから、こうやって生きていきましょう。

念ずれば、テレパシーもテレポーテーションもできるはず。理論から観測と実験による再現を経て実証する。ほんまかいな。

#影# レトリック# 漢字# 漢語# 大和言葉# 和語# 掛け詞# 言葉# 日本語

「ない」を「ある」に変える魔法

＊

「ない」を「ある」に変える魔法

星野廉

2023年2月27日 13:06

目次

言葉を並べて眺める

どのように見ているのか

「ない」を「ある」に見せかける魔法

言葉を並べて眺める

言葉を並べるのが好きです。並べる最中もわくわくしますが、並べた言葉を眺めて思いにふけっているとわくわくが持続します。

抽象、具象、事象、現象、森羅万象、象形、象嵌、象徴、表象、仮象、印象、対象。
映像、想像、偶像、肖像、残像、映象、画像、鏡像、実像、巨像、音像、写像、現象。

文字を眺めていると影絵を見ているような気持ちになります。影絵を見ながら、つぎつぎと別の絵や言葉の断片が浮かんでくると似た心境です。目にしているのが、文字なのか、文字があらわすとされる「何か」なのか、文字が呼びさす「何か」なのか、その境が不明になってきます。

相手にとっての「触れる、同時に触れられる」は、体感できないという意味で抽象になるわけです。他者を前にして（相手にして）、人は想像し抽象するしかないということでしょうか。想像の「像」と抽象の「象」は影です。「他者を相手にする」とは影を相手にするという意味での「触れ合い」だと考えられます。

（拙文「知ではなく痴にうながされて書く」より）

象も像も影です。人は影に影を見ているのです。それでいながら、影を見ているとはふつうは意識しません。むなしいからだと思います。見えているものすべてが影だなんて、ホモ・サピエンスとしてのプライドが許さないのかもしれない。

「そのもの」「それ自体」を見ていると考えたいのです。私も人間ですから、その気持ちは痛いほどわかります。「そのもの」「それ自体」、ぜひ見てみたいです。

「そのもの」「それ自体」とまで欲張らずに「本当の姿」「真の姿」を見ていると言う人もいます。「姿」と言っているのですから謙虚ではありますが、「本当の」「真の」という怪しげな言い回しに、まだ人としてのプライドを感じないではられません。

往生際が悪いのです。それほどまでに、人は「そのもの」「それ自体」「本当の」「真の」を求めているのでしょう。これだけこだわるのだから、オブセッション（強迫観念）になっているにちがいません。

だから、見るのです。飽きもせずに見つづけます。ひたすら見て、何かに到達しようと考えているにちがいません。

「何か」の代わりにその「何か」ではない「別物」で済みます。しかも、済まして澄ましている。こうやって、別物を相手にしていることを忘れようとするのが、太古から続いている人の習性なのかもしれません。

そんなわけで、私も見つづけます。じっと見ます。

実体、実像、実物、現物、事実、真実、真理、本質。

実、体、物、事、真、理。

こうした文字と文字列には、人類の必死な願い、つまり悲願が込められているようです。「そのもの」に到達したいなあ——。彼岸への悲願。叶わない夢。必死すぎて、一方で、むなしさも覚えます。

どのように見ているのか

悲願を胸に、さらに見つづけてみましょう。

抽象、具象、事象、現象、森羅万象、象形、象嵌、象徴、表象、仮象、印象、対象。
映像、想像、偶像、肖像、残像、映像、画像、鏡像、実像、巨像、音像、写像、現像。

人が「見る」、「見ている」ことは確かです。何を見ているかという影だと思のですが、何の影なのかがわかるとは私には考えられないので、どうやって影を見ているのかを見てみます。たくさんあるので、目を惹くものから見ていきます。

抽象——抽選や抽出の抽ですから、選ぶのでしょうか。捨て去るわけです。何を捨て去るのかというと、見るのに都合の悪いものでしょう。人は見たいものを見ようとするので、自分が見たいものに近づくように、どんどん捨ててすっきりとスリムにする。そんなふうには私にはこの文字が見えます。

想像——文字どおりに取ると像を想いうかべるです。影や姿や形を想いうかべる。形や姿のないものの影も想いうかべる、もあります。見える物だけでなく、見えない物や事や現象も人は想いうかべるし、思いえがきます。人の想像力はすごいです。いずれにせよ、「そのもの」を見ることができないから思いの中で「影」を浮かべたり描いているのは確かでしょう。

印象——思いの中で、しるされ刻まれて残った影という感じ。「残っている」がキーワードです。人は印象の世界に生きてるとよく考えます。印象の基本にあるのは「似ている」です。ああ、これは何かに似ている。これはあれに似ている。こんな感じですが。人はつねに影を見ているので「同じ」かどうかは確認できません。「同じ」を確認するためには、自分たちで作った精巧な道具や器械や機械を使う必要があります。じっさいに使っています。

実像——じっさいの姿、つまり影ですから、実物ではありません。虚像は、実像の反対とされていますが、私には見方の相違というふうに見えます。

疲れてきました。体力を消耗する作業だと気づきました。この辺でやめておきます。

＊

漢字や漢字の文字列を見ていると、それが文字であり、像であり、影であることを忘れそうになります。そういう「もの」があるように見えてくるし、思えてくるし、感じられてくるのです。

この感じ、何かに似ていると思ったのですが、考えてみたところ、わかりました。仮想現実です。「ない」のに「ある」のように見えるし思えるだけでなく、感じられるようにする仕掛けです。

五感の中で人にとってもっとも大きな意味を持つと言われる視覚や聴覚だけでなく、嗅覚や味覚や触覚までリアルに感じさせてくれる VR とか AR が開発されているそうです。

「ない」のに「ある」ように感じさせる。これが基本のようです、「ない」とか「そのもの」では「ない」にもかかわらず、「ある」とか「そのもので「ある」」ように見せて、思わせて、さらには感じさせる、仕組みである、文字、とりわけ漢字と似ていませんか。

猫という文字をよく見てください。猫に似ていますか？ 私にはぜんぜん似ていないように見えるのですが、それでも猫をさすものとして、人は使っています。使ってきたし、これからも使いつづけるでしょう。

不思議な話です。私なんか考えるたびに腰を抜かしています。これは冗談ですが、何度腰を抜かしても罰は当たらないほど不思議だと思えます。

言葉、とくに文字は太古から人が利用している仮想現実（「ない」を「ある」と感じさせる仕掛け）ではないでしょうか。しかも、何の機械も装置も電源も要りません。寝入り際の夢うつつでも、たぶん死に際でも楽しめます。

「ない」を「ある」に見せかける魔法

抽象、具象、事象、現象、森羅万象、象徴、表象、仮象、印象、対象。

映像、想像、偶像、肖像、残像、映像、画像、鏡像、実像。

実体、実像、実物、現物、事実、真実、真理、本質。

実、体、物、事、真、理。

理想、現実、思考、思想、思索、論理、理論、分析、批判、批評、観念、概念、必然、偶然、読解、解釈、証明、検証、明晰、精緻、存在、核心、展望、俯瞰、探求、差異、同一性。

〇〇主義、〇〇学、〇〇論、〇〇効果、〇〇現象。

私も使っていますが、威勢のいい文字列だという印象を持ちます。こういう言葉が適度にちりばめてある文章は、いかにも賢そうに見えます。「適度に」がポイントです。何ごともやり過ぎは逆効果をもたらします。

固有名詞と同じくまばゆい光を放ちます。見栄え——見映えとも書きますが、映える、つまり輝くという意味です——がいいのです。固有名詞（とくに有名人や偉い人の名前です）や偉そうな（見栄えがいい）言葉をキーワードやハッシュタグにして文章を投稿すると、見る人や読む人が増えます。

読む前に、そういう映える言葉がちりばめてあるのを見て、すごいと感じるのです。見た目で、すごいと感じさせたら、こっちのものです。その文章は半分成功したのも同然だと言えます。人は印象の世界に生きているからです。

逆に、固有名詞（人名だけでなく書籍名や作品名や集団名も含みます）やこういう見栄えのいい言葉が頻出する文章を避ける人もいます。

ここにも一人いますが、固有名詞に「虎の威を借る狐」とか「人の禪で相撲を取る」的な安易さ——なにしろ固有名詞は最小最軽最短であるだけでなく最強の引用なので——を、そして偉そうな言葉にはうさんくささを感じたり、または単に理解力が足りなかったり、へそが曲がっているからでしょう。少数派であることは確かです。

この種の言葉は「ない」を「ある」に変える魔法の言葉なのです。訂正します。「ない」が「ある」に変わるわけではないので、「ない」を「ある」に見せかける魔法の言葉、です。

何が「ない」の？ 何が「ある」の？ ですか？ 影です。実体とか、実物とか、
事実とか、真実とか、そんな話ではなく、影の話をしています。

#文字 # 漢字 # 文章 # 影 # 抽象 # 印象 # 想像 # 言葉 # 魔法 # 固有名詞# 仮想現実
VR # AR

影に影を見る

＊

影に影を見る

星野廉

2023年2月23日 12:36

初めは人が影に先立ったのに、影が人に先立つようになり、最後には人が影に先立つのでしょうか。

(拙文「影に先立つ【引用の織物】」より)

目次

辞書を眺める

引用の引用、複製の複製

短いけど長い

影に影を見る

辞書を眺める

光、物の影、物の姿。

物の影、光、物の姿。

物の影、物の姿、光。

「陰・蔭」と「翳」を除き、さらに地面や壁に映るものか水面や鏡に映るものかといった区別をせず、おおまかに「影」だけに絞り単純化して、「かげ・影」を大きく三つに分けると上のような順に並んでいます。

「光」だけに注目すると、上の文字列から下に行くにつれて、右へとずれていくところが、私には興味深く思われます。左から右へと読んでいく、日本語の横書きでは、左から右へという位置的な流れが時間的な推移や順位または序列に感じられるからかもしれません。

辞書の話です。光、物の影、物の姿——。私の愛用している辞書では、この順に語義が並んでいます。文字列だけを眺めていると、まず光源があって、その光に照らされた影があって、最後にその影を作っている物が浮かびます。

この言葉の配列に物語や筋を読み取る人もいそうです。A、そしてB、それでもってCという具合に。AだからBであり、BだからCとなるというふうに因果関係や論理の流れを見る人もいるでしょう。

光、物の影、物の姿——という順で私は絵として思い描いているわけですが、三つの絵がある場合には視点の移動があるわけですから、一枚一枚がコマになり、続き物の絵とか漫画みたいに頭の中でコマ送りして思いう浮かべています。やろうと思えば、動画のように浮かべることもできそうです。

*

一方で、物の影、物の姿、光——という順で語義を並べている辞書も持っています。「影」と言えば、私は物の影を連想するので、この順番だといちばんしっくりきます。たしか、この辞書では現行の一般的な語義から並べるという方針があったはずですが。

最後に光が出てきて、「はあ!？」と感じる人もいそうです。これが、光、物の影、物の姿——だと、いきなり光が来ますから、「影」という語で物の影をまっさきに思い浮かべる人の中には、「……!？」みたいに絶句する人がいても不思議はありません。

私の愛用している国語辞典には、古い意味から、つまり語源に近いものから語義を載せる方針があるようです（古い意味から載せるか、あるいは現在の一般的な意味から並べるかという編集方針の違いは、英語やフランス語の辞典でも見られます）。かといって、私はそれを意識することがありません。ただ漫然と眺めているだけです。

引用の引用、複製の複製

私は辞書を読むのが趣味なのですが、知識を得たり勉強するというよりも、あるペー

ジを開いたまま語義や例文を眺めながら物思いにふけります。いろいろなイメージ——模様や光景や言葉の断片——ががつぎつぎと浮かんできて飽きません。載っている例文をもとにして、見よう見まねで作文するのも楽しいものです。手本があるので作文というより借文でしょうか。

読んでいてとりわけわくわくするのは多義語を見出しにしている項目で、「かげ」や「うつす」「うつる」なんて大好物です。項目全体を見渡せるという点で紙の辞書が便利なのですが、いまはネット上で閲覧できる辞書が複数あり、それらを読みくらべる楽しさもあります。

辞書の読み比べは、引用の引用、複製の複製、起源なき引用、実物や現物なき複製といった言葉とそのイメージを連想させる刺激的な体験です。似ている、そっくり、同じ、同一の乱舞の感があります。目まいを覚えるほどですが、これが意外と快感なのです。

国語辞典がどんなふうになられるのかは知りませんが、作業の性質上、結果的に孫引きの印象を与えるものができあがるのは仕方がないでしょう。辞書によって語義がまちまちであっては困るわけですから。もちろん、各辞書に創意工夫が感じられる箇所も多々あります。

短いけど長い

「かげ」に話を戻します。

手元にある複数の辞書を見くらべると、「影」と「陰」を分けて見出し語にしているものもありますが、その場合には「陰」が先に載せてあるものが多いのに気づきます。たまにあまり利用しない別の辞書を眺めていると、そのレイアウトというか設計によって、自分の思いこみが揺さぶられることがあります。

各辞書で、語義が大見出しと小見出しによって分れるさまや、見出しの並ぶ順番や、語義の説明の仕方や例文が異なり、見比べや読み比べの醍醐味を味わうことができます。

辞書を読むよりも、目を細めて眺めていると気づくこともあります。目を凝らすのではなく細めると見えるのです。たとえば、短い語ほど語義や例文が多い、つまり短い語

ほど説明が長い、長い語ほど語義が短いという現象です。短いのは長い、長いのは短い。こんなことは、言葉が物や事をうつした影だからこそありうるのだという気がします。

不思議な体験です。短いけど長い——。見えているのは実相なのか、それとも幻影なのかという不思議さなのです。俳句が決して短くないのと似ています。定型詩としての俳句が短いというのは事実誤認ではないかと思います。俳句は一句で完結もしていなければ、一句で成立もしていないからです。

影に影を見る

言葉は影であるをつくづく思います。何の影なのかというと、上で述べたように物や事の影でしょう。言葉に物や事を見るのだとすれば、私たちは影に影を見ているのです。

私たちは、物そのものに触れたり至れるわけではなく、物の姿を物の影という光と闇の交錯を見ているのかもしれない。この場合の影とは、地面や壁にうつる影、水面や鏡にうつる影、そしてそもそも目の網膜にうつる影です。

それだけではありません。

自然界に見られる、うつる影だけでなく、人は自分の手でうつす影を作りました。人工の影です。

落書き、絵、影絵、しるし、文字、筆写、印刷、写真、レコード・蓄音機、映画、複写・コピー、デジタル化した情報（映像・音声・文書）の配信・複製・拡散・保存。どれもが「うつす・うつる・うつし」です。

私たちはこうした影たちに何を見ているのでしょうか。世界でしょうか、森羅万象でしょうか。やはり、影に影を見ているのではないのでしょうか。

影が影を生む。影の影を見る。影の影を聞く。影の影を読む。影の影を知覚する（VR・AR）、影の影をいただく。影の影に驚く、泣く、嘆く、笑う、喜ぶ、怒る。影の影をめぐる、戦争も起きます。

私たちは目をつむっても、光のないはずの闇の中で「何か」を見ているようです。静寂の中で「何か」を聞いているようです。無であるはずの夢の中で「何か」に触れているようです。

それら全部が「かげ」だという気がします。私たちは、光と闇と影が同じである世界に生きているのではないのでしょうか。大昔も、いまも、おそらくこれからもです。これからがあるとすれば。人が影に先立つ事態を招かなければ。

#影 # 光 # 闇 # 言葉 # 多義性 # 文字 # 絵 # 写真 # 複製

何か似ている世界、「何か」のない「似ている」
だけの世界

＊

何かに似ている世界、「何か」のない「似ている」だけの世界

星野廉

2022年11月21日 11:49

目次

「似ている」の世界の住人

「何かが」と「何かに」がない「似ている」

「似ている」のない世界

「似ている」の世界の住人

人は「似ている」の世界に住んでいるようです。昔からある動植物の名前を思いうかべると、その根っこに「似ている」がある気がします。

まるであだ名のようなのです。つい笑ってしまうとか、ずいぶんひどい名前だなあ、失礼だなあと思うこともあります。悪意すら感じられるネーミングもあります。

生き物だけではなさそうです。山、川、池、岩、月の模様や雲の様子や星座までに、あだ名みたいな名前がついていることがあります。

生きていない物を、生きている物の名前にちなんで名づける。逆に、生き物に生きていない物の名前をかぶせて名づける場合もあります。

森羅万象に「似ている」を基本とした名前を付けることがある。やっぱり、人は「似ている」の世界に住んでいるようです。

「何かが」と「何かに」がない「似ている」

何かが何かに似ている。これは、何かに何かを見ることですが、「何かが」と「何かに」がない「似ている」もある気がします。言葉を離れるとか、言葉が意識されない状態です。もっと詳しく言うと、心が言葉と事物を離れてしまうのです。

ぼーっとしている状態です。それでいて意識はあります。ただ言葉が浮かんでいるわけではない。あれはあれだ、これはこれだと物や事をはっきりと意識しているわけではない。見えるけど凝視や注視しているわけではない。

こう言うと、なんだか危うい精神状態ではないかと思えますが、これが自然体というか普通なのではないでしょうか。日常生活でよくある心もちなのです。

しょっちゅう言葉を意識していたり、言葉を意識しなくても、つねに「あれ」は「あれ」だ、うんうん、OK、「これ」は「これ」だ、そうそう、大丈夫大丈夫なんて確認していたら、疲れませんか？ 人は無駄に疲れずにできている気がします。

うまく「スリープ」「待機中」の部分で脳につくっているのではないのでしょうか。部分的に、です。どこかは、しゃきっとしているのです。たぶん意識はまだら状で、まばらな濃淡があるのだろうとイメージしています。その濃淡は時によって移り変わる気がします。

「似ている」のない世界

「似ている」は人の気持ちを静めます。何だか分かんないけど何となく「似ている」。この「似ている」は安心感を与えてくれるのです。

「似ている」は懐かしい気持ちでもあります。まだ言葉も知らず、事物という観念も知らなかった赤ちゃんだったころに、似ているものを目で追い、目でなぞっていたのがずっと記憶に残っているのかもしれない。

とはいえ、赤ちゃんを卒業した人なんていないのです。誰もが赤ちゃんの状態を死ぬまで大切に持っている気がします。

*

「似ている」のない世界を想像してみましょう。何一つ、見たこともない気がするのです。言葉も浮かびません。形も姿も模様も景色も、統一感のないばらばらのものとして目に映るのかもしれませんが。

これまでのどの記憶にもない、見慣れないものだらけの世界にいきなり放りこまれた感じです。「何だ、あれば、何だ、これは」だらけで、それがずっと続くのです。

「ここは、どこなんだ」でしょうね。いや、そう思う余裕もないかもしれません。きっと緊張の連続で疲れるでしょう。そんな世界にいたら、心が壊れるにちがいありません。体も持たないはずです。想像しただけで全身に汗が出てきました。

私は「似ている」に囲まれているほうが安心します。いろんな名前に囲まれている、いまここが楽しいです。

#似ている # 名前 # 名づける # 森羅万象 # 意識 # 言葉 # 赤ちゃん

起源のない反復、手本のない模倣

＊

起源のない反復、手本のない模倣

星野廉

2022年11月20日 12:32

何度もなんども「なぞる」を繰り返すとどうなるでしょう。何をなぞっているのかが分からなくなりそうです。とにかくなぞっている、なんとなくなぞっている。対象がなくなる、起源がなくなる、手本がなくなる。ないない尽くしです。起源のない引用の引用、本物や実物のない複製の複製。起源のない反復。手本のない模倣。ないない尽くし。学習、知識、情報のことではないでしょうか。何よりも、その根っこにある言葉のことではないでしょうか。

○

鏡の向こうに入っていく。笑っていた猫の笑いだけが残っている。不思議な話があります。話ですから、言葉から成りたっているのですが、それが読む人や聞く人の中にイメージを生みます。現実ではありえない事が、言葉の世界ではありえる言としてあるのです。異なる世界、言なる世界、事なる世界。現界、言界、幻界。現実、言葉、イメージと読みかえてもいいでしょう。イメージするしかないようです。イメージをイメージするのです。

○

なにしろ、人は「○△X」という言葉をつくって、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物なのです。考えれば考えるほど、自分に当てはまります。いまでもやっていますね。

○

オノマトペに限らず、言葉がすっと入ってきたり、すっと出ていくとき、その言葉は「何かに似ている」というよりも「単に似ている」として入ってくるのではないか。そんな気がしています。

「すっと入ってくる」「すっと出ていく」がポイントです。意味を考えたり意識したりはしていない状態です。その時点では意味なんてないのです。「似ている」だけがある感じ。「何が」も「何に」もない、ただ「似ている」です。

くり返しますが、どんな言葉でも、フレーズでも、センテンスでもいいのです。オノマトペとか、感動詞とか、決まり文句とか、流行語に近い感じ。思考停止とか判断停止とまでは言いませんが、無意識のうちにとりつか、条件反射的に、または生理現象のように、すっと入ってきて、すっと出ていくのです。

あらゆる言葉が決まり文句であり紋切り型ではないか。最近、よくそう思います。さもなければ、あんなにすっと入ったり出たりしないでしょう。

○

気になる名前、固有名詞を挙げてみます。ギュスターヴ・フローベール作『ボヴァリー夫人』『紋切型辞典』『ブヴァールとペキュシェ』、ホルヘ・ルイス・ボルヘス作『ドン・キホーテ』の著者、ピエール・メナール』、ミゲル・デ・セルバンテス作『ドン・キホーテ』、ローレンス・スターン作『トリストラム・シャンディ』、ルイス・キャロル作『鏡の国のアリス』『不思議の国のアリス』、オスカー・ワイルド作『ドリアン・グレイの肖像』。

○

固有名詞は引用であり複製であり反復であり模倣でもあります。起源のない引用の引用、本物や実物のない複製の複製。起源のない反復。手本のない模倣。学習、知識、情報。名前は最小最短最軽の引用、なかでも固有名詞、とくに人名は最強で最小最短最軽の引用。名前を唱える行為は、「それが指ししめす者や物や事に、なる・なりきる」儀式。威を借りるわけですが、既に何度もなぞられたものを借りるのですから楽です。嗜癖します。現にそうなっているようです。

#なぞる #複製 #引用 #起源 #反復 #模倣 #ルイス・キャロル#フロベール #フ
ローベール #イメージ

世界は「ある」というよりも「似ている」

＊

世界は「ある」というよりも「似ている」

星野廉

2022年11月19日 07:49

「似ている」とは、何かとつながり、かさなる「気持ち」のことです。自分が何かに、うつる「気持ち」でもあります。人にとって世界は「ある」のではなく、ただ「似ている」のです。人は世界が「ある」と考えることがありますが、見えるのは「似ている」だけ。「何が」も「何かに」もない「似ている」です。「似ている」を何度もなんども、なぞるのです。「何が」と「何かに」はその時々によって移り変わります。雲と同じです。

○

なぞる。形をなぞる。何か分からないままになぞる。形が動きに換わる。静が動になる。形が時に移り変わって模様になる。ああ、あれだ、あれに似ていると思う。そのうち、変わる。目が追う、指がなでる。そのうち、また変わる。なぞりながら口が開き、舌がうごいて声が出てくる。全身で形と模様を追いかける。駆けても駆けても追いつけない。夢の中の景色に似ている。もう、夢の中。なぞるはなぞ。だから、なぞるをなぞる。

○

目の前の形が変わっても、目をつむることで、なぞるを続けることができます。何度もなぞる。なぞるをくり返すのです。そのうち、なぞるが心にうつってきます。

写ってくる、映ってくる、移ってくる。

閉じていた目を開けると、なぞっていた形はもうありません。形は自分の中で残っているのです。

外にあったものが、いまは中にある。

なぞる。似ているをつくる。似ているに変える。似ているになる。

変える、帰る、還る。

#短文# 散文# 似ている # なぞる # 雲 # 形 # 夢

イメージのイメージ、イメージをイメージする

＊

イメージのイメージ、イメージをイメージする

星野廉

2022年11月16日 09:57

世界は、化け物だらけ、化象だらけ。
化けた者が化けた物を相手にしてお化けごっこをしている。
似せた者が似せた物を相手にそっくりショーをしている。
似せ者が似せ物を相手に偽物ごっこをしている。

(拙文「仮象、化象」より)

今回も前回と同じく、おふざけ半分で記事を書きます。テーマがテーマですし、こういうことは本気で論じるたぐいの話ではないと思うからです。本気に取らないでくださいね。

イメージの韻を踏みながら、連想を放ちます。放連想、呆廉想、惚廉草、毫廉w。こんな感じです。

ただし、半分は本気で書いていますので、お読みくださればうれしいです。私は本気で言葉とイメージを愛しています。

目次

イメージのイメージ

イメージをイメージする、イメージをたどる

image、imago

ぺらぺらしたもの

薄っぺらいもの

ぺらぺらしたもの

人の作った四角いもの
文字もべらべら
舌べろ
言の葉
べらべらがべらべらを生む
言の葉を聞く
言の葉を書く、写す、映す
言の葉を見る・読む
言の葉を写す、言の葉を移す
べらべらというイメージの韻
孤独な賭け
とどかない
たどれない
言葉が生まれた。
言葉と影に先に立たれる

イメージのイメージ

イメージとは、私にとってあくまでも個人的なものです。辞書に載っている語義や、曖昧なかたちで人びとに共有されている意味とは異なり、私的なものだとしてイメージしています。

ふつう人は他人に自分のイメージについて話しません。荒唐無稽でとりとめがなく、場合によっては口にするのも恥ずかしいものだからです。他人の頭の中を覗くわけにはいかないので、他人のいづくイメージもふつうは知りません。

イメージが、家族や小さな集団や大きな集団、ひいては共同体で共有される場合があります。そこには同調、忖度、強制がともないますからきな臭くなりがちです。二人のあいだでも、そうです。力関係に左右されるのです。複数、または多数のあいだで共有されるためには、イメージは固定化する必要があります。固定化するためには、文字がつかわれます。明文化というやつです。

こうやってイメージが固まり、決まりやルールや法になるわけです。同調と忖度と強制がはじまります。辞書の語義もいわゆる意味も、もとは個人のイメージから出発し、しだいに共有され固定されていく過程で、取捨され淘汰されていったと私はイメージしています（とはいえ、誰もが密かに個人的なイメージをいだきつつけているのです）。

きな臭い話になってきたので、呆けましょう。呆け、惚け、耄けるのです。

イメージをイメージする、イメージをたどる

「イメージ」に当て字をしてみます。

文字に文字をあてる、音に音をあてる。言の葉に言の葉を当てて重ねる。薄い葉に薄い葉を重ねてその模様を透かして見るのです。言葉は薄いものである気がします。

まっさきに頭に浮かぶのは夢路（ゆめじ）です。夢を広辞苑で引くと、「「寝（い）の目」の意」なんてうれしい文字列が見えます。寝目路（いめじ）と勝手にくっつけてみましたが、そんなのがあればチャームングですね。

夢路、夢路をたどる、イメージをたどる。いいイメージです。道が目浮かんで、その光景に染まっていく自分がいます。

＊

夢路といえば、夢路いとし喜味こいし（ゆめじいとしきみこいし）さんです。往年の漫才コンビです。月丘夢路（つきおかゆめじ）さんも思い出します。幼いころに、月丘夢路さんと朝丘雪路（あさおかゆめじ）さんを混同した覚えがあります。どちらも、字面と響きと浮かぶイメージがとても綺麗な名前です。

竹久夢二（たけひさゆめじ）も連想しました。

夢路、イメージ、image。

image、imago

過去の記事から引用します。

＊イメージの原語である英語の「image」は、「真似たもの、似せたもの」という意味ら

しい。つまり、「にせもの=偽もの=偽物=偽者=贗物=贗者」ということ。

以上は、前回の記事からの引用に、ちょっと手を加えたものです。やっぱり、いかにも柄が悪そうですね。image は、imagine (※イマジン)、imagination (※イマジネーション)、imitate (※イミテイト)、imitation (※イミテーション) なんかの親戚だということです。

フランス語だと、スペリングは image のままで、「イマージュ」みたいに発音するそうです。精神分析でつかう imago (※イマーゴ or イマゴ) といって、「子供時代の理想の愛の対象や理想像」を意味する用語がありますが、これも親戚だとのこと。

ちょっと、もよおしてきましたので、ダジャレをさせていただきます。お題は、イメージ、イメジ、イマジン、イマージュ、イマゴ、です。

*「夢路 (ゆめじ)」いとし、喜味こいし (※ちょっと古すぎるし、そうとう苦しいオヤジギャグですね)。

*「いじめ」はだめだよ「迷児 (めいじ)」くん (※だからー、あの、どつき漫才のコンビは一、正司敏江・「玲児 (れいじ)」だっちゅーの。むぎゅ)。

*『『今語 (いまご)』って流行語?』「さあ? ちなみに『imago』って雑誌は、休刊中みたいですが、なかなかいい特集がありましたね。まだ、ときどき、バックナンバーの在庫フェア、やっているみたいですよ」

*まご、「ひまご」、やしゃご。

*「今、じゅ」わーって、こなかった?

*「今人 (いまじん) =めっちゃチョーナウいヒト」、「暇人」、ワシのこと。

*元暴れん坊のレノンちゃんの「イマジン」も、いったん、お金を儲けてしまえば、平和がいいから、ピース、アンド、ラブ、フォエバーで、あとは奥さん、財テクくるいで、2人の息子 (※異母兄弟) に暖簾 (ノレン) 分けして、今はイン・ザ・ヘブン。合掌。

*「imagine ス、売ってます? =今、ギネス (ブック) 売ってます?」 (※現 Guinness World Records = 旧 The Guinness Book of (World) Records)

*「imagine ス、売ってます? =今、ギネス売ってます?」「いいえ、でも、クアーズとバドならあります」

*「I'm Age. =ワシの名は英二ちゅうねん」

*「I'm age. =ぼく、おあげだよ (※「あぶらあげくん」が主人公の童話より引用)」

*「I'm Ago. =おれ、あご勇 (※「あご・いさむ」さん、Where are you now?)」

*「アィム・アゴ (=顎 = jaw = ジョー)。「おじょうず、お上手」

*「アィム・アゴ (=顎 = chin = チン)。「『おら、ハードボイルドだど』の内藤陳 (ないとう・ちん) さんじゃありませんかー、お懐かしーい」

*「アィム・アゴ (=顎 = chin = チン)。「ミスターちんさん、プロレスラーのミスター珍さんとは、ご親戚だったのですか」

*「アィム・アゴ (=顎 = chin = チン)。「ちんちんかかも。仲がおよろしいですねえ」 (※放送禁止用語では、ないみたいです。広辞苑に載っていますので、お調べ願います。あと、ちんあなごも、ついでにどーぞ。)

*『『今ご』ろになって、『イメ』チェン (=イメージ・チェンジ) して、猫をかぶったり、いい人ぶって、い『い孫』の振りをしても、おばあちゃん、許しません。しょせん、

あなたは『イミテーション』、『にせもの』、『まがいもの』なの。いつも、『マネ』一、『マネ』一じゃない？ わたしゃ、もう騙されませんからね」

* imagine のアナグラムは enigma (英語で、謎、謎の人) + i (虚数単位)。image のアナグラムは、magie (仏語で、魔法、魔術)。「マジ」で、あやしい。上述の imago のアナグラムは amigo となり、スペイン語で「(男の) 友達」となるが、いやになれなれしくて要注意。

以上、寸劇を演じました言葉たちの身ぶり・表情・仕草・めくばせから、お分かりいただけたように、イメージという言葉＝現象＝記号は、その身勝手さ、うさんくささ、テキトーさにもかかわらず、

* 思考＝想像＝妄想を、刺激＝攪乱 (かくらん) し、錯乱＝活性化させる
という意味では、貴重な働き＝役割＝機能を果たしていると考えられます。
(拙文「あらわれる・あらわす (8)」より)

*

* イメージとは、とても、テキトー＝気まぐれ＝大雑把＝でまかせ的＝頼りにならない＝不安定なものである、と想定している

と考えてください。ですから、

* 「矛盾している」あるいは「論理的ではない」と感じて、いっこうに差支えがないのです。イメージのテキトーさについては、「あらわれる・あらわす (8) (安心してください。過去の記事を読まなくても分かるように書きますので) で、かなり詳細に論じましたので、ご興味のある方は、ご一読願います。どれくらいテキトーかを知っていただくために、その記事からちょっとだけコピペしてみます。

* imagine のアナグラムは enigma (英語で、謎、謎の人) + i (虚数単位)。image のアナグラムは、magie (仏語で、魔法、魔術)。「マジ」で、あやしい。imago ⇒ amigo (西語で、男性の友人) とはいえ、気を許してはならぬ。

以上のフレーズが、引用ですけど、英語の image の動詞形である imagine が曲者でして、

* 言霊の幸ふ国 (=ことだまのさきはうくに) (※意味は広辞苑でお調べください) の言葉で、「分光する＝分ける」と、imagine のアナグラムは「imigane = 意味がねえ = 意味がない = 「意味がね、イマイチなのよ、の『意味がね』」、あるいは、「iminage = 意味なげ = 「意味なげに思ゆ or 覚ゆ、の『意味なげ』」とも読める

というテキトーぶりなのです。えっつ？ 「テキトーなのは、imagine ではなくて、おまえだろう」ですか？ そう言われると、返す言葉がありません。その通りでございます。拙文「意味の論理楽・その2【引用の織物】」より

元気なころに書いた記事です。威勢がいいですね。うらやましくなります。

イメージは個人的なものであり、はかなく、淡く、薄い。ひらひら、ぴらぴら、べらべら。

ぺらぺらしたもの

*薄っぺらいもの

絵、写真、映画（スクリーンに映します）、液晶画面に映る映像。

文字、本、雑誌・新聞、液晶画面に映る文書。

こうしたぺらぺらであったり、厚みを欠いた表面に、いろいろな情報がのっかっているわけです。印刷されていたり、映しだされています。

(拙文「仮象、化象」より)

現在の世界は、薄っぺらいものに満ちています。薄っぺらいのにぶ厚いのです。

大昔から薄っぺらいものは自然界にあったようです。思いつくのは葉っぱ（ルースリーフのリーフ、ミルフィーユのフィーユ）です。おびただしい数のぺらぺらの葉っぱがいまも至るところにあります。ただし葉っぱはぶ厚い感じがしません。

現在目につく薄っぺらいものは何といっても紙です。写真やはがきを、枚のほかに、一葉、二葉と数えますね。ただの紙はぺらぺらですが、そこに文字がのっかっていると、とたんにも厚くなります。文字ののっかっている紙をぶ厚いと感じるのはヒトだけだと考えられます。

なにしろ、文字ののっかっている紙を人が飽きもせずにながめ、大切に保存し、写しを取り、広く配っているのですから、薄っぺらいだけのものでないことは確かでしょう。

たぶん、いや、きっとぶ厚いのです。ただ薄っぺらいものをながめたり、大事にするほど、人は暇ではないと思われるからです。

*

ぺらぺらの紙にのっかっているものは文字だけではありません。ざっくりと言えば、絵ものもかかっています。絵には手描きのものをはじめ、光学器械で映した写真、印刷されたもの、機械で描いたものがあります。

人は薄っぺらい紙にのっかっている文字と絵をながめているようです。「ようです」と人ごとのように書いたのは、なぜか不思議でならないからです。見慣れた光景と言え、不思議でなりません。その状況のありようがうまくとらえられないのです。

なんでこうなっているのだろう、これはいったいどういうことなのだろう、と。

人と仲良し——と、ヒトが一方的に思っているようですが——の人以外の生き物たち、たとえば犬や猫や金魚や馬や牛や豚や鶏も不思議に思っているかもしれません。尋ねたことがないので想像するだけですけど。

猫なんか、何かを読んでいると攻撃してくることがありますね。スマホも標的にされます。私なんかは、素直に反省します。猫の態度のほうが正しいと思うのです。

ワンコやおさるさんは、紙の上の文字と現実を混同しません。文字と現実を混同するおさるさんがいたら、世界的な大ニュース、歴史的な大事件になるでしょう。AI並みにヒトの嫉妬と恐怖の対象となり迫害されるかもしれません。

(拙文「仮象、化象」より)

*ぺらぺらしたもの

ぺらぺらしたものを思いつくままに、列挙してみます。

*

まず、人にあるもの（内臓は除きます）。

まぶた、舌、皮膚、てのひら、爪、耳、見ようによっては胸。

*

身のまわりにあるもの。

新聞、雑誌、ノート、本、メモ帳、ルースリーフ、ノートパソコン（キーボードおよび本体、モニター）、携帯電話（キーボードおよび本体、モニター）、クリアファイル、紙

幣、硬貨

テレビ（画面と本体）、カーペット、座布団、畳、戸・ドア、ガラス窓、障子、時計、カレンダー、写真、写真を入れるフレーム、引き出し、カーテン、鏡

フックに掛けてあるエプロン、そんなこと言ったら衣類ぜんぶ

菓の包み紙（プラスチック製）、皿、まな板、ふきん、見ようによっては食器ぜんぶ、フライパン、見ようにとっては鍋、鍋の蓋

ティッシュペーパー、トイレトペーパー

*

けっこう疲れますね。

身のまわりにあるべらべらしたものを探しているうちに、既視感を覚えました。あるものを探していたときと同じものを探しているのに気づいたのです。

四角いものです。人の作った、つまり人工の四角いものと言うべきでしょう。

人の作った四角いもの

過去の記事から引用します。どれもがイメージの韻というか、イメージを連想形式でつづったものです。

*

この部屋は和室なのですが、引き戸も長方形、サッシの窓も長方形、あと壁のカレンダーも、テレビとそのリモコンも、テーブルも、パソコンの画面も、ティッシュの箱も、本も新聞も棚も枠に収めた写真も、ぜんぶ長方形です。あ、畳を忘れていました。目につく正方形は座布団とカーペットくらいです。

寝るためにつかっている部屋もそうです。ベッド、シーツ、布団、枕、エアコン、エアコンのコントローラー、たんす。そして天井の羽目板が長四角です。夜は小さな電球の明かりのもとで寝ているのですが、目を開けると眼鏡を外した目にぼんやりとその羽目板の様が見えて安心します。見慣れているからでしょう。

（拙文「【小説】正方形と長方形で悩む夜」より）

＊

人は長方形に囲まれて生きている気がします。生まれたばかりの赤ちゃんは、囲いというか長方形の枠の中にいます。そのあともたいていほぼ長方形の枠の中にいつづけます。家、建物、道路、乗り物、PC、スマホ……。

人が亡くなると長方形の棺という枠に入ったまま長方形の炉という枠の中でくべられ、骨壺（これを入れる箱は縦に長細くないですか？）とか墓という枠に収められます。めちゃくちゃ言ってごめんなさい。

（拙文「【小説】夜になると「何か」を手なづけようとする」より）

＊

そういえば、空を見ても長方形は見当たりません。楕円形っぽい長方形にも見える視界の枠が感じられるだけ。お日さまも雲たちにも、お月さまも星たちにも、角というものが無い。直線もない。空に見える直線は電線と飛行機の跡の白い線くらいです。

そもそも四角や長方形や五角形や六角形は、自然界ではあまり目にしません。直線自体がまれなのです。そうしたものを自然から採取して見るとすれば、顕微鏡や電子顕微鏡という道具をもちいるしかない気がします。結晶には多面体が多いですね。つまり肉眼をふくめた五感では出会えない形ではないでしょうか。

要するに不自然なのです。人の五感で感知できる限りでの自然に反しているともいえそうです。反自然、不自然。ありえない、抽象、観念。そういうものには整然とした美しさがあるのでしょうか。端正なのです。

（拙文「【小説】分けるとか切るは、きっと人の中にあるのでしょうか」より）

＊文字もべらべら

よく考えると人の作った四角いものにはべらべらなものが、けっこうあると気づきます。

しかも四角いほうが大切にされている気がします。

きわめつけはお札でしょう。紙幣です。それに、クレジットカードも、ポイントカードも。将来は、紙幣が消えるのでしょうか。その前にべらべらした人類が消えるのでしょうか。

あと名札でしょうか。各人にとっていちばん大切なものである名前が文字としてしる

されている四角いぺらぺらです。

お札（おさつ）とな札（ふだ）とお札（れい）って似ていませんか？ そっくりに見える私は「似ている」に憑かれて疲れてるみたいです。とうとうか、「似ている」と思いはじめると何でも「似ている」ように見えます。このしつこさは被害妄想に似ています。

究極のお札はお札ではないでしょうか？ お札（ふだ）もお札（れい）でもなお札（さつ）です、念のため。個人的な印象を押しつける気持ちはありませんけど。

＊

いずれにせよ、文字を書いたり、映したり（印刷やフォトコピーや端末のスクリーンに映す）、写したり（写本・筆写や印刷や複写）、それをまた移したりする（配布や翻訳や拡散）、ぺらぺら（紙や液晶画面のことです）が、ぜんぶ薄っぺらくて四角いことは注目に値します。

みなさんと私をつないでいる端末の画面というぺらぺらも四角いです。

そのぺらぺら上においての話ですが、私は文字、みなさんも文字です。お互いに顔も知らないし声を聞いたこともない仲です。文字どおり、文字同士としての付き合いです。

いま私は薄い液晶のスクリーン上に表示されている自分の入力した文字を見つめています。視覚的に厚みも深みも感じられない、つまり立体感に欠ける文字です。

ということは、ひょっとすると文字ってぺらぺらなのではないでしょうか。これまで考えたことがありませんでした（あたりして）。

ぺらぺら（紙や画面）にのっかかったり、うつったり、染みついたり、こびりついたり、貼りついたりしているのですから、文字はぺらぺらなはずです。いま文字のありようを体感した気分になり、どきどきしています。

＊

「ぺらぺらしたもの」——。自分のことじゃないですか。へらへらしているとは以前から感じていましたが、ぺらぺらでもあるとは……。ぺらぺらがぺらぺらについて書くとは。

きのうの記事「仮象、化象」のしりとりで書いているようです。相変わらず適当な人間ですね。最近、連想というか、しりとりばかりで書いています。似ているを基本にしてイメージでつなげて言葉を連ねるのです。記事の章立てもしりとりなのです。呆廉想。

＊

人は「小さい」や「薄い」や「短い」をうまく利用しているようです。というか、小さくて薄くて短いものを作るのに長けているようです。身のまわりを見ると、そんなものに満ちています。人自身がそうだからでしょう。

人は自分に似たものを作り、自分の作ったものにさらに似ていく。

この辺については、以下の記事に書いています。

人のつくるものは人に似ている/人のつくるものに人は似ていく - 星野廉のブログ

＊なぞる ＊人のつくるものは人に似ている ＊粋がぼやける ＊冷蔵庫はお母さんに似ている ＊粋、タブロー、スクリーン ＊粋、

horensou.hatenadiary.com

ぺらぺらについて、もう少し考えてみたい、連想してみたいと思います。引用します。たびたびごめんなさい。投稿できるうちに投稿したいという焦りはありますが、改めて記事を書く体力がないのです。

舌べろ

舌べろは方言なのでしょうか。

「べろ」という発音は舌に擬態しているように私には思えます。「べろ」をいう音を舌で転がしてみます。舌で舌を転がすのです。いやらしく聞こえたら、ごめんなさい。

ごいっしょに発音してみませんか？

ぺろぺろ、べらべら、べろべろ、あっかんべえ。べらべら、英語がべらべら、へらへら、へろへろ、れろれろ。

なんだか軽薄でいいですね。軽くて薄い感じ。親近感を覚えます。他者とは思えないのです。

*

ヨーロッパの諸言語で、言語を意味する言葉の語源が「舌」であるのは興味深いです。英語だと language であり、tongue ですね。

l と t では、舌の先が上の歯の後ろの歯茎に来ます。l ではぴったりと舌が貼りつき、t では軽く舌打ちする感じ。

ウラジーミル・ナボコフの L への、尋常ではないこだわりについて書いた記事がありましたので、以下に引用します。アート・ガーファンクルの動画を使って、英語の L と T の発音をねちっこく、しかも少々エロく語った記事です。

アート・ガーファンクルの大きめの口が大きく開いたときに見える舌の動きに注目してください。

私なんか、見入ってしまいます。同じ口、同じ舌の動きを真似ている自分があります。自分が舌になっていくような不思議な気持ちになります。

これだけ口と唇と口蓋と舌の動きや形や構えがよく分かる動画は珍しいです。声もいいですね。会場であるセントラルパークの雰囲気も最高です。

では、以下に引用します。

*

* Like a :

L の舌先が口蓋に触れます。学校で習ったとおりです。i (アイ) ははっきり発音されます。little を正確に発音すると分かりますが、単語の冒頭に来る l と最後に来る l は微妙に異なり、冒頭の l は舌先を上歯の後ろにくっつけるように、最後や途中に来る l では舌先が口蓋の真ん中あたりに来ます。後者の場合には、口蓋にガムが張りついていて、それを剥がそうとする感じで息を吐くと「おー」みたいな深くこもった音になります。

したがって、little は「リロ」みたいに発音されます。apple が「アポ」に聞こえるのと同じです。「リトル」でも「アップル」でもありません。また、アルファベットの L は「エル」ではぜんぜんなくて「エオ」みたいに響きますね。要は舌先が口蓋の歯の近くではなく真ん中についていけばいいのです。

単語の最初に来る l を意識的にゆっくり発音すると、ウラジーミル・ナボコフの小説『ロリータ』の冒頭を思い出さずにはいられません。

Lolita, light of my life, fire in my loins. My sin, my soul. Lo-lee-ta: the tip of the tongue taking a trip of three steps down the palate to tap, at three, on the teeth. Lo . Lee. Ta.
(太文字は引用者による)

ロリータ、我が命の光、我が腰の炎。我が罪、我が魂。ロ・リー・タ。舌の先が口蓋を三歩下がって、三歩めにそっと歯を叩く。ロ。リー。タ。
(『ロリータ』ウラジーミル・ナボコフ著・若島正訳・新潮文庫)

上で引用した原文に施した太文字の L と T をご覧ください(原文に太文字はありません)。やたら目につきますね。作者のナボコフが作品の冒頭で書いた部分ですから、選び抜いた語が並べられているにちがひありません。

これは、もはや L という音を賛美した詩ではないでしょうか。

身も蓋もない言い方になって恐縮ですが、こういう緻密かつ繊細な「音の芸術」は翻訳不可能だと思います。小説は散文なのですが、ここなんかはもう詩だと言いたいところです。詩、特に韻律のある詩を別の言語に翻訳すると別の詩になると言われますが、分かる気がします。

小説の言葉は目で見る文字としてだけではなく、朗読して味わうことができます。この部分は、特にそうです。ぜひ音読してみてください。上の引用では、(私が原文に施した)太文字の T と L に注意しましょう。

L と T は基本的に舌先が同じ位置にあり、T では上の歯のすぐ後ろにある口蓋を舌先が叩くというか弾くようにして発音されます。舌打ちにも近いです。ナボコフはそれを十分に意識しています。

ナボコフの L という子音に対する入れこみようは尋常ではありません。L フェチと言ってもお墓の下のナボコフさんは腹を立てないのではないのでしょうか。

(拙文「Lに魅せられた作家」より)

*

このさい、動画も貼り付けましょう。大好きで何度見たか分かりません。

(動画省略)

言の葉

「言の葉」という言い方の「葉」ですが、これも私にはべらべらに感じられます。葉には端や刃や羽とのイメージの韻——「は」という音だけでなく——も感じます。端っこ、鋼を薄くのぼした刃、薄く軽い羽という感じですよ。

学問的な関連については知りません。あくまでも個人的なイメージの連想を問題にしています。

さらに「言の葉」は、ヨーロッパの「言語」における「舌」のべらべらとイメージの韻を踏んでいる感じがします。英語でいえば、language と tongue です。

(※「韻を踏む」というのは、通常は言葉の音(おん)の一致や類似に注目して言葉を掛

けるレトリックを指します。「イメージの韻を踏む」とは、言葉の語義や、言葉の喚起するイメージの類似に注目して言葉を掛けるレトリックのことであり、私が勝手にそう呼んでいるだけです。）

＊

言葉（言の葉、言語）はぺらぺら。そんな気がしてきました。たしかにそのようです。とはいえ、これはあくまでも個人的なイメージの話であり、普遍を意識したり指向しているわけありません。

イメージの連想というか、直感とか直観というか、体感的な感覚が私は好きです。イメージとは個人的なものですから人それぞれであり、確認も検証もできませんが、だからこそ愛おしいのです。

おそらく死ぬ間際までついてきて、私を楽しませてくれるようなイメージなのです。大切にしたいと思っています。

ぺらぺらがぺらぺらを生む

いま私は薄い液晶のスクリーン上に表示されている自分の入力した文字を見つめています。視覚的に厚みも深みも感じられない、つまり立体感に欠ける文字です。

ということは、ひょっとすると文字ってぺらぺらなのではないでしょうか。これまで考えたことがありませんでした。

ぺらぺら（紙や画面）にのっかかったり、うつったり、染みついたり、こびりついたり、貼りついたりしているのですから、文字はぺらぺらなはずです。いま文字のありようを体感した気分になり、どきどきしています。

私は言葉を広く取っています。話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、視覚言語と呼ばれることもある表情と身振りも言葉と考えて生活しています。

で、思ったのですが、ぺらぺらだらけではないでしょうか。

舌もぺらぺら。発したとたんに消える声の存在感も薄くてぺらぺら。空気の振動であ

る声をとらえる鼓膜もぺらぺら。

手のひらもぺらぺら。手を使って書いたり入力する文字もぺらぺら。紙もぺらぺら。液晶画面もぺらぺら。

顔の皮膚を舞台とした表情もぺらぺら。

ぺらぺらとした網膜に映ってたちまち消える身振りもぺらぺら。

めちゃくちゃこじつけて、ごめんなさい。こんなことを書いている私もぺらぺら。さらに言うなら、へらへらでへろへろ。べろんべろんでないだけ、まし。

言葉は「うつる、写る、映る、移る」と親和性があるようですが、これは、ぺらぺらは「うつる」と親和性があるとほぼ同義ではないでしょうか。

＊

ぺらぺらな言葉から意味とイメージが立ちあらわれる。というか、人はぺらぺらに意味やイメージを取る。

意味とイメージは実体を欠いている。実体を欠いているのだから、その存在感はきわめて薄い。つまり、意味とイメージもぺらぺら。

ぺらぺらがぺらぺらを生む。

＊

それにしても、人はぺらぺらに取り憑かれているようです。ぺらぺらをせっせとつくり、ぺらぺらを写して増やし拡散し保存し、ぺらぺらに見入り、さらにぺらぺらをつくり……。

ぺらぺらにはぺらぺらな文字や絵がうつっていて、人はそこにぶ厚かったり、とほうもなく深かったりする「何か」を見ているようです。さもないと、飽きもせずこれだけぺらぺらに執着するわけがありません。

言の葉を聞く

震える、届く、震える、聞く。

ぺらぺらした舌が放した（話した）、ぺらぺらした声が、ひらひらと空気を震わせながら、ぺらぺらした耳たぶに届き、その奥にあるぺらぺらした鼓膜を震わせる。

言の葉を書く、写す、映す

話す、放す、映す、写す、書く。

ぺらぺらした舌が放した（話した）、ぺらぺらした声が、今度はぺらぺらした文字という影に落とされ、その影がぺらぺらした紙に映る、写る。つまり書かれる。

言の葉を見る・読む

映る、見る、眺める、読む。

ぺらぺらした紙に映った（書かれた）文字が、ぺらぺらしたまぶたの奥にある、ぺらぺらした網膜に映る。つまり、見る、眺める、読む。

ひょっとすると、見られた、あるいは読まれたときには、ぺらぺらした網膜に映る影が、ぺらぺらした心のスクリーンに映るのかもしれない。

心のスクリーンに映るのかもしれない意味やイメージや物語は、残念ながら目には見えない。

言の葉を写す、言の葉を移す

写す、移す、掻く、書く、染みる、刻まれる、印刷する。

ぺらぺらした紙に写った、移った、掻かれた、書かれた文字（インクの染み）が、別のぺらぺらした紙に写される。筆写や印刷。

＊

移す、広げる、配布する。

ぺらぺらした紙に写った（書かれた）文字（インクの染み）が、紙にのったまま、あちこちに移される。配布。

＊

写す、書く、染みる、移る、つながる、かさなる、翻訳する。

ぺらぺらした紙に写った（書かれた）文字（インクの染み）が、別のぺらぺらした言の葉の文字に移されることもある。翻訳。

英語と日本語に話をしぼりますが、単語、フレーズ、センテンス、文章、あるいは作品のレベルで、対訳でくらべた場合に、両者は別物（同一ではないという感じ）であり、「似ている」でも「同じ」でも「違う（異なる）」でもなく、強いて言えば「つながっている」と感じます。

翻訳は「つながっている」とか「かさなっている」というのが私の印象です。
（拙文「つながる、かさなる、むすぼれる」より）

ほんやく（translation）は翻訳とも反訳（速記なんかでは「ほんやく」という作業もあるようです）とも書くみたいですが、「ひるがえす・翻す」が見えてそのイメージにわくわくします。ひらりとひっくり返すとか裏返すという感じです。

ぺらぺらをひらりとひっくり返しても、やっぱりぺらぺら。

＊

投稿する＝複製する＝拡散する＝保存する、映す、写す、移す。

デジタル化された情報（信号）が、ぺらぺらしたスクリーンに視覚化されて映る文字（画素の集まり）は、同時に、別のおびただしい数の端末のぺらぺらしたスクリーンに視覚化されて映る。ネット上では投稿、複製、拡散、保存がほぼ同時に起きます。

ぺらぺらというイメージの韻

以上、ぺらぺらという個人的なイメージを感じる、言の葉、舌、まぶた、耳たぶ、目の網膜、耳の鼓膜、紙、スクリーン、声、文字といったものたちを、ぺらぺらという言葉に掛ける形で、遊んでみました。

いや、むしろ遊んでもらったという気がします。あくまでも戯れです。

ぶっちゃけた話がこじつけです。

ぺらぺらという動き（これが動きであればですが）やイメージのシンクロという言い方もできるかもしれません。

*

ところで、言の葉、舌、まぶた、耳たぶ、目の網膜、耳の鼓膜、紙、スクリーン、声、文字は似ていますか？ 見えないものがありますが、見たときに似ていると感じますか？

人それぞれですよ。またはケースバイケースだと思います。そのときの気分でも変わる気がします。

要するに、こじつけなのです。

孤独な賭け

どちらにせよ、アルミ缶とミカンの数々の特性の中で、音の類似、つまり言葉として似ているという点が、一瞬両者をつないだのです。簡単に言うと、言葉が事物同士を一瞬つないだのです。

（拙文「駄洒落と比喩と掛け詞」より）

言の葉、舌、まぶた、耳たぶ、目の網膜、耳の鼓膜、紙、スクリーン、声、文字のそれぞれが持つ数々の特性の中で、イメージの類似、この場合には「ぺらぺら」という薄っぺらいものとしてのイメージが、私の中で一瞬ぜんぶをつないだのです。

掛け詞や駄洒落で掛ける要素である、発音や文字の形は、人の外にあるものですから、聞いて、あるいは見て一致や類似が確認できますが、イメージは人の中にあるものですから、確認も検証もできません。

＊

私が勝手に作った言い回しである「イメージの韻を踏む」というのは、やはり言葉の喚起するイメージの類似に掛ける比喩に近いのかもしれませんが。

いずれにせよ、個人的なイメージに頼る孤独ないとなみなのです。ギャグといっしょで、誰かに受けるか受けないかは、賭けだとしか言いようがありません。

掛け詞も駄洒落も比喩も、そしてイメージの韻も、誰かが乗ってくれるかどうかにかかっているという意味では、賭けだと言えそうです。しかも孤独な賭けなのです。

とどかない

ヒトはヒトという生き物の知覚と認知機能という枠の中で生きています。世界とか森羅万象とか宇宙という言葉をつくっていますが、それが指すものにはとどかないのです。

それが指すものがとうてい届かない、努力目標としか思えない言葉が多いようですが、そうした言葉に憑かれ疲れる人も多い気がします。

世界と呼ばれるものや宇宙と名づけられたものと無媒介的に触れあうことなどなく、隔靴搔痒の遠隔操作をしながら生きているという意味です。

何かに追いかけて必死で走る夢を見たことはありませんか。

走っても走っても、走っていないようなのです。一生懸命に（命を懸けて）足を動かし手を振っているつもりなのにぜんぜん進んでいないのです。つまり、あがき、もがいているだけ。

これは駆けても駆けてもじつは駆けていないとも言えます。賭けても賭けてもは賭けていないと激似ではありませんか。もどかしい限りです。

気に掛けても掛けても、じつは掛けたことにはならない。絵を描いても描いても、じつは描けてはいない。文章を書いても書いても、じつは書いてはいない。

隔靴搔痒の遠隔操作。まるで夢の中。知覚機能を用いる限り対象には触れることができない。言葉を使う限り直接的に森羅万象を相手にすることはできない。

駆けても駆けても駆けてはいない。掛けても掛けても掛けてはいない。搔いても搔いても搔けてはいない。書けても書けても書けてはいない。要するに、そういうことです。

どう足搔いても藻搔いても現実にたどりつけない私たちは、覚めた夢の中にいるのかもしれない。

(拙文「書いても書いても書いてはいない。」より)

たどれない

オノマトペに限らず、言葉がすっと入ってきたり、すっと出ていくとき、その言葉は「何かに似ている」というよりも「単に似ている」として入ってくるのではないか。そんな気がしています。私の好きな言い方をすると、本物のない複製の複製であり、起源のない引用の引用です。

「すっと入ってくる」「すっと出ていく」がポイントです。意味を考えたり意識したりはしていない状態です。その時点では意味なんてないのです。「似ている」だけがある感じ。オノマトペに限らず近くになっている状態をイメージしてください。

くり返しますが、どんな言葉でも、フレーズでも、センテンスでもいいのです。オノマトペとか、感動詞とか、決まり文句とか、流行語に近い感じ。条件反射的に、または生理現象のように、すっと入ってきて、すっと出ていくのです。

(拙文「美しいって、何が？」より)

言葉が生まれた。

流行語も新語も、ある言い方や言葉を少し変えたり、組み合わせたという意味で引用であり複製です。引用にも複製にも、ずれが生じます。まったく新しい言葉とか言い回しは可能なのでしょうか。

言葉が生まれた。

このセンテンスというか言い回しは、常に過去形ではないのでしょうか。

人類にとっての言語というレベルでも、ある特定の言語というレベルでも、方言（方言

と言語の定義は曖昧ですが、「言語（国語）とは軍隊を持った方言である」というフレーズが至言だと思います）というレベルでも、ある話し言葉の単語や言い回し、またはある書き言葉つまり文字の書き方や綴りというレベルでも、言葉の始まりというのはたどることが不可能な夢のようです。

それだからこそ、さまざま人がこれまでに夢見て語ってきたのでしょう。タイムマシンの発明が実現するまでは諸説ありの神話でありつづけるのかもしれませんが。

言葉と影に先に立たれる

人は時をさかのぼることができません。過去は忘れるか、覚えているか、思い出すか、記録（暗唱、文字での記述、絵や撮影をふくむ映像化、デジタルデータ化）するか、たどって想像するか、他の人と共同であるいは一人で決めるか、でっち上げるしかできないのです。

人にとって、「はじまる」「はじめる」「はじまり」は、「いま」か、「これから」でしかなく、その「はじまる」「はじめる」「はじまり」は、もはや「くりかえす」「くりかえし」でしかない気がします。

「はじまる」「はじめる」「はじまり」は永遠に失われているという意味で、人にとっては抽象でしかないのかもしれませんが。知識と情報としてでさえ、その存在はあやしく危ういのです。この場合の抽象というのは「失われている」、つまり「ない」、言い換えれば「過去」だという意味です。いましているのは、言葉の話です。

*

もはや、おそいのです。おくれたし、おくられているし、おくれつづけるのしょう。まるで影のようではありませんか。

影に気づいたとき、人はすでに影に先に立たれているのです。人が先に立って、できたはずなのにです。

影とは言葉のこともあります。比喩とも言えるでしょうが、どっちがどっちの比喩なのかが不明なのです。いまはそういう話をしているのです。

言葉に気づいたときには、人はすでに言葉に先に立たれているのです。人が先に立って、できたとか生まれたはずなのなのです。

かつて先立ったはずの私たちが、いつのまにか影や言葉に先立たれ、その私たちがいつか影や言葉に先立つことになる。「先立つ」には「前に立つ」や「先に起こる」と「先に亡くなる」の両義があります。

ことのはに さきだつひとを おくるかけ
(拙文「影に先立つ【引用の織物】」より)

人が先か、影が先か、言葉が先か。

似た話がありますね。こけこっこー。ぼとり。

人が先だというのは抽象ではないでしょうか。影に気づいたときや、言葉に気づいたときには、人はもう後れて遅れているのですから。

言葉は影、影は言葉。

影と言葉がはじまった、つまり生まれたとき、人は人になったのであり、人は人として生まれたのではないのでしょうか。

短絡を覚悟で言えば、影というものを人が認識したとき、言葉というものを人がつかいはじめたとき、影と言葉が生まれた、つまりはじまったのです。

こうも言えるでしょう。はじまりを意識したときには既に、はじまりに後れていて遅い、はじまりを口にしたときにはさらに遅い、はじまりを文字にしたときにはもっと遅い、と。はじまりを言葉や影に置き換えても同じです。何でも、そうなのです。追いつけないのです。

とどかない、たどれない、追いつけない、はひょっとすると同じなのです。または、つながっているのかもしれない。

でまかせで言いましたが、もうそうであれば、「はじまる」「はじめる」「はじまり」をたどれるでしょうか。

＊

人は「はじまる」「はじめる」「はじまり」をイメージして、「はじまる」「はじめる」「はじまり」という言葉をつくったのかもしれませんが。

「はじまる」「はじめる」「はじまり」が「過去をさかのぼる」あるいは「たどる」ことではなく、人にとって「はじまる」「はじめる」「はじまり」とは「これから」つまり未来での動作と出来事でしかないことは興味深い事実です。「これから」「つくる」のです。

過去も「はじまり」も未来であるというのが、人にとっての現実なのです。「はじまり」も「過去」も「起源」も、「これから」「先に」仮設し仮説し架設するかないという意味です。虚構をつくるとか、こしらえるとも言えます。

「はじまり」も「過去」も「起源」も言葉ですから、当然のことながら、言葉で、こしらえるのです。

これを逆説だか詭弁だととらえるのは自由ですが、逆説なんて言葉でまとめたところで、気安めになっても事態は変わりません。

言葉をつかう限り、記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもあるのです。⇒拙文「記述は、既述であり、奇術であり、詭術でもある。」

＊

現実には現実の文法があり、思いには思いの文法があり、言葉には言葉の文法があり、イメージにはイメージの文法があると私はとらえています。この場合の文法とはもちろん比喻です。

現実と思いとイメージと言葉が別物だからです。

逆説とかトートロジーとかいう言葉でまとめて思考停止するのは、言葉の文法にこだわっているからだと思えます。一対一に対応しない別物のあいだに食い違いがあるのは当然なのです。

人は言葉での辻褃合わせや帳尻合わせにこだわりすぎている気がしてなりません。このことに敏感だったのはニーチェであり、ジル・ドゥルーズだったように私はイメージしています。

*

言葉で現実の帳尻合わせをするより、言葉が喚起するイメージと積極的に戯れるのが、私は好きです。わくわくするからです。

長い記事を投稿して疲れしました。しばらく夢路をたどりたいと思います。

#言葉 # 言の葉 # 引用 # 複製 # イメージ# 連想 # 文字 # 漢字 # 日本語 # 影 # 夢
掛け詞 # レトリック

假象、化象

＊

仮象、化象

星野廉

2022年11月15日 07:57

抽象、具象、事象、現象、表象、仮象、印象。

こんなふうには、言葉を並べてわくわくする人がいます。ここにもいます。辞書や事典で調べたり、ネット検索をする気配はありません。ただながめて、にやにやしたり、うーむとうなってみたり、鼻の穴をほじったり、たまに天井の模様に見入っていたりしています。

(拙文「意味は宙づりのまま、なぞり、えがく」より引用)

調べずに、ながめているだけというのは、本物のない複製の複製と起源のない引用の引用を相手に積極的に戯れようというスタンスだと言えるでしょう。

目次

仮象

かり、かりる

仮の姿、本当の姿

化象

but skin deep

ネタバレあり、「バット・スキン・ディープ」創作ノート

ぺらぺら、厚みがない

本物と偽物が区別できないどころか、意味をなくしている

お化けごっこことしての世界

仮象

仮象。

前から気になっている言葉です。ものすごくかっこいいです。ぞくっときます。「かしょう」であって「けしょう」ではないようですが、「けしょう」もいいなあと思います。

辞書を引いた記憶があります。哲学か美学かの用語らしいのですが、専門用語は苦手なので、勝手にイメージしてみます。私は研究者でも探求者でもありません。

*

仮象。かしょう、けしょう。

姿や形が仮のものなのでしょうね。想像するとぞくぞくします。怪しいというよりも妖しいです。仮の姿ですよ。妖しすぎます。

仮ということは、本当の姿があるのでしょうか。化けているということになりそうです。あるいは借りている。「仮」と「借りる」はつながっていたはずです。

かり、かりる

『『仮往生伝試文』そして / あるいは『批評 あるいは仮死の祭典』』という記事を書いた書いたときに、「かり」と「かりる」について調べたり、考えたことがあるのですが、ほとんど忘れてしています。

年を取ったせいか、物忘れが加速度的にひどくなり、集中力がめっきり萎えてきました。

*

その記事にざっと目を通しましたが、長いですね。無駄に長いというやつです。もうあんな長いものは書けません。

仮象も何度か使っています。やっぱり深入りはしていないみたいです。浅い人間なの

で、深入りできないのです。表面をなぞるだけ。

本物のない複製の複製と起源のない引用の引用を相手に積極的に戯れるだけ。居直って、ごめんなさい。でも、そのほうが楽しいですよ。

仮の姿、本当の姿

仮の姿。借りた姿。本当の姿があるはず（ほんまかいな）。どこかにあるのか、隠しているだけなのか？

姿が変わったのか、移り変わったという感じなのか？ 答えなんかありませんから、いろいろ想像してぞくぞくして楽しめます。

本物の姿があって仮の姿という発想は好きではありません。本物と偽物とか、真偽とか、正誤が苦手なのです。ぶっちゃけた話が、嫌悪感を覚えるのです。

嘘っぽいのです。本物も偽物も、正統も邪道も、等しいと思っているからでしょう。

要するに、本物のない複製の複製と起源のない引用の引用です。

化象

仮象。かしょう、けしょう。

「けしょう」は私が勝手に付けくわえた読みですが、「けしょう」といえば、化粧ですよ、ふつうは。

仮象、仮生、化生、化粧。

私はお化粧をする習慣はありませんが、興味はあります。自分のすっぴんに粉や色をつけるようですね。大変でしょうね。

自分の顔の表面をいじるわけです。表面をいじって変えるのです。根本は変わりません。表面だけ。表面だけでも、あれだけ変わるのです。

すごすぎます。

but skin deep

—Beauty is but skin deep. (美は皮膜にあるのみ)
(拙文「【小説】バット・スキン・ディープ」より引用)

美は皮膜にあるのみ——英語のことわざの訳文です。掌編小説のエピグラフとして使ったことがあります。

美しさは、皮膚の厚さくらいしかないという意味です。どんな美人さんでも、皮をむけば……という感じでしょうか。残酷なフレーズですね。文字どおりに取って、そのさまを想像するとぞっとします。

でも言えていると思います。お化粧品だって、表面だけを変えるのですから、分かりやすいです文句です。

よく考えると、深さがなくてぺらぺらものに「美しい」と感じさせるものが多い気がします。

「美しい」とか「わんわん」とか「きれい」と口にするなり文字にする行為は、引用であり、「美しい」という声や文字は複製だという気がしてきました。

真似て、それをくり返しているわけですから、引用の引用、複製の複製でしょうか。しかもその引用の起源と複製の本物が不明なのです。不明どころか「ない」というのが実感です。誰にとってもそうではないでしょうか。

(拙文「美しいって、何が？」より)

前回の記事からの引用です。言葉はどんどん口にし文字にしていると擦り切れてきますが、中身が薄くなってそのうち存在感がなくなります。「美しい」は空疎な決まり文句

と化しているのです。詳しくは「美しいって、何が？」をお読みください。

表面だけでべらべら、深さというものがない。まさに、これこそ本物のない複製の複製であり、起源のない引用の引用ではありませんか。言葉と激似。いまのは、お化粧のことです。お化粧の下にあるものの話ではありません、念のため。

ここで脱線します。

ネタバレあり、「バット・スキン・ディープ」創作ノート

(ここからは脱線ですので、飛ばしていただいてもかまいません。太文字の部分だけでもお読みください。)

以下は過去の記事に加筆したものです。

勢いを生かすために加筆は最小限にとどめています。レイアウトが変ですが、かつてはこんな書き方をしていました。読みやすいように心がけていたのです。やたら「＝」もつかっていますが、意味の固定を避けて、こう言えるし、ああも言えるというふうに書きたかったのです。



さてテーマは、

* 「視線」と、「美醜」or「虚実」

についてです。

「見る」とは、どういう「いとなみ＝行為＝行動」なのでしょう？ あるいは、どういう「身ぶり＝運動＝しぐさ＝身のこなし」なのでしょう？ 個人的には、「いとなみ＝行為＝行動」とは抽象的レベルにあり、「身ぶり＝運動＝しぐさ＝身のこなし」は具体的な動きをイメージしています。順序が、逆になりますが、「信号」に関して、という限定つきで定義するなら、

＊1) 「みる・見る」という「身ぶり＝運動＝しぐさ＝身のこなし」は、「視線を投げる・視線を送る・合図をする・めくばせをする・色目をつかう」ことであり、相手（＝対象）に働きかけることを目的とした動作である。

と考えています。もちろん、個人的な感想です。一方、

＊2) 「みる・見る」という「いとなみ＝行為＝行動」は、世界＝宇宙＝森羅万象を、「色分けする・区別する・分かる・分ける・知覚する」ことであり、対象への働きかけを放棄＝保留することである。

と考えています。これもまた、あくまでも、私見＝愚見ですが。

上で述べた2つの定義＝フレーズの大きな違いは、

＊「見る者」と「見る対象＝見られる対象」とのかかわりの違い

にあります。上記の2つを、さらに別の言葉で言い換えてみましょう。

＊1) ヒトは、何かを「みる・見る」とき、何かを期待する。わくわく、どきどきする。

＊2) ヒトは、何かを「みる・見る」とき、何かを悟る＝発見する＝知る。驚き、啞然とする。

たった今書いた2つのフレーズを、今回のテーマである、

＊「視線」と「美醜」or「虚実」

にからめて、さらに書き換えてみます。

＊1) すげー美人だ！ or カッコいい！ or 美形だわー！ or なんてぶさいくな！

＊2) そうだったのか！ ＝なるほど！ ＝へえーっ！ ＝あれっ！？ ＝ほおー！ ＝わかった！ ＝Eureka（エウレカ）！

となりますが、少々だけ過ぎてしまったので、もう少し、かみ砕いて説明を加えます。

1) の場合には、「美醜」が意識にあります。「美醜」は広い意味にとりましょう。「プラス=快」か、「マイナス=不快」くらい広くとってもいいと思います。何しろ、「ナンパする」「ナンパされる」という「魂胆=期待」というメッセージを帯びて=担って、「視線」という「信号」を相手に送るのです。これから、「快=気持ちいいこと」があるだろうという前提に立っている、とも言えます。

一方、2) の場合には、「虚実」が意識にあります。バタ臭く言えば、「存在と無」に匹敵する、「理屈=論理=分別」の世界を「覗き見る」行動です。ここでは「ナンパする」「ナンパされる」や「魂胆=期待」といった心理的な余裕はありません。俗な言い方をすれば、「不意打ちをくらう」という「事件=出来事」と遭遇することなのです。

＊

そろそろ、まとめに入ります。大雑把に言って、「みる・見る」とは、「視線」の働きという点から見た場合には、上述の1)と2)の2つの状況が想定できるのではないかと考えています。

拙作「バット・スキン・ディープ」は、上述の1)と2)という2種類の「視線」の在り方の「交錯」を主題にしているとも読めます。

主人公の女性は、1)と2)を混同してしまった。その結果として、悲劇が起こった。このような「解釈」もできるのではないのでしょうか。本来は、「美醜」、つまり、「プラス=快」vs.「マイナス=不快」に向けられるべき「視線」が、「虚実」、つまり、「理屈=論理=分別」に向けられてしまった。そんな倒錯した事態に陥ってしまったために、主人公は犬と人を殺めてしまったのではないかと考えられます。

深夜の公園で、火傷の跡のある自分の顔を愛犬に舐められるシーンがあります。そのさいに、自分が同情されているように感じる個所がありますが、これが伏線であり、後の2つの悲劇、つまり、犬の殺害と友人の殺害につながります。

つまり、

*美醜は皮膜に在るのみ

であるように

*虚実も皮膜に在るのみ

と言えます。これは、

*「美醜」も「虚実」も、実体はなく、「みる・見る」者のまぼろし=幻想として立ち現れる。

ということです。ただし、

*「美醜」は、わくわく・ドキドキしながら、「めでる・愛でる=ながめる・眺める」ものである。一方、「虚実」は、「不意にめぐり合う=遭遇する=悟る=知覚する」「事件=出来事」である

ために、「美醜」という感動の対象に、「虚実」という「不意の出来事」を「見てしまった=出合ってしまった」場合には、取り違えた代償として、「錯乱=狂気」または「罰=悲劇」とも言い換えることが可能な「こころの痛み=こころが壊れる」が生じる。そんな事態が起きてしまったように、思えるのです。

もっとも、犬にとっての「美醜」とは「プラス=快」vs.「マイナス=不快」の感覚であり、飼い主=ボスと犬自身との快い関係と言うべきでしょう。そこに、「虚実」、つまり極めて人間的かつ「知的」な行為である「同情」という「信号」を「事件=出来事」として見てしまった。いわば遭遇してしまった。

友人を殺めたさいには、美醜というまぼろしに、虚実というまぼろしを重ねてしまった。これも「信号」にそなわっているまぼろしの仕組みに、惑わされ裏切られてしまったのです。ある印（しるし）を「読み間違える」ことによる悲劇。「読み間違える」とはきわめて視覚的な行為、つまり「視線」のなせる業（わざ）です。

実は「まぼろし」でしかない「美」の存在を「否定=打ち消す」ために、腐り朽ちていくだけの「皮膚=仮面」をナイフで剥ぐ。空しく愚かな行為とも言えます。同時に、象徴的な行為でもあります。

＊

今、こうやって、自作を分析してみると、大学の卒論で書いたロラン・バルト論でのテーマを、あの小説を書いた頃にも引きずっていたことを感じ、啞然とします。

ちなみに、卒論で取り上げたのは、『S/Z』というバルトの批評。その批評が扱っていたのが、男女を「取り違える＝読み間違える」彫刻家が登場する、バルザックの中編小説『サラジューヌ』なのです。意識していたわけではないのですが、結果的に、バルザックの小説と、バルトの評論と、それを論じた自分の卒論と、後年に書いた自作の小説と、この記事とが、めくばせし合っている。テキスト間のめくばせ、とでも言いましょうか。おこがましいですが、そんなふうにも感じられます。

＊

込み入っていて、ややこしいですね。考えていることを、正確に書こうとすると、こんなふうになってしまうのです。自分を裏切ると言うか、考えていることを偽ると言うか、不正確になることを覚悟して、思いきって、単純化してみます。

＊マジで＝真剣に見てはならない「もの＝信号」を、マジで＝真剣に見ると、取りかえしのつかない間違いを起してしまう。なぜなら、目に見える「もの＝信号」は、すべて「まぼろし＝幻想」だからである。

では、どうでしょうか？ 具体的に言うなら、

＊主人公が、自分が同情されているように感じる

ことにより、主人公は「とてつもなく大きな勘違い」をしてしまったのです。「信号」を「読み間違えた」とも言えます。それが2つの悲劇の引き金となったのです。1つは犬の殺害。2つ目は友人の殺害。簡単に言えば、そういうことです。

◆

引用を終わります。脱線はここまでです。

話をもどします。

ぺらぺら、厚みがない

絵、写真、映画（スクリーンに映します）、液晶画面に映る映像。
文字、本、雑誌・新聞、液晶画面に映る文書。

こうしたぺらぺらであったり、厚みを欠いた表面に、いろいろな情報がのっかっているわけです。印刷されていたり、映しだされています。

すごいですよね。不思議です。不思議すぎて腰を抜かすのを忘れるくらいです。

*

薄いのに厚い。表層なのに深層。浅いのに深い。平面なのに遠近が感じられる。小さいのに大きい気がする。狭いのに広い感じがする。

反対だと言われたり思われていることが、同時に起きているのです。でも、それは言葉の世界と現実世界を混同しているから不思議なのであり、よく観察すればよくあることなのです。

この辺のことは、「短い」と「長い」が同時に起こっている」という記事に書きましたので、興味のある方はお読みください。

不思議の国じゃないですか。ルイス・キャロルは、やっぱりすごいわという話になります。そのすごさを指摘したジル・ドゥルーズはやっぱりすごいという話にもなりそうです。

この辺のことは「夢は第二の現実」と「言葉の綾を編んでいく」という記事に書きましたので、興味のある方はお読みください。

本物と偽物が区別できないどころか、意味をなくしている

現在の世界は、薄いのに厚いものに満ち満ちています。

絵、写真、映画（スクリーンに映します）、液晶画面に映る映像。

文字、本、雑誌・新聞、液晶画面に映る文書。

なんでこうなっているのでしょうか。想像力のたくましさで学習の成果だと思います。

なにしろ、写真に映った「あれ」（「なに」でもいいです）を見て、人は欲情するので、これがいちばん分かりやすい説明になるでしょう。誰もが経験していると想像できるからです。

レストランの入口近くに陳列された料理のサンプルを見て、お腹が鳴ったり、口に唾が出てくるのと同じでしょう。条件反射とも言えそうです。

「あれ」（「なに」でもいいです）というのは人、それぞれです。自分にとっての「あれ」（「なに」でもいいです）が何かは普通はひとさまには言いません。プライベートなことだからです。

＊

写真に映った映像で興奮するのは、想像力のたくましさです。人は本物を相手にしなくても欲情できるという意味です。まさか、インクや紙や画素や液晶に欲情しているのではないのは確かだと思います。いくらいろんなフェチがあるだろうとは言え、です。

とは言うものの、偽物や似たものや似せたもののほうが好きだという人がいても、不思議はありません。

現在は、本物と偽物、「複製」と「複製の複製」、本当か嘘か、こういった区別が困難になり、さらにいうなら、その区別が意味をなくしつつある時代なのです。

このことが露呈するのは、戦争が起きるときだというのは、悲しい皮肉であり悲劇だ

と思います。いまみなさんが実感なさっているのではないのでしょうか。

この辺のことは、「本物のない複製の複製、起源のない引用の引用」という記事に書きましたので、興味のある方はお読みください。

*

「あれ」の映像から、「あれ」が書いてある文章に話を移します。

人はぺらぺらの紙に印刷された文字でも興奮するのです（紙やインクや文字に欲情しているという意味ではありません、念のため）。これは学習の成果です。文字を何度も何度も見てなぞり、写すことによって、真似て学ばないと、そういう楽しみは味わえないのです。

したがって、ワンコやおさるさんは、紙の上の文字と現実を混同しません。文字と現実を混同するおさるさんがいたら、世界的な大ニュース、歴史的な大事件になるでしょう。AI並みにヒトの嫉妬と恐怖の対象となり迫害されるにちがいありません。

欲情だけにとどまりません。喜怒哀楽すべてが、文字で引きおこされることはみなさんが日常的に経験なさっていることですね。

これは小説で偽物だから感動しないよ。これは言葉であって事物でも現象でもないから、何とも思わないもん——。

そんなの嘘です。万が一そんなことを言う存在がいれば、人ではないでしょう。それは人の姿をした機械かもしれません。いまは、そんな機械がいてもおかしくない時代です。

冗談はさておき、化象とかお化けかもしれません。いるんですよ、そういうのが。以下のまとめで、その話をします

お化けごっことしての世界

まとめます。

仮象、化象、化粧。

うわべだけ、ぺらぺら。薄いけど厚い。浅いけど深い。小さいけど大きい。短いけど長い。平面だけど立体。静止しているけど動いている。

仮の物からなる世界。ぜんぶ仮のもの、ぜんぶ借りもの。

誰もが生まれときに既にあったもの——言葉のことで——を借りるのです。仮初めに。

偽物、似たもの、似せたものに満ち満ちた世界。

情報とは、知識とは、事実とは、「似せたもの」であり「似たもの」——似ているだけですから、実物や本物やソースつまり起源ではなく別物であるのは確かです——である。ひょっとすると偽物かもしれない。

というか、本物や実物のない複製の、また複製であったり、起源のない引用の、また引用ではないでしょうか。

あなたがいまご覧になっている端末の画面に映っているものがそうです。ええ、そうです、私です。そして、あなたもです。

世界は、化け物だらけ、化象だらけ。

化けた者が化けた物を相手にしてお化けごっこをしている。

似せた者が似せた物を相手にそっくりショーをしている。

似せ者が似せ物を相手に偽物ごっこをしている。

＊

ぺらぺらしたとりとめのない話にお付き合いいただき、ありがとうございました。

#小説# 漢字# 言葉# 日本語# 化粧# 本物# 偽物# ロラン・バルト# ルイス・キャロル# ジル・ドゥルーズ# 引用# 化粧# ぺらぺら

美しいって、何が？

＊

美しいって、何が？

星野廉

2022年11月14日 12:54

びくびくひくひくびくびく。

ところで、オノマトペはずっと入ってきます。音や文字が「何かに」「似ている」ではなく、単に「似ている」として入ってくるからではないでしょうか。「何か」との異なりや事なりや言なりとして無理に押し入ってこないのです。

本物のない複製の複製と起源のない引用の引用を感じます。
(拙文「つながる、かさなる、ふるえる」より)

この記事は、以下の「まとめ」だけを読んでいただいてもかまいません。

目次

**まとめ

「美しい」「え、何が？」

「動くって何が？」

「びくびくって、何が？」

「何と！」、「感動的だ」、「すごい」、「すごすぎます」、「おーまいがっ」、「あら」、「おげーっ」、「マジ？」

「何かに似ている」というよりも「単に似ている」

なんだか分かんないけど**

まとめ

今回の記事の底に流れるイメージです。

- ・生まれたときに、すでにあった。
- ・なぞって、つまり真似て、さらに何度も何度もそれをくり返す。

- ・引用の引用、複製の複製。
- ・起源なき引用、本物（実物）なき複製。
- ・空疎、空っぽ。
- ・まわりに同調して仕方なくつかう。
- ・擦り切れる、中身が薄くなる、そのうち存在感がなくなる。そもそも「なかった」もの。
- ・思わず発してしまう。
- ・自然発生的に出てくる、漏れ出る、生理現象に似ている。
- ・すっと入ってくる。
- ・「何かに似ている」というよりも「単に似ている」。

何かって、言葉のことです。

- ・意味を考えたり意識したりはしていない、その時点では意味なんてない。
- ・「似ている」だけがある感じ、オノマトペに限りなく近くなっている。
- ・オノマトペとか、感動詞とか、決まり文句とか、流行語に近い感じ。
- ・思考停止とか判断停止とは言わないまでも、無意識のうちに、条件反射的に、または生理現象のように、すっと入ってきて、すっと出てくる。
- ・人はまず「○△X」という言葉を作って、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い悩む生物である。
- ・そもそも「まず「○△X」という言葉を作った」現場に立ちあってなどいない。
- ・なんとなくその時々の弾みで出てくる。知らんけど。

「美しい」「え、何が？」

誰かが「美しい」とつぶやくなり叫ぶなりしたとします。近くにいる人がそう口にしたのですが、何を見てそう言ったのか分からないとき、聞いていた相手が「何が？」と聞き返すという状況をよく見かけます。

日常生活でもテレビドラマでも映画でも、小説でもあったようなシーンです。

「美しい」ほどよく口にされたり文字にされる言葉はないという気がします。言葉と言いましたが、形容詞とも言えます。「美しい」という言葉が複製とか引用にも思えてきます。

言葉は誰にとっても生まれたときに、すでにあつたものです。それを聞いてなぞって、つまり真似て、さらに何度も何度もそれがくり返されて習得していきます。文字であれば、その習得に時間と労力を要します。

＊

「美しい」は、「わんわん」とか「わんこ」とか「わんちゃん」とか「いぬ」とは違って何かの事物を指すもの（名詞とも言いますが、品詞はいったん忘れましょう）ではありません。小さな子どもが「美しい」と言うのを聞いた覚えがありません。「きれい」ならあります。

こんなことを考えていると不思議でなりません。でも、これに類したことをよく考えます。言葉のありようについて、ああでもないこうでもない、ああだこうだと思いをめぐらすのです。

「美しい」とか「わんわん」とか「きれい」と口にするなり文字にする行為は、引用であり、「美しい」という声や文字は複製だという気がしてきました。

真似て、それをくり返しているわけですから、引用の引用、複製の複製でしょうか。しかもその引用の起源と複製の本物が不明なのです。不明どころか「ない」というのが実感です。誰にとってもそうではないでしょうか。

＊

まれに、ある言葉や言い回しを初めて聞いた時や目にした時を覚えていることがあります。

同年齢という意味の「ため」とか、本当という意味の「マジ」を初めて聞いた時を覚えています。新鮮な響きがあったので、たまたま記憶されているのでしょう。ほかには思いつきませんが、そういう言葉が他にもあるかもしれません。

「ため」と「マジ」を初めてつけた時のことは覚えていません。いまでも、めったに口にしない言葉です。

＊

「美しいって、何が？」

「美しい」ほどよく口にされる言葉はありませんが、ということはいろいろな事物やありさまや風景が「美しい」なのでしょう。世界は「美しい」に満ちていると言えそうです。

「美しい」という言葉が空疎であるという見方もできるでしょう。空っぽだという意味です。最近、「美しい」をつかうのにためらいを覚えるようになってきました。つかうのは、まわりに同調して仕方なくつかう時くらいです。

言葉はどんどん口にし文字にしていると擦り切れてきます、中身が薄くなってそのうち存在感がなくなります。そもそも「なかったもの」ですから当然かもしれません。

それが起源なき引用であり、実物なき複製なのかもしれません。

今回はそういう話をしています。

*

「美しいって、何が？」

「動くって何が？」

いわゆる動詞でもありそうですね。

「動く」

「え、何の話？」

「ぴくぴくって、何が？」

いわゆるオノマトペなんかでも、おおいにありそうです。

「ぴくぴく」

「いやだ、ニヤニヤして、何こと？」

「何と!」、「感動的だ」、「すごい」、「すごすぎます」、「おーまいがっ」、「あら」、「おげーっ」、「マジ？」

代名詞らしきものも、名詞と呼ばれているものも、いわゆる形容詞もセンテンスもあります。何でもありですね。

こういうのは例の感動詞というのでしょうか。英語の文法では間投詞と言っていた覚えがあります。喜怒哀楽をはじめ、どんな感情でも感覚でもいいのですが、広い意味でも感動があって思わず発してしまう点が共通しているようです。

「思わず発してしまう」がポイントのような気がします。自然発生的に出てくるとか、漏れ出る感じ。生理現象に似ています。

「何かに似ている」というよりも「単に似ている」

びくびくひくひくびくびく。

ところで、オノマトペはすっと入ってきます。音や文字が「何かに」「似ている」ではなく、単に「似ている」として入ってくるからではないでしょうか。「何か」との異なりや事なりや言なりとして無理に押し入ってこないのです。

本物のない複製の複製と起源のない引用の引用を感じます。
(拙文「つながる、かさなる、ふるえる」より)

「つながる、かさなる、ふるえる」という記事を書いて、上の箇所がずっと気になっていました。私は自分の書いた記事にツッコミを入れながら新しい記事を書く癖があるのですが、今回もそうになりました。

オノマトペに限らず、言葉がすっと入ってきたり、すっと出ていくとき、その言葉は「何かに似ている」というよりも「単に似ている」として入ってくるのではないか。そんな気がしています。私の好きな言い方をすると、本物のない複製の複製であり、起源のない引用の引用です。

「すっと入ってくる」「すっと出ていく」がポイントです。意味を考えたり意識したりはしていない状態です。その時点では意味なんてないのです。「似ている」だけがある感じ。オノマトペに限りなく近くなっている状態をイメージしてください。

くり返しますが、どんな言葉でも、フレーズでも、センテンスでもいいのです。オノマトペとか、感動詞とか、決まり文句とか、流行語に近い感じ。思考停止とか判断停止とまでは言いませんが、無意識のうちにとにかく、条件反射的に、または生理現象のように、すっと入ってきて、すっと出ていくのです。

エポケーまではいかず、ぼけーとかぼけーという、ほうけた感じ。自分のことだろう、と言われれば、たしかにそうなんですけど。否定はできません。イメージの韻とかいう、妙ちきりんな連想を放ちながら文章をつづっていますので。放連想、呆廉想。

なんだか分かんないけど

言葉がすっと入ってくるし、すっと出ていく。とくに、話し言葉。空気みたいと言え
ば、空気みたい。

他の人がその言葉や言い回しをつかうのを初めて見聞きした時のことも、ふだんは頭
にないのです。学校で習った記憶もあるけど、その時の記憶も曖昧か不明で、なんだか
分かんないけど、知らんけど、すっと入ってくるし、自分でも口にしたり、場合によっ
ては書いたりするのです。

たぶん、つかっているその時点では意味はないのです。状況だけがその言葉を呼び起
こす感じ。

人はまず「○△X」という言葉を作って、その次に「○△Xとは何か？」と問い、思い
悩む生物——これまでにいろいろな記事で何度も書いたフレーズです——だからじゃな
いでしょうか。

そうだとすれば、そもそも「まず「○△X」という言葉を作った」現場に立ちあってな

どいないのです。誰って、誰もがです。生まれたときに、すでにまわりにあったのです。それをなぞってまねて、知らない間に自分の中であって、それがなんとなくその時々の弾みで出てくるのです。知らんけど。

知らんけどって、何が？

*

また、この記事のどこかにツッコミを入れて記事を書きそうな気配を感じます。

#イメージ # オノマトペ # 形容詞 # 動詞# 感動詞 # 間投詞 # 決まり文句 # 複製 # 引用 # 流行語 # 美しい # 影# 言葉

現象、現象

＊

現象、現像

星野廉

2022年11月13日 08:07

私は似たものが好きなのです。似たものに取り憑かれているようです。これに尽きます。

(拙文「イメージの韻」より)

目次

文字をながめる

現象

あらわれる、立ちあらわれる

現像

つらなる、それる、ずれる

形があらわれる、であう、であってしまう

象、像、実、虚

巨象は虚像であり、象は像でしかない

像をつくる

文字をながめる

現象。

辞書は参考程度にして、原則として引きません。ただ漢字をひたすら見て、思いをめぐらします。漢字からなる熟語のイメージを思いうかべます。

文字の音と形をながめ、それが呼びさますイメージをすくい取ろうと努めるのです。深く探りはしません。表面にとどまります。

蘊蓄や含蓄や権威には興味がありません。わくわくしないのです。だから、起源なき引用とか実物なき複製なんて言っているのでしょう。

アメンボのように水面をすいすい滑り、ゲンゴロウのように深くもぐらないという意味です。

私の書く記事は、ぜんぶものごとの表面をなぞったものです。深く立ち入ることはありません。ひたすら、表面を見てなぞるだけなのです。知ったり分かるよりも気づくの待ちます。

寝入り際の夢うつつの心境で書くことを心がけています。調べたり、誰かの本を引用するのはできるだけ控えます。寝際や死に際に本や辞書は使えませんから。

だから絵空事やぼんやりしたとりとめのないことしか書けません。いい加減な人間なのです。この記事のタイトルを見れば一目瞭然ですよ。半分眠っているとしか考えられません。

現象

現象。

形が現れている、ということですね。

あらわれる、現れる、表れる、顕れる。露わになる、顕わになる。

漢字をまじえると意味が見えてきます。意味が分れて分かってくる気持ちになります。分かっているのかどうかは不明です。

見える気がするというのが正確な言い方だと思います。見えるや見るや眺めるは大切です。分かるや知るや悟るよりも大切だと私は考えています。見るほど難しいことを私は他には知りません。

ちょっと遊んでみます。

あらわれる、現れる、表れる、顕れる。露わになる、顕わになる。

現象、表象、顕象。露象。

おお、顕象ってかっこよくないですか？ 気になったので検索してみたら、ありました。

「けんしょう」とも「げんしょう」とも読むようです。私は初めて見ました。

きょうの収穫です。

顕象って、お坊さんの名前にありそう。あと、お寺の息子さんとか。「けんしょう」と読みます。響きもかっこいい。

露象もありましたよ。中国語なのでしょうか。画像もありましたけど、とくに興味は惹かれませんでした。

あらわれる、立ちあらわれる

形があらわれる。形が見える。形が姿をあらわす。形や姿があらわになる。

こうやって言葉を置き換えて転がすとわくわくします。現象という言葉があらわれているとは思いません。移り変わっているのです。

見ることは、見えないものと置き換えることです。そのもの自体を見ることは、たぶんに人にはできません。知っているものや、見たいものに置き換えてしまうからです。

＊

現象。形が立ちあらわれる。

立ちあらわれるはかっこいい言葉です。背筋が伸びる思いがします。形がすっと立つ。

いいですねえ。

「立つ」や「立てる」は見せるための動作ですから、言葉の立ち振る舞いとかたたずまいがかっこいいのでしょうか。

意味が立ちあらわれる。

この言い回しが好きで、これまでに何度も記事で使ったことがあります。

現像

現象というと、私はどうしても現像を連想します。

現像、現象。

字面はそっくりとは言いませんが、似ています。象も像も、姿や形のことです。人偏が付いただけで、気難しげに私には見えます。

象は、動物の象に似ています。博物館で見たマンモスの骨みたい。そう思うと、ますますそう見えてきます。生きたゾウではなく、骨なのです。骨組みというか。

まさに象形文字。

*

現像は「写真を現像する」ときだけに使う言葉のようです。

正確には「フィルムを現像する」みたいですが、写真にはぜんぜん詳しくないので、現像の意味もよく分かりませんというか知りません。

現像も、やはり像があらわれてくると理解しておきます。深入りはしません。

深入りしないというのは、本物のない複製の複製と起源のない引用の引用を相手に積極的に戯れようとする姿勢とも言えます。

居直って格好を付けてごめんなさい。でも、本心なのです。

＊

写真を撮るプロセスについても、現像や焼き付けや引き伸ばしについてもまったく知りません。

勝手に想像する、つまり空想するしかないのですが、そのほうが好きだったりします。

本を読まずにタイトルを見て、その内容をでっち上げるのが好きなのと似ている気がします。映画はぜんぜん観ないのに、映画の話が大好きなのとも似ている気がします。

大学でフランス文学科に在籍していながら、文学作品はそっちのけで批評ばかり読んでいたのとも似ている気がします。⇒「【小説】知らないものについて読む」

つらなる、それる、ずれる

「現像」で思いだした言葉があります。

「解像度」です。

カメラや写真については無知なのですが、スパイ衛星とか衛星カメラとかの話に出てきたのを覚えているのです。衛星のまわっている遙か上空から、高性能のカメラで地上を写すのだそうですが、たしか三十センチくらいのものを識別できたとかという話でした。

本当ならすごくないですか。衛星写真と言えば、テレビ番組の「ポツンと一軒家」ですが、あれだけでもすごいと思うのに、三十センチの物が見えるんですよ。すごすぎます。どうしましょ……。

解像。

解説、解析、分解、解剖の解ですよ。微に入り細に入り鮮明に、像を解きほぐし写し映し出すというイメージ。あくまでも、「うつす」の結果である「うつし」つまり影なのです。

カメラの性能かレンズの性能か知りませんが、こんなカメラをつかって人を撮影したら、小さなほくろ、かすかなシミ、毛穴、微細な皺しわや襞ひだまで——いやらしく響いたらごめんなさい——徹底的に写しとるという感じ。どうしましょ……。

わくわくどころか、どきどきしてきました。

解像、改造、海象。

海象とはセイウチのことだそうです。これは知っていました。海の象さんですか。なるほど。

海馬とか海豚とか海牛とか海鼠とか海狸とか海虎とか海豹とか海獺とか海猫(!)とか海猿(?)とか海狐(ちゃうか)を思い出しましたが——時期こういうことに凝ったのです、もう懲りましたけど、凝り性で懲り性なのです、ただしその意味はほとんど忘れちゃった——切りがなさそうなので、ストップします。こういう連想は楽しいです。いわば、イメージの韻を感じませんか？

ここでは「正しい」「正しくない」はやっていません、念のため。

連想は文字どおり、連ねて想うことですが、つらねる、ならべる、それる、ずれる、よれる、もつれる、という具合に、どんどんずれていくのが連想やイメージの韻の醍醐味だと思います。

形があらわれる、であう、であってしまふ

話をもどします。

写真を撮り、自分で現像や焼き付けや引き伸ばしをする人は、わくわくするの連続なのでしょうね。

勝手に空想してみます。

ファインダーを覗いた瞬間に「形があらわれる」が始まる。レンズとかピントとかを調節したり、アングルっていうんですか、撮る位置なんかを変えたりするたびに、新たな「形があらわれる」と出会うにちがいありません。

そして、暗室に入り、自分で紙の写真にする。現像するときなんて、どきどきなんてしょうね。紙の写真ができあがるまでには、さらに「形があらわれる」を何度も経験するのですから、想像しているだけで息が苦しくなりそうです。

であいは苦しいものではないでしょうか。巧み、仕組むものではないからだと思えます。アポなしなのです。マッチングアプリもつかわずに。不意に唐突に、であってしまうのです。現像という言葉にはそのイメージがよく出ていると思えます。

イメージは個人的で私的なものです。それが私のイメージのイメージ。人それぞれ、人生いろいろ、イメージもいろいろ。

象、像、実、虚

現象、現像と来たので、先日投稿した記事から関連する箇所を引用してみます。象と像の話です。

*

巨象は虚像であり、象は像でしかない

人は全体をとらえることができなくて、全体は抽象であって観念でしかない。さらに言うなら、人にとっては部分だけがかろうじて体感できるリアルなのであり、全体とは抽象つまり学習した知識である。こんなふうには言えそうです

(中略)

目隠しした複数の人たちが、それぞれ象のあちこちを触って「○○みたいなもの」と言う例の話を思いだします。目隠しをした人たちに、それは「巨大な象」だと教えてあげ

でも、それは学んだ知識でしかないわけです。巨象は虚像、つまり虚構でしかなく、たとえ目隠しを外して象を見せたとしても、象は像でしかないのです。

さらに言うなら、実像は虚像、実は実は虚、色即是空、実即是虚。

※以上は、Twitterでのデレラさんとのやり取りから生まれた文章です。ここでデレラさんにお礼を申し上げます。ありがとうございます。

以上は、拙文「本物のない複製の複製、起源のない引用の引用（更新：2022/11/08）」から引用しました。ツイートにある「巨象マヤ」、懐かしいです。

像をつくる

像は作るのですね。

像は人の作った影（「写る、映る、移る」の結果という意味です）なのであり、写真もフィルムの映画もデジタルの映像も、人が手を加えて作った影に他なりません。加工とか修正とか編集のことですが、言葉で知っているだけで具体的にはどんな作業なのか知りません。

というか、見ること自体が像を作るわけです。ヒトがヒトに備わっている知覚機能と脳の機能を使って見ているわけですから。

「見る」は絶対的なものではなく、他の生き物たちとくらべれば、相対的なものであるはずで。「見る・見える」なんて言葉があるから、言葉の世界に入ってしまった、「見る・見える」が当り前に思っているのではないのでしょうか。

（言葉はものを見えなくしているように思えてなりません。逆に言葉によって見えることもありますけど。）

しかも、人は「見る」ときに、何かと置き換えてしまいます。「何か」に「何か」を見る、いや見てしまうのです。前者の「何か」と「後者」の何か異なるのは言うまでもありません。

自分の知っているものや自分の見たいもの——ものというか意味や感情やイメージ、場合によってはメッセージや物語でしょう——に置き換えないと「見えない」という意味です。

知っているからそれを見る、見たいからそれを見る。「見る」はヤラセなのです。

*

こんなふうに言葉でまとめていること自体が、ものを見えなくしているのですね。見ることは難しいです。

#文字 # 漢字 # 言葉 # 日本語 # 形 # イメージ # 似ている # 見る # 象# 像 # 複製
引用

つながる、かさなる、ふるえる

＊

つながる、かさなる、ふるえる

星野廉

2022年11月11日 08:45

もともとが、つながり、かさなって動く、うごめく。ふるえる。ぶれる。ゆれる。からまる。むすばれる。むすぼれる。

(拙文「つながり、かさなる、むすぼれる」より)

「むすぼれる」とは異なり「むすぼれる」にはネガティブな意味も含まれていますが、人のかかえている「むすぼれ」は容易には晴れないし解けない気がしてなりません。

「つながり、かさなる、むすぼれる」は言葉をテーマにして書いた記事です。人（個々の人類）の内には、まるで線路のような見事な筋がもともと敷かれていて、それがあって「つながる」と「かさなる」が生まれるというイメージです。言葉のことです。

「つながり、かさなる、むすぼれる」を書くにあたっては、バベルの塔の話が頭にありました。線路は一度絶たれ壊されたのです。それが再建されて網を広げつつあるのが現在だという気がしてなりません。むすぼれはさらにむすぼれつつあります。

本記事「つながり、かさなり、ふるえる」では、「つながる」と「かさなる」をヒト以外の存在と言葉以外の現象にまで話を広げます。相変わらず大風呂敷を広げますが、いまの私にはこういう空想しか楽しみがありません。

「これとこれは似ている」「これとこれはそっくりだ」「これとこれは同じ」

私は似ているものが好きなのです。似ているものに取り憑かれているようです。これに尽きます。

(拙文「イメージの韻」より)

「つながる」と「かさなる」に加えて「似ている」というイメージで空想をふくらませてみます。

目次

小動物のピクピク

相場のピクピク

世界中でピクピク

姿と形を変えるピクピク

出る、出す、流れる、流す、入る、入れる

似ている

小動物のピクピク

株については何も知りませんが、ニュースで株式市場の大きな動きが報道されるたびに頭に浮かぶのがハムスターです。

昔飼っていたことがあり、そのときにピクピク体を動かすのを不思議な気持ちで眺めていたのを思い出します。

小動物は短命なので悲しい思い出もあるのですが、ときどきこうやって記憶の中にやってくるあの小さな動物を愛でています。

自然と手と指が動いて、あの子を撫でていたときの感触がよみがえります。

テレビで生き物の生態を撮った番組を見るのが好きなのですが、小動物を見るとそのピクピクやビクビクやキョロキョロやタタターという仕草に魅了される自分がいます。

やっぱり株に似ています。正確には株の値動きというのでしょうか。

相場のピクピク

株式や商品の相場では、値動きをリアルタイムで表示するみたいですが、表示は数値

であったりグラフであったりします。

新聞での表示は静的なものですが、ネットでの表示はまさにピクピク、ビクビク、キョロキョロ、タタターなのです。

デジタル化された数字がまばたくように細かく点滅することがあります。グラフの線もよく見ると微かに点滅していたりします。

生き物を見ているような錯覚におちいりますが、これは錯覚ではなくひょっとしてまさに生き物を目にしているのかもしれない。

＊

数値もグラフも何かを指しています。

ピクピクというと、針が数字を指すアナログ式の量りや、ガスのメーターのような測定器を連想しますが、ああいう針は指しながら振れます。大きく振れる場合もあれば、小刻みにビクビクすることもあります。

振れる、触れる、狂れる、震れる、ぶれる。

やっぱり株式の値動きはピクピクでありビクビクです。つまり震えということですね。ビビっているとしか思えません。感情がこもっているのです。

あの動きは誰かのおびえであったり、驚きであったり、喜びであったり、思考停止とか判断停止であったり——あの動きの前にどんな思考や判断が可能だということでしょう、任せるしかないのではないのでしょうか（何に任せるのかも分からないままに）、全面降伏です、まかせ、まけるのです——、錯乱であったりするのではないのでしょうか。

世界中でピクピク

やっぱり生き物です。生きてるとしか思えません。世界でみんながビクビクしてい

る。機械がピクピク指すのを見て、またみんなで振れるのです。そして震えるのです。ふれるがつつぎつつぎとうつるのです。

振れる、触れる、狂れる、震れる、ぶれる。

擬人化する生き物であるヒトにとって、その目に映って動くものすべてが生き物であり、森羅万象という名の自分自身の身体のみなるのです。擬人化とは鏡です。

鏡の中を覗きこむと、そこには姿というよりも動きが見えます。動き移ろわないものは見えないのです。自分の姿のことですが、像というよりも表情と顔つきと、ときの経過が見えます。私の場合には、いつもおびえた表情が、そこにはあります。爆弾を抱えたみたいとか、途方に暮れたかのような顔なのですが、そういう気分のときにしか、鏡を覗きこまないからかもしれません。自分で自分の顔色をうかがっているのかもしれませんが。

ピクピクという身振りだけがひとり歩きをしているかのよう。ピクピク、ピクピク、ドキドキ、きょろきょろ、おろおろ。

*

ピクピクが世界を動かす。世界がピクピクにシンクロする。ドキドキ動悸に同期する。

ドキドキ、キドキド。喜怒哀楽。世界同時同期。

音楽の世界で使われている、指揮棒、メトロノーム、録音スタジオなんかにあるピクピクと針の動く機器、波形で表示されるピクピク。

ピクピクは波でもあるそうです。

小刻みな振動、音声の波、うねり。

上下運動として表示される波は、ジグザグでもあるように思えます。

右往左往、千鳥足、蛇行、蛇の動き。

風に揺れる植物、日光や雨風に左右されながら成長する植物なんかも、見る位置を変えたり、見ている時間を速めたり、逆に遅くすると、それぞれ似ているように見えます。

姿と形を変えるピクピク

ピストン運動、上下運動、行ったり来たり、往復運動、ぴくぴく、ゆらゆら、びくびく、ジグザグ、ぴくんぴくん、ひくひく。

いやらしく聞こえたら、ごめんなさい。

なぜか知らないけど粘膜や襞がひくひくしてしまう、という話をしているのです。心の襞が。

知れるは痴れる。痴れると焦れる。じりじり。

＊

音と振動と波と光。これって、同じなんでしたっけ？ 物理では。

詳しいことは知りません。ただイメージと言葉に身を任せるだけ。

幼いころに見たレコードとプレーヤーを思い出します。保育園のプレーヤーを隠れていじっていたのです。

電源を落としたプレーヤーの皿にレコードを載せて、こっそり回してみる。かすかに音がする。旋律は聞き取れませんが、音がするのです。ぞくぞくしました。

＊

いま思うと、あれは針がレコードの溝を走る音なのですね。ぎざぎざで凹凸のある溝を、針が動き、針ががったんごっとんと揺れて振れる。

がったんごっとなんという上下運動が、なぜかきいきいとかしゃーしゃーという乾いた音になる。電気とつなぐと、かすれた摩擦音が艶を帯びた音色にうつり変わる。

どういうわけか、溝を走る針の上下運動が、空気の振動となり、それがさらに耳の鼓膜を震わせて、人の心と魂を震わせる。

＊

ぴくぴくと、ごっとなんごっとなん、きーきーと、しゃーしゃーがシンクロする。

シンクロが姿と形を変えて、シンクロする。

なぞるがなぞるをなぞる。何をなぞっているのかが不明ななぞるをなぞる。

出る、出す、流れる、流す、入る、入れる

ぶるぶる震える生き物たち。ぴくぴく動く生き物たち。ひくひく小刻みに蠢く皮と粘膜。ぶるぶる震える内臓。ぴくぴく動く器官。どくどく流れる血液、しゃーしゃー流れる、リンパ液、〇〇液。

たらたら流れおちる汗。ぽたぽた落ちる体液。ぽとぽと、じゃーじゃー、ぼっとなん、ぼつり。ぷーっ。ぶーっ。ぶすーっ。出る、出す。漏れる、漏らす。排泄。生理現象。

はあはあ、ひゅーひゅー、あはん。おお、ああ、うーん。あゝー。呼吸。声。うめき。

＊

ごっくん、ごくり。むしゃむしゃ、もぐもぐ。くちゃくちゃ。やむやむ。食事。摂食。入れる、入る。

箸やフォークやスプーンやナイフを使えば、もっとにぎやかでしょうね。しゃべりながらの会食もあるでしょう。黙食もあるでしょう。個食や孤食もあります。

わいわい、がやがや、しーん。

*

何をするにも、上下運動（見方を変えればジグザグ運動）、往復運動、ピストン運動があるようです。音もします。お供します。伴走。伴奏。

移る、通じる、流れる、走る、移動する。震える、振れる。曲がる、曲げる。こうした動きや姿は、生き物の内部での動きとしても、生き物の体の動きとしても、おこっています。

こじつけです。そう思うと何でもそう思えてきます。そう見えてきます。被害妄想みたいにしつこくつきまといます。

固定観念、強迫観念、オブセッション。疑心暗鬼。壁の染みの模様や顔。天井の模様、雲の形。

そうになっているのか。そう見えるだけなのか。

そう見える。そう感じられる。そう思われる。そう考えられる。

知れるは痴れる。訳が分からない。分けても分からないでしょう。

それが「意味」というものなのでしょうね。人は森羅万象に、模様と形と顔と自分を見るのでしょうね。見えてしまうのでしょうね。見ずにはいられないのかもしれませんが。何をもって、意味をです。

意味は疲れます。「異なる」を基本としているからかもしれません。

憑かれて突かれて付かれて疲れる——言葉を意味としてとらえると疲れます。意味を取ることで異なって見えるからでしょう。ただ音として聞いたり字面をながめているだけなら、言葉は疲れません。それでいて、言葉は体にずっと入ってきます。波だからかもしれません。

びくびくひくひくびくびく。

ところで、オノマトペはずっと入ってきます。音や文字が「何かに」「似ている」ではなく、単に「似ている」として入ってくるからではないでしょうか。「何か」との異なりや事なりや言なりとして無理に押し入ってこないのです。

本物のない複製の複製と起源のない引用の引用を感じます。

似ている

シンクロや同期の基本は「似ている」だと思います。「同じ」とか「同一」でなく、あくまでも「似ている」です。

似ているは印象ですから、検証できません。特定も確定もできません。

「似ている」を基本とする私の考えるシンクロとは、普遍や客観や真理といった壮大な大風呂敷とは遠いものです。大風呂敷を広げてはいますが、すけすけ、すかすか、ぺらぺらなので、無いものねだりはなさらないでくださいね。ここで言う「似ている」は本物のない複製の複製であり、起源のない引用の引用なのです。

厳密な意味での「同じ」はヒトの知覚では無理でしょう。精密な機器を使えばできるかもしれませんが、誤差やエラーがつきものらしいです。しかも最終的に「見る」のはヒトの知覚ですから、危うさは消えません。

「同一」はその語義からして、世界に、あるいは宇宙にたった一つしかなさそうですけど、私にはその意味が分かりません。感知できるヒトがいるとも思えません。

一個人として、つまり一匹のヒトの端くれとして大切なことは「似ている」です。これしかないのです。高望みはしません。贅沢は申しません。

*

病院にはたくさんの機器があります。入院すると分かりますが、ぴくぴくの親戚に満ちているのです。病院は信号に満ち満ちています。

点滅は危険信号です。ぴかぴかが急かせます。「見て見て」と言っています。

信号は断続的な0と1、○とX、白と黒でないと、生き物には通じません。断続でないと、そもそも注目しないのです。

断続はノックなのです。こつこつ。シロクロシロクロ。このノックが通じると生き物もシンクロします。シロクロにシンクロするのです。うつるのです。

シロクロ、シンクロ、目が白黒。

どきどきします。心臓バクバク。どきどき動悸に同期。同期に動悸する。同期に同期する。

同期が同期してはいけませんか、社長？ 一同団結して、似たり寄ったりではいけないのでしょうか？

同期に動悸してはいけませんか、部長？ いつから社内恋愛が禁止になったんですか？

世界同時同期。同期会絶賛常時会員募集中。

ときに、シンクロはパニック暴走します。エラーやノイズや邪念も発生します。

大きなランプが、ばかばかし出したら、大事です。避難しなければなりません。

入院してベッドで寝ていると、遠くでピーポーピーポーが聞こえることがあります。

院内に緊張が走ります。

スタッフの動きも活発になります。ばたばたと歩く音、何かを引きずっている音もし

ます。

びくびく、びくびく。自分の中にある動きに耳を澄まします。心が静まるのを待ちます。やがてしーんのなかでの点滅だけになります。

妄想と邪念も静まります。

＊

病室の窓からは、空が見えました。

晴れもいいですが、雲が見えるとほっとする自分がいました。

雲は動くからです。表情があります。あれはあれだ。あれに見える。あれに似ている。

似ているは人をなぐさめてもくれます。

雲が見えないときには、目をつむりました。そこにも「似ている」がありました。

自分がびくびくそのものであること、自分がびくびくの一部であることを感じる一瞬でした。

びくびくはやさしい言葉。

似ているとは、何かとつながり、かさなる気持ちのことです。自分が何かに、うつる気持ちでもあります。

それ以上、何も要らない。そんな気持ちになります。

#小説# 言葉# 日本語# 株# 相場# 動詞# 小動物# 値動き# ピクピク# オノマトペ
シンクロ# 同期# 似ている

実物のない複製の複製、起源のない引用の引用 PART I

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
